

---

最弱能力者の英雄譚 ～二丁拳銃使いのFランカー～  
土佐牛乳

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱能力者の英雄譚 く二丁拳銃使いのフランカーく

### 【作者名】

土佐牛乳

### 【あらすじ】

☆あらすじ☆

世界では、能力者という者が存在している。そんな世界で、能力が無いと判断され、落ちこぼれの烙印《Fランク》を押された少年タスク。彼は能力者を育成する学園において、実戦授業が受けることができない唯一の最底辺だった。しかしある日、伝説にして、最強にして、無能力者の極致である恩師、剣・ミサキにより、戦闘技術の才能を見込まれ、能力者学園で開催される、通称ランク祭に出場することとなった。最底辺を生きるタスクは、その才能を開花させ

ながら、自身の隠された能力《さいのう》に気づき、学園最強の戦士へと成り上がる。――なろうじゃなくてな、俺はなるんだよ!!

## プロローグ

いつものように指定された場所に行き、何も変わらないような毎日を送る。

そして誰もいない家に帰り、ただ当たり前に時が過ぎるものだと思っていた。

——それはある日を境に変わっていった。

ある晴れた日、僕はいつものような日常を過ごしていた。

何かが変わらなくとも、何かが失うというわけでもなく、それでも確かに日常というにはそれは全うに当てはまるようなそんな日だった。

「ただいま」

誰もいない家へ上がる。これもまた僕にとっての一つの日常だった。

数年前におかあさんは、僕とお父さんを置いてどこかへ消えてしまった。

だから僕は、小学六年生にして一人暮らしというわけである。

たまたま今日は、久しぶりに父さんが家に帰ってきた。

「ひさしぶりだなタスク」

その時のお父さんの顔は、どこかはるか先の未来のような、遠くを見ているように、その目は今の僕を写してはいなかった。

「お父さん、今日はお仕事おわったの？」

まるで無邪気を装うようにして彼に、お父さんにそのような質問を投げかけていた。

でも、僕は、あのとときの僕は、お父さんが久しぶりに家に帰ってきたということが、うれしくてうれしくてたまらなかった。

だからだと思う。僕が彼に演技をするような言葉使いであったのは。

だけれどそんな僕を脱ぎ払うかのように、お父さんは、僕の腕を引っ張った。

むりやり彼の車へと投げられるようにして引っ張ってこられた。その時の僕は、何かサプライズがあるのかという期待と、いつもはっきりと僕に対して受け答えをしてくれるお父さんとは全く違うような様子に、なにかこれから始まるのかという戦慄に似た感情が幼きながらに駆け巡っていた。

そして車のなかでの会話は一切無く、僕は大きな病院のような施設へと連れてこられたんだ。

「お前を救うためなんだ…… 許してくれ」

その言葉と共に、気づけば俺は、見知らぬ医療施設の手術室のようなところに横たわっていた。

そしてその現状に理解すらできなくなっていた、僕をよそに現実には進んでいく。

次の瞬間、頭を鋭い何かで切り付けるような痛みと共に、暗闇が僕の視界を覆い包んだ。

「父さん……？」

たしかそんなことを思いながら、僕はお父さんが暗闇で見えなくなるまでしっかりと彼の顔を見ていたような気がする。

長い時間眠っていたのか、重いまぶたを開けてみると、僕の周りに広がっていたのは、辺り一面炎の海だった。

一大事と言わんばかりに誰かの声が悲鳴が、ここまで聞こえてきた。

僕はベットにシートベルトのようなもので縛られていて、身動きができないでいた。

火は僕の全方角を一步づつ進んでいく、まるで炎が僕の存在を否定しているかのようにもあった。

もちろん動けなくなった僕は、身を焼かれる感覚を、脳がしびれ

るくらいにずっと味わった。

するとこの世のものとは言えないほどの爆音が僕を襲った。  
意識はあった。体が砕け散っていく感覚までもしっかりと。

身が焼けていく激痛が僕にただ淡々と伝わっている。

炎に包まれ、手足もなにもかも無くなってしまった凄まじい激痛  
の中、僕は気づいた。

僕は現実ぼくを終わることができないと。



## 第一話

朝、カーテン越しに熱い日差しが顔面に当たる。

長いこと当たっていたのか、顔の熱さで目が覚めた。

ベットに寝ていた体をゆっくりと起こす。

窓から放たれる熱い日差し。今が七月だということがわかるような眩しさだ。

そんな日光に当たっていたためか、いつも見る夢を見ていた。

汗だくの頭を抱えながら、夢の残像を思い浮かべる。

ただ熱い…… あれは火だったのかもしれない。自身の体が無くなっていく激痛。

そしてこの右手に、能力印と思われるものが刻まれる痛覚。

思い返すたびに気が狂いそうになってしまう。

少し時間が経つと、夢のことはきっぱりと忘れることができた。

そしてチャラランとゆかいな音を出した携帯端末にメールの着信を確認した。

どうやら剣先生からだった。

「お前だけ筆記授業の出席簿の数が少ない。今日は、私も休みだからワンマン授業ができるな（ピースの絵文字）」

その文を見て、頭を抱える。

ああ、なんで俺だけ…… やりたくねえよお……

携帯端末をテーブルに投げると、行くのもしんどいため再び布団

の中へと入る。

そうだ、このメールは見てなかったことにしよう。そうしよう。

そうして再び布団の中へと入る。

すると二度目のメールが届いた。

「わかっているとは思いが来ないと死刑だゾ（はーとの絵文字と親指マーク）」

死刑は嫌なので早速着替える。

俺の名前は、佐部タスク。

この学園の唯一の落ちこぼれ（《フランク》）であり、無能力者だ。

毎回のようには追試やら、課題の提出が遅れてしまうのは俺の無能とは関係がない。

いつもの制服に着替え、自宅を出た。

「ぶっフォッ！！ 見ろよお、底辺オブフランク略して、底ラン君がいるぞあ！！！」

「……ちよっとッ！ レン君、あの人に失礼じゃん」

通路を歩いていると、目の前にカップルのような男女。

多分俺を馬鹿にしているんだらうなと推測してみたが、フランク

という特別枠の人間は俺しかないなと考えている途中で気づく。  
ちょっと聞こえてるんだが、なんで学園の廊下で通りがかりの男  
女にこんなことを言われてるんだ。

「気色わりーな。確かあいつ、実技ができない無能《Fランク》な  
んだろ？ 最年長でこの学園に来たってな」

「メイのところでは、うわさだけど、いわくつきの人だからあんま  
り近寄るなって言われてるよ」

しっかりと視覚で確認できるような位置であるのに、その騒音は  
止まらない。

「ああそう言えば、いわくつきはマジだよ。確かあいつ、あのロス  
トシティの生き残りなんだろ？ メイ相手してみろよ」

「ええー…… 顔はいいけど弱い人はちょっと勘弁！！」

「ブハハハハ！！ そうだよな。辛気臭いしとっとと行こうぜ」

いまだに通り過ぎたというのに、後ろから声が聞こえる。

もうこんなことに馬鹿にされるのも慣れてしまっている自分がい  
た。

とある本には、馬鹿にされるのに慣れてしまった人間は自身のこ  
とをあきらめている人だと書いてあった。

読んでいた当時は、意味がよく分からなかったが、今になってわ  
かるようになった。

その通りだ。もう俺は、無能力者の自分自身の強さにあきらめをつけていた。

ESP学園内の自習室へ、先に剣先生は来ていたらしく、二人だけの授業が始まった。

「今日もひどい顔だな。オ○ニーは毎日すると疲労感に襲われるらしい。なにごともしんどくなる」

この先生の名前は剣美咲先生。

肩までの黒く美しい髪に、鋭く上がった眼。

そして何より、その右目に付けられた、強情という雰囲気要素が一番ある、黒の眼帯を付けている。

顔自体は美形だが、その歴戦の英雄のような眼帯によりなんとも勿体無いような女性である。

「最近性欲がないんですよ、っていうか俺そんなにオナザルではないっす」

いつものような、女とは思えない彼女の言葉選びに慣れている俺がいた。

そんな言葉をさらっと返し、カバンからノートとペンを出した。補修授業の内容はこうである。

彼女がこの授業で教えた内容を要点をまとめて、レポートとして彼女に提出するのだ。

「では授業を始めるか。まず最初に、超能力のたぐいを自由自在に操れる者を能力者（ESP）と呼んでいる。

能力者と判断するには、手の甲にある特徴的な記号の、有無である。お前の右手にもたしかに能力印はあるな」

そう彼女のゲームカセットの説明書を音読してるような説明を聞き、軽くノートに箇条書き、そして自分の右手の甲を見た。

「はい、まあ普通の奴ら（能力者）とは違う形なんですけどね」

俺の能力印は、通常的能力者とは違う、二重に重なった能力印である。能力印はESP・Tattooとも呼ばれている。

ほかの能力者とは違う点は、さきほども説明した、二重の能力印で、片方ずつ赤青の眼鏡をかけると、文字が浮き出る3D線のようにそれぞれきれいに二重で色も違いがあるということだ。

「まあお前は、特別枠（シークレット・チルドレン）でESP学園（ここ）に入ってきたからな。

人とは違うのは仕方ない。誰だって体の違いがあるように、十人十色だ。

しかしお前の場合は、能力が使えない。ということは、"実践授業"が受けることができないということになる。

だからお前は、他人よりも筆記授業の単位が多いのだ。わかるな？」

俺には、「能力《さいのう》」が無い、そんな人間が、こんなところに来ていいのかと考える。

しかし、俺にはこの能力持ちの証である、能力印があるため、ここに所属するということになったのだ。

俺はここに入ってくるのが13歳と、普通よりも3年遅れて入ってきた。

ちなみにその理由は、ロストシティー（おいおい説明する）の生き残りであるため、登録時間が通常よりも遅くなったと、この前の書類に書いてあった。

まあ特に気にすることでもないと自分でも頭の片隅で整理している。

ここにいる奴らも同じで、10歳までの過去の記憶が「無い」からだ。

「でも先生、だからといって俺の補修までしなくていいでしょう。レポートくらい図書館で書けるし」

こんなことでわざわざ先生の時間を使う必要はないなと思ってしまった。

なにより、俺は授業が大嫌いなのだ。

大体の時間は、徹夜でゲームをした睡眠に使っているし、どうせ将来は使わないような無駄な知識だろうと思うからだ。

そんな不真面目なことを考えていると、目の前にいた彼女の手から凄まじい速さで何かが飛び出した。

「……黙らんか。舐め腐った態度をしおって」

気づいた時には、スタンガンのような物が彼女の手から飛び出してきた。耳の横でビリビリと音を立てる。

そんな彼女の早技に冷や汗をかいてしまう。

彼女はESP教育補佐を務めている対ESPのスペシャリストだ。対人戦闘においては、彼女の右に出るものはいないという。この前の授業では、右ストレートを腹にくらわされた。

指導をしている他の生徒の見せしめに、非力である俺を殴る先生なのだ。

だが、俺のような底辺の人間にかまうような心優しい先生でもある。

「は、はひッ！」

その言葉と共に、椅子から腰が引けるように、俺は引っ込んだ。

すると室内で気まずい空気が流れ、胃が痛くなるような沈黙が流れる。

「お前はなあ、課題を出さない、実技ができない、おまけに仲のいい者はいない。こんな不良と陰キャの中途半端な奴が、私は大嫌いだ」

かけっこのよいドンの合図ではないが、剣先生による怒涛の罵倒を浴びた。

うー。心が痛い。

いやキツツイ。見た目通りに、この先生はハッキリもの言う人だ。

DMにはお似合いの先生だろうが、あいにく俺はそんな体質では

ない。

「とにかくだ佑、せっかくお前のような残念人間の相手をしているのだ。少しは感謝しろ」

俺の顔を見ると、言い過ぎたと自覚したのか、反省をしたような顔で斜め下に視線をずらし、正面へと帰っていく。

「さすがに、ふざけてました。ごめんなさい」

と謝罪の言葉をぽつりと告げた。

たしかに、彼女の貴重な休みを使ってこの落ちこぼれの俺に授業を開いているのだ。

自分の心のない態度、言葉に虫酸が走る。  
すると彼女の顔はクルっとこちらを向き。

「ジョークだよおおんだ！！」

ドッキリ大成功とそんなニュアンスが混じった言葉、そして何よりも俺を面白おかしく笑っている彼女の顔。

俺は帰る準備を始めた。

「嘘です！ ちょっと帰らないでタスク、ごめんて」

「ンヴンツ…… 授業を再開するぞ。大抵の能力者は、赤ん坊が一人で歩けるようになるのと同じように、能力の行使ができる。」

故に、ここESP学園では、実践戦闘が教えられる。能力個人差はあるものの、10歳前後で能力は覚醒する」

ノートに単語を淡々とならべ、彼女が言い終わった後にこういった。

「先生、俺もう十七なんですよね。このまま能力が発動しないなら俺のこと貰ってもらえますか？」

などと彼女に冗談のつもりで聞いてみろが、

「え、っちょ…… ファッ!? プ、プロポーズ!? ここで?」

ポンッと頭の上で空気が抜ける音のようなものが聞こえた。

その顔は、真っ赤に染まっており、いつものような鋭い顔つきとは思えないようなポンコツ具合である。

「え、もちろん冗談ですけど……」

すると彼女の顔は。みるみるうちに鬼のような形相へと変わっていった。

眉間の間には、凄まじいほどのしわ、眼は白目へと変わっている。

「た、タスクゥううううううううううううううううううううううううううううううう!!!!!!」

ひいッ!! とある女教師の絶叫。

彼女はドスドスと俺の座っている机に近寄ると、両手で強く叩いた。

ノートペンは、宙を舞い、驚いたように彼女と距離をとった俺の頭へ、降りかかる。

「貴様さっきのお返しかァ!!」

「ち、違いますううううううう!! ご、ごめんなさいいいいいいいいいいい!!」

ヒョイっと机から出ると、謝罪の言葉とともに彼女に土下座をした。

二度とあの授業中のように、鋭いパンチを腹には食らいたくはない。

ここはできる限り…… 土下座だァ!!

「シッかしなあ、私がこんにち二十七まで結婚していないのは、お前もわかったのことだろうッ!!」

地に頭をつけているせいか、彼女のイメージはとても怖いものとなった。

「すみません、あなた様が結婚していないと把握していない僕のせいでしたァ!!」

ははー！ とどこかの時代劇の人たちがやっているようなきれいな誠意という土下座をみせる。

ああ、俺なにやっぺんだらう。

「（なにかが刺さったような音）グハッ！ も、もういい……だから表をあげい」

恐る恐る俺をチンピラそわりで見ているだらう彼女を見る。

「こんな傲慢なわたくしですが…… よろしくお願いします」

いままでの彼女とは思えないようなきれいなお辞儀である。

こんな女の子のようなしぐさができたんだなど、驚きを隠せない。というわけにもいかないので、こう返した。

「心の準備とかいろいろありますし…… 前向きに検討でいいですか？」

「前向きに検討…… あ、では、それで」

そして何もなかったように授業は再開した。

「そして私が今、所属してるのは能力者の兵隊への育成、指導などをする日本能力者機関の組織の一つ、ESP学園である。」

5年間を中等部で過ごし、高等部は4年間、実際の兵としての訓練期間は、16〜18歳の三年間。

ESP学園を卒業した後、大抵は国を護衛する裏の兵隊として活躍し、」

十七の俺は、今年で高等部四年生ということだ。

今年最後のESP学園でもあるわけだが、正直自分の将来について絶望している。

俺は無能力であり、実戦ができない。だからスペシャルソルジャーにはなれないのだ。

いつもこの考えが始まるとゲームの攻略についての考えにシフトさせるが、なぜか寝不足なのか今日ばかりは考え込んでしまった。

「佑！」

「はひっ」

そんな考え事をしていたため、大げさに驚いた。

土下座をして顔をあげたときに、シャツの間からブラを見てしまったことがバレたんだろうか。

ちなみに白であった。ごくりと唾を飲み込む。

「そういえばお前の将来はどうするんだ？　ここは能力者による傭兵学校、お前のような無能を養うようなところではないからな……」

彼女はすぐ右にある窓から遠くを眺める。

そして俺を窺めるように見た。

「

能力印はあるが、俺は無能。

このままFランクの無能のままでは、ダメなのだと自分でも思っているし、いろいろと行動は起こしている。

だから、こんな理不尽な現実を黙って受け入れることなんてできない。

まずすることは、無能力の俺でも戦えるということを実証することだ。

それにはランク祭に出ることが、俺の目標だ。

しかし、俺にはランク祭に出ることはできない。

それは、実戦授業を受けたことが無いからである。

ランク祭とは、己の強さを示すために、能力者同士で、トーナメント形式で戦闘をするESP学園独自の学園行事だ。

ただ一人であるFランクの俺は、能力が使えないため、今までの2年間は出場することができなかった。

おまけに、対ESPの実戦授業もさせてもらったことが無い。

一年前の俺は半ば諦めたように生きていた。周りの人間が輝くように成長していく中、自分だけは何か縛られているような気がして、悲しい思いもたくさんした。

————だからもう諦めた。

ランク祭に出場すること。自信を鍛えることも。

俺の場合、積み上げられた努力の上には必ずと言っていいほど挫折が待っている。

無慈悲に崖にしがみついている手を切り落とすように、まるで俺は全てをあきらめて生きろと言わんばかりに。

それが俺のこの十数年の生涯。

正確にはこのESP学園に来る前の記憶が無くなっているので五年間だ。

そんな悩みを打ち消すように彼女は話し始めた。

「能力が使えないお前でも、素質も体格もいいと私のこの目が見抜いている。3か月先のランク祭に向けて私が指導してやろうか？」

授業そっちのりで、彼女の目は真剣だった。

それはもう剣美咲という名前に恥じないほどまっすぐな眼だ。

「えッ……」

突然すぎて理解が遅れてしまう。

去年、俺は一度ランク祭に出させてくれと、担任である矢吹に相談したことがある。

返答はただ無言で突き返されただけだ。

能力が使えないというだけで、ランク祭に出場したらダメだ。

そんな現実自体が理不尽で腹を立てたのを覚えている。

もうこのまま馬鹿にされて終わってしまうような気がして、どうしようもなく追い込まれた一年前のことを思い出した。

そしてすべてを諦めていた。そういうつもりだった。

「出場許可なら、上の連中から許可が出ているから大丈夫だ」

そう彼女はそう言い、火のついた煙草を唇で啜える。

その姿はどうもこちらを気にしているような気がした。

つもりでいた…… 諦めていたつもりなんだと……

「こ、根性は無いですけど…… よろしくお願いします！」

気づけば彼女に精一杯頭を下げていた。

俺はまだあきらめてはいなかったのか。

そんな天邪鬼な自分を客観視して、ついつい口元が緩んでしまう。

「ま、根性がないのは私も知っている」

彼女はこちらを見上げると、晴れやかな顔で迎え入れてくれた。

俺も心が緩んでいくのを感じている。

「ちょっと…… 素質があるとか言いながらそれはないッスよ」

俺はダメ出しをするように言う。彼女はガハハと豪快に笑っていた。

「まあまあ、そうとなれば、来週からは私の家で特訓だ。みっちりしごいてやれるな」

彼女は俺を見て笑っていた。

それは、いままで誰にも見せたことはないというくらいに、とても柔らかく、いつもよりも女性らしい笑顔であったからだ。

思わず、胸がキュンと彼女の笑顔に持っていかれると思ってしま  
うくらいにだ、

そのまま授業は終わり、この自習室のカギを渡され、『用紙に書き  
き終えたのなら職員室にある私の机に提出しておけ』と言われた。

まあ今日が俺の生涯の運命の分かれ道だとは思ってもしなかった。

## 第二話

次の日、いつもの授業が終わり、剣先生の住居へとお邪魔させていただいた。

「おう、佑来たか」

大きな門を開くと、黒いタンクトップの上に、当時着ていただろう軍服で剣先生が出迎えた。

左腕には竜の刺青があった。タンクトップの横から黒いひもが見える。鎖骨から汗が流れ、それのおかげか剣先生が凄い色っぽく見える。

「う、うっす。今日からよろしくお願いします」

その格好に、慌てて目をそらす。家の中のはかなりの古風な日本の屋敷だった。

「ああ、久しぶりに少し体を動かしててな。それより奥のほうでやるから入ってこい」

ニヤけながら彼女はそう言う。バレたんだろうか。気にしないでおこう。

屋敷の奥のほうに入っていく、家の横に道場のような建物があった。

剣先生が一礼して入る。俺も真似をして、広い道場のような空間に一礼する。

「よし、お前はある程度の体はできているな。早速だが戦闘のノウハウから教えてやろう」

剣先生の授業を受けたことが無いため、まったくというほど分からない。

「ノウハウ？ 俺プロレスぐらいしかできませんよ」

「大丈夫だ、いくらアホなお前でも私の教育センスでどうにかなる」

そうして俺の特訓は始まった。

基礎体力は合格とのことだ。日頃の運動の成果が出ているようで少しばかり嬉しかった。

教わった内容は、オーソドックスな対人体術、そして戦いにおける精神統一の呼吸法、反応強化、接近戦ばかりのようでも気になったが、お前は接近の素質があるのだと言われた。

戦いは銃撃戦による戦いだと思っていたが、能力者の場合によっては、そんなものは通用しない者がいると言っていた。

超拒絶系統の相手には銃など喰らわないからだ。

だから無能力者が能力者に対抗するなら、近中遠距離のオールグランダでなければならぬということらしい。

死に物狂いで剣先生の訓練に耐えて耐えた。

あの日から3か月が経った。

外見的变化はあまりないが、行動の先読み、いかに戦闘で無駄をはぎ取るか、そのあたりにおいて、かなり強くなっていた自信があった。

わずか3か月で、たまにだけど、剣先生から一本を取ることができようになっていたのだ。

さすがは剣先生の指導だ。

少しずつ肥大していく自信が、確信へと変わっていった。

8月4日早朝、いつものように自宅を出る。

中等部は集団寮だが、高等部になると一人部屋が用意される。

Fランクの俺には小さな空き地のコンテナの中に住んでいる。  
他の奴らのように、マンションですくすくと温まるということはない。

食事は近くの売店で食品を購入し、各自で料理を作ることが義務付けられる。

俺だけこのような仕打ちなのは、実力主義のランク制のせいでもあるんだが、何よりも空き部屋が無いからと言われ、俺の前に住んでいた部屋を追い出されたからだ。

世の中理不尽だらけで、俺には楽しい瞬間は、趣味ぐらいの時ではない。

「おはよ、タスク兄さん！」

いつものように、ハリボテのドアを閉めると隣のマンションの少女、ユウが元気に挨拶をしてきた。

歳は一つ下で、外見は黒い髪のロングに、ぱっちり二重の目。背は155くらいだろうか。たまに一緒にご飯を食べたり、食べなかったり。

そんな仲の隣人だ。

「ちょっとー、タスク兄い、無視は酷いですよ」

彼女はあざとくほっぺたをふくらませる。

特別な感情が湧かないその理由は、こいつは超筋力能力者の、とんでもない怪力女だからだ。

おかげでというか、散々な目に合っている。

とくに酷かったのが、このハリボテのコンテナハウスを、ダンボ

ールを解体するように壊した時だ。

あのときは膝をガックシと降ろして、ひざまずいて、おいおい泣いてしまったことを覚えている。

彼女のランクはB級、凄まじい怪力と並外れた体術の強さで、並み大抵の能力者には勝てるほどの実力である。

「むぎゅう！ おお、この前よりも体格が変わってるね」

急に彼女に抱き着かれた。あざとすぎる、普段は無口で可憐な美人というキャラで通っている。

しかし、俺と二人きりになると今のよう甘えてくるのだ。いや暑苦しい、もう8月だぞ。

彼女は俺の胸にフーッ！と飛び込むと、鼻を俺の右脇の匂いを嗅ぐように移動させ、フンガフンガと臭いを嗅いでいる。

抱きついた体が、ほどよく富んでおり、大きな胸を俺の腹あたりにボンボンと押し付ける。

うむ柔らかい。俺の体に触れるたびに白いシャツのボタンとボタンの間から、健康的な肌の柔らかそうな谷間が見えた。

下の方には、乳を支えていると思われる、ピンク色の色気のあるの生地、白い金具がはきれんばかりに、引っ張り合っている。

男性から見ると、おっぱいは柔らかそうに見えるのだが、実際に触ってみると意外と硬かったりする。

まあこいつの場合は脂肪のおかげでぼよんとしてはいるが。

「ちょっと……、わかったから！ いい加減にしないと夜中に襲うぞ」

どうせ返り討ちに合うかもしれないが。っていうか本当に暑苦し

い。

「そんなことって、もっとおっぴいが当たって欲しいって思ってるんでしょ？」

俺の心を読むな。もっと当てろ。

そのまま、彼女と一緒に学習館に行った。

いつものように寮の階段を下り、ユウと学園まで歩く。

「そういえば今年のランク戦は出るんか？」

「出ませんよー、A級には上がりたくはないですからね」

そういえばこいつB級だったな。Fランクの俺とは天と地ほどの差がある。

「ほーん、俺今年は出ようと思うんだ」

「え、マジですか！ 能力が使えないのに大丈夫なんですか？」

大きさにびっくりしながら、道の端まで彼女は後退した。そんなに驚くことは無いだろう……

「余計なお世話だよ。毎日授業終わりにな、剣先生に特別授業を受けさせてもらっているんだ。かなり自信はあるぞ」

いままで誰にも明かしたことはなかった。しかしユウになら明かしても。

「あの先生に……体格が変わったと思ったら、そういうことだったのか…… さすがは私が見込んだ人ですね、凄い根性とやる気。さすが私の佑兄さんだなあ」

言い終わるとニコツと笑い俺のほうを見た。すこしあざと可愛いが、キュンとはしない。

「って、いつからお前になったんだよ。ふざけるな」

「てへぺろこっーん」

ユウは俺のほうを見て、舌をピョッと出しながら、こぶしを軽く頭にぶつける。

「ていうかさ、お前彼氏いるのに、俺と一緒に通って大丈夫なのか」

ホントこいつ、彼氏がいるのに俺とこうして歩くんだから、ふざけてやがる。

彼氏は少しは束縛してもいいだろうになあ。

「大丈夫です。顔と頭はいいけど察しが悪い人なので」

「そうなのか（ビッチめ）」

「今は、佑兄さんと登校をしたい気分なんです。いいじゃないですか」

なんとも楽観主義過ぎて、もし俺がユウと付き合っていたら、こんな俺と登校しているところを見て激怒しそうだな。  
っていうか普通にキレている。

「まああれだ、付き合っている相手がいるんだから裏切るような真似はやるなよ」

「別に裏切ってないです。佑兄さんといっても何も言わない、あの人の方が悪いんですから」

ユウは追い越したように少し俺の前を歩く。

顔は見えないが、少し怒っているようにも見えた。

それから何も話すことはなく学習館に付いた。

世間一般で言う学校のようなところだ。

「じゃあまた後でな」

「はーい！」

### 第三話

8月5日ランク祭当日。

早朝4時半、人生初めてのランク戦により緊張して早く起きてしまった。

幸いなことに体の調子はいつもと変わらない。そして頭の回転はいつもよりさえている。コンディションとしては完璧な状態だ。

少しランニングをした。体の細胞一つ一つが研ぎ澄まされていく。ランニングを終え、寮の自宅に着いた頃には、朝食を食べに夕の靴があった。

「あ、おはようございますタスク兄さん！」

ドアを開けると、近くの台所にユウがいた。いつもとは違いエプロンを身に着けている。

「俺の家の台所に立って…… どうしたんだ？」

「いつも食べさせてもらっているので、今日のランク戦にお礼を兼ねて、私が作ってあげたいなって」

いつものようにあざとく返事をする。部屋にはカツ丼の調味料の

匂いがした。

「どれだけ上手くなったのか楽しみだな。この匂いはカツ丼か？」

「当たりです！ 出来上がるまでお風呂入ってきてください」

さっと体を流した。

風呂に出たころには完成されていた。

盛り付けられた牛丼をたいあげる。少し醤油が多いと思ったが、普通に食べられることができた。卵焼きすらまともに焼けなかった時期が懐かしい……。こいつも成長したもんだな。

「何ですか、その師匠ヅラは……」

「いやいやいや、俺が料理を教えてあげて以来、こんなに成長したんだなって」

と言い、ささっとカツ丼をたいあげる。

「あれからいろいろ練習したんです。まあまだ丼系しか作れませんが」

「まあ普通においしいから、彼氏に作ってあげられるじゃん。よかったな」

「私はタスク兄さんに食べさせたいんですけどね」

そう言い夕は、ぷいっと体を動かせ、食べ終えた食器を台所に持って行った。急に機嫌が悪くなって……俺は何かいけないことも言ったのかよ。

時計を見ると7時前だった。ランク戦のエントリーは7時半からなので早く行かなければならない。

さっと制服に着替え、食器を洗い終わった夕に言う。

「学校行こうか。今日はエントリーあるから早く行かないと」

「はい、準備しますね」

夕はそう言うとエプロンを脱ぐ。そして鞆を取りに自分の寮まで戻った。

来るまでの間にラジオを聴いていた。どれどれと聴いてみたら、どこかのお嬢さんが何者かに拉致されたとかで、物騒なニュースだ。

「タスク兄さん行きましょ」

いつものようにユウと学習館まで足を運ぶ。

「んじゃ俺エントリーしてくるから、また後でな」

着いた後、夕にそう告げてエントリーの受付まで歩いて行った。

「おはようございます。ランク祭のエントリーお願いしますか？」

「あ、タスク君おはよう！ お、エントリーだね」

そう言ったのは事務のお姉さん、名前は知らないがよく俺のことを気にかけてくれるやさしい人だ。

「そういえば、タスク君をランク祭に出させるために、剣先生が局長に抗議してたんだよ」

書類に何かを書きながら俺の会話にこたえる。

「ま、マジなんですか？」

修行も抗議もさせてくれるなんて……これは勝って恩返ししなければ。

「うん、剣先生も君のことを見越してだと思っただ。だからというか、今日は頑張っただね！」

「はい がんばります」

用紙に必要な情報を書いてエントリーを終え、教室に向かう。

教室に入りランク戦までの時間をひたすら瞑想をして過ごしていた。

「おい、聞いたか！ フランがランク祭に出るんだってよ」

「マジ！ あいつ能力使えないんだろ。こりゃ見物だわ」

後ろでEランクのクズどもが俺の噂をしていた。あいつらは能力が使えるものの、その力は全くというほど役立たずな連中だ（俺ほどではないが……）。そのためかAランクの能力者からよく見下されている。

多分その鬱憤晴らしで、俺にちょっかいを出しているんだろうと思う。

下が下を見下す、これが実力主義の現実だ。

「トーナメントができた。出場者は各自確認しておくように」

担任の矢吹がトーナメント表を持ってきた。

ここでランク祭の説明をしようと思う。

ESP学園で行われる、年に1度のランク合同のトーナメント戦。この学園で一番の能力者を決める毎年恒例の大会だ。AからEまでのランカーが自らの強さを証明するためこの大会に出場する。参加希望などは個人の自由であり、戦闘の内容によってはランクが上がることもある。日程としては3日間で終わるようになっていて。ランク祭は、14歳から申し込みが可能。

トーナメント表を見ると、俺は2戦目からとなっていた。まさかこんなに早くからできるとは……

少し緊張してきた。追い打ちをするようにクラスのクズ共が、俺をネタに話をしていた。

「うっはあのFラン、2回戦目からだぞ！」

「相手は断絶の空間歩行者、卍城王也じゃねーか」

「これは面白いやろうなあ」

極力、聞かないようにクラスから出た。

向かった先は、ランク祭が行われる、ESP学園の闘技館。あまりの緊張で手先から血の気が引いていくのを感じる。体からはいやな脂汗が出ていた。ダメだ、こんなに緊張して頑張れるのか……その時、正面からユウが歩いてくるのが見えた。

「あ、タスクにいさーん。ってすごい顔色悪いですよ。大丈夫ですか？」

彼女が話しかけてきた。俺の顔を覗くように体調をうかがっている。

「マジかよ、俺の顔がそんなにイケメンに見えるのかよ」

「ふざけている場合じゃないですよ。本当に大丈夫なんですか？」

「だ、大丈夫だよ、緊張しているだけだから」

「緊張したら、そんな顔になるんですか？ははははははhh」

彼女はなぜか腹を抱えて笑った。お辞儀をするように腹を抱えて

いるので、シャツの隙間から谷間がいい感じに見えた。

も、もう少し屈むだけでで全体像が……いつもは何とも思わな  
いんだが、この時ばかりは色気のおかげで嫌な緊張はほぐれてきた。

「タスク兄さん、これ」

彼女の後ろにまわしていた手から簡略式水筒が飛び出してきた。

「お、サンキュー」

「お守りとして持っていてください。勝って必ず私に返すこと！  
いいですか？」

彼女は、あざとく俺の顔を覗き込むように見ると、可愛らしい笑  
顔が溢れ出た。

「まあ、一勝はできると思う。見といてくれ」

「はい！ 応援していますね」

話を終わると闘技館に入った。もう少して開会式が始まる。

第1試合を終え、開始まで待合室で待機していた。

ユウから貰った水筒を一飲し、瞑想をして集中力を高める。

「佐部佑、準備を」

係の矢吹が俺にそう告げた。

「うっす」

そう言い太ももを叩いた。良い感じに体も出来上がっており集中力も随分とある。

「佐部佑、入場をお願いします」

アナウンスがそういった。カーテンを抜ける。

直径50メートルの円内の中央にして、二本の白線がある。そこまで真っ直ぐと進み、相手の選手が出るまで待機していた。場内には観客席がある。歓声は無いが、俺とその対戦者を取り囲むように、学園の生徒が満遍なく並んでいた。

前から卍城王也が入場してきた。彼の人気が高いのか歓声が一斉に上がる。

卍城王也の外見は、中途半端に長い髪が、顔のセンターで分かれている。顔は色白のイケメン、背は俺と同じくらいだろうか。いや少しあちらの方が大きいようだ。

白線に止まると、手を顔に当てた。

「俺の名前は（ここから先は声が低すぎて聞き取れない）」

そう彼が言った。

うわっ……… なんだこの嫌悪感は。

こんな残念イケメンがBランクときたもんだから、とても不条理

な世界だなとそんな物思いにふけてしまった。

いかんいかん、戦いに集中だ。

「両者、武器の確認を」

アナウンスが確認をとる。

武器の確認をする。

ランク祭では、各々が好きな武器を使える。銃は2丁に刃武器は三本までとのこと（代わりにオリジナルの武器を使うこともできる）。開始と同時に能力を使うことが許可される。周りを囲む白線から出ると即失格となる。勝つためには先に相手を倒す（文字通り）ことと、白線に相手を追い上げること。一応ここは傭兵学校、殺し合いになることもある。一歩間違えて即死なんてこともあったため、油断は禁物だ。

フィールドは直径50メートルの円形である。均等に並べられた障害物、建物を模様したものや水が溜まっているところがある。

ちょうど同じに武器の確認が終わった。相手は、大きな鎌のようなものを頻りに見せてきた。大きさは彼身長と同じくらいで、縦の刀身が最大30センチほどの大きさから大きく横に弧を描くように曲がっている。俺には絶対に重くて使えない代物だ。

開始まで相手の攻略法を考える。

リーチは銃を持っている俺が圧倒的に有利。しかし開始と同時に突っ込んでくると厄介だ。

先ほどの、武器の見せびらかしに、二つ名セカンドネームが『断絶の空間歩行者』。

異名からして、鎌による剣術が凄いのかもしれない。しかし、動きだけは剣先生についていけた俺だ、圧倒的に俺のほうが早い。距離を取りつつ銃で攻撃を行えばいいな。

よし！ いける！

「第2回戦、右手に見えるのは今人気急上昇中のAランク、ESP学園序列6位、卍城王也だぁ——！！！」

実況が威勢よく叫んだ。

「左手は、Fランク能力者。佐部タスクだぁ——！！！！ 初実戦、無能力ということで見せてくれるのか！！！」

俺の無能力という説明に、場内がヒソヒソと話をするようにざわめく。一部では一方的な殺戮ショーの始まりだと痛快に腹を抱えて笑っている。

——そうだよ、俺は……

無能力者だ！！

「両者、準備はいいですね」

アナウンスが聞く。

「「はい」」

お互いに返事を返した。会場が静まり返る。

「  
ファイッ!!!」

## 第四話

「ファイッ！！」

アナウンスの合図が放たれた。

作戦通り後ろに素早く距離を取った。

すぐさま懐から相棒の S I G S A U E R P 2 2 8 X X ダブルクロスを2丁取り出す。

「少し話をしないか？」

彼は戦いというのに白線に突っ立ったまま、俺に話を求めてきた。その顔はどこか悲壮めいていた。

「あいにAランク相手にそんな余裕はねーよ」

皮肉げに彼に言う。しかし彼の表情は変わらずだった。

いまだに相手には動きが無い。先手必勝だと、彼の足と右手を狙い引き金を引いた。

彼は予測していたのか綺麗に、躲す（いや、ここは当たらなかつたという表現が正しいか）。

筋力強化能力による移動なのか？

「なんで君は勝ち目のない戦いに、そんなに闘志を燃やせるんだ」

彼はいつの間にか俺の右方向へと移動しており、なんとも幻術のような移動だ。

「まあやってみなくちゃ分かんないだろ。それとなお前、そんなこと言ってる俺に失礼だとか思わないのか？」

焦りを隠しながら彼に言う。常識が無いのか、煽り方が上手いのか……

もしかすると、これは相手の作戦かもしれない。油断は大敵だ。

「わかった」

彼はそう言うと、俺の方へと凄まじい速さで動き出した。

動き出したというよりも、壊れたビデオテープのように映像が途中で途切れて、先の方に映像が変わったような感覚だ。

クッこんな近くまで、気づけば彼は、俺の右の位置まで移動していた。

一瞬のまばたきが生死を分ける。必死で相手の動きを追う。

そして彼は、俺の胸あたりを切ろうと鎌を振りかぶった。

上体をめいっばい後ろに倒す。顔の目の前で鎌の鋭利な光沢が、瞬く間に通り過ぎた。

少し掠ったのか胸元のシャツが切れる。不意打ちのような攻撃を間一髪でかわしきった。

一度距離を取るため、サバイバルナイフをバックで回転をしながらその回転力で投げる。

手をめがけて投的をしたが、あの大きな鎌で見越していたように、はじき返された。

「一瞬で決めようと思ったのに。よく躲したね」

彼は、俺との戦いを少し舐めてかかっていたのだろう、苦いカメムシを噛んだように顔を歪める。

「次は本気でいくよ」

さっきよりも彼の声音も変わっており、顔からも本気モードがうかがえる。

スッキプ映像のように俺の真右へと移動し、鎌を降ろす。

運良く彼の届く範囲を避けていた俺は、カウンターを仕掛ける。

この瞬間移動方は剣先生が使っていた、古武術の類なんだろうか。動きながら頭のなかで、彼に対する対策をひたすら考える。

「ちょこまかと…… 君はハエなのかい？ 残念ながら僕は虫は嫌いだね」

言ったかと思うと、またもや俺の右方向におり、能力を存分に使ったすさまじい剣撃が、俺の頭上へと通り過ぎる。

すかさず俺は、上手く常態を拗じらせ鎌の形に、体ギリギリで彼の攻撃を避ける。

剣先が俺の鼻先を通り、刃のコーティングされた金属波が存分に見えた。

そして顎を引き、ムチを唸らせるように、肩、腰、尻、裏太もも、ふくらはぎ、そして感で剣先を避けきったかと勘で察知したあと、足を前に手を使わずに後転する要領で避けた。

滑らかに動いたその体は、まるで水のような身のこなしだ。

――佑の卓越された反射神経と、高度の思考予測により、この能力者のような、いや神のような回避は可能なのだ。

佑本来の凄まじい天性のセンスを、剣先生は見抜いていたのである。

先ほどとは明らかに違う、攻撃頻度、威力、磨かれた絶剣の如く剣筋だが、俺は完全に見切っていた。

距離を取るためさまざま弾丸を放つ。彼は予測するように弾丸を切り落とした。

俺は彼のあまりの強さ、そして自分がこれほどまでに、渡り合えていたということに心が踊る。

つつい口元が緩んでしまう。

「なんで笑ってるんだい？」

繰り返す動きの中、彼は不思議そうに、こちらを横目に見ながら質問をした。

「そりゃ初実戦が、強いお前みたいな奴とんだから嬉しくない訳がないだろう」

あちらの動きが止まり、俺も動きを止め質問に答えた。

そうだ俺は戦いが好きなのだ。剣先生に見込みがあると言われ

たのはこのことなんだろうか。

剣先生が以前言っていた「私と同じ」匂い」をした初めての人」  
だと言われた。

そうだ俺は「絶望状態の殺し合い」が好きだ。

「行くぜAランクさん、お前の変な能力も見極めたし、後はお前を倒すだけだ」

彼の能力は、おそらくだが、超筋力系統の能力者、物理法則を超えた力で瞬間移動を可能にしてるのだろう。

今までの途切れた映像のような行動が何よりの証拠だ。断片的にしか使えないのか、ある一定のリズムと距離で、能力を使っている。

おそらくだが、その時間間隔は一秒よりも少ない。

そしてインターバルがおおよそ10秒。それはいい情報だ。

まさに接近戦に特化した能力と、それに合わせた相性のいい武器だと俺は納得した。

瞬間移動ができるなら、それに合わせて間合を調節し、粘り強く攻撃を避けて、相手の攻撃手段を着実に減らしていき、最後の最後に渾身の一撃を……

まず先決することは、接近戦で強烈なあの武器を壊すことだ。

壊せなくても使えなくすればいいのである。そういえばあの曲がり刃の剣身で銃弾を防いでいたな。となると剣身はかなりの強度に

なるはずだ。

あんな大きさと全体がチタンの武器を使うなんて、どんなに大男でも無理な話だ。刃以外は必ず軽量化の為に軽いものを使っていると思う。

綺麗な曲線の刃の付け根あたりを観察する。赤のカラーリングは統一されているが、明らかに違う金属のパーツを見つけた。

見た目は綺麗ではあるが、とりあえずくっ付けたようなわずかな違いを見つけたのだ。あそこを狙えばあの武器は壊れるだろう。残りの銃弾は替えを入れて三〇発。いける。

「（まずは……）おらあああッ！！！！！！」

雄たけびをあげ、俺は最後のナイフを彼の顔に投げる。

「……やけくそなのかい？」

そう言いながら彼は投げられたナイフを軽々と刀身で塞ぐ。

チャンスだ！！

彼は狙い通りに鎌の剣身をちょうど俺のほうに向けていた。

すかさずリロードを凄まじい速さで終え、頭を狙うように、奴の鎌の弱点を狙う。

この距離ではお得意の瞬間移動は届かない。

命中。次々に弾を剣身の付け根に当て続けた。

劈くような金属と金属の衝突音が会場に響く。

狙い通りに段々と変形していくその刀身の付け根は、皮一つ繋が

った首のようにへし折れた。

俺は、唯一受けられる射撃訓練だけは最高評価の5を取った。

これくらいはな。

「デッカイ鎌もぶっ壊れたんだから、お得意の空間ジャンプ攻撃ももう意味は無いよなあ!？」

最後の銃弾を卍城の顔面に狙う。

防ぎながらも攻撃を読んでいた彼は、咄嗟に刀身で縦断を防いだ。最後の1撃は鈍い音が鳴り、刀身の付け根は、後方の方へ帰ってこないブーメランのように吹き飛んだ。

「ほう、僕が防ぐと見込んで溶接具への集中攻撃……そしてこの愛武器で防ぐことを予測して僕に壊させるとは…… なかなかやるね君」

先程までの心底見下していたような顔とは違い、彼は希望を見るかのような明るい瞳で俺を見た。

彼の武器も壊れたが、俺の残りの銃弾が尽きつつあることに、若干の焦りが芽生えた。

「だが……まだ甘い」

彼はそう言うのと武器を今までとは違い逆手に持つ。

装飾と置いていた弧を描いたような先端部が、金属音をぶつけたような荒い音を立てて刀身が出てきた。

2つもあった刀身に俺は乾いた笑いが出る。

「二太刀で使うのは僕には出来なくてねー。それよりも君のような努力による真の境地に立っている人間が大好きだよ。ESPここには、自分を諦めているような人間が大半を占めるからね。僕は君という自分を諦めない少数派に、価値を見出しているんだ。僕って見所も考え方も凄い人間だろう」

ああこいつは実力もある、まさに完璧人間だろう。

顔だけがいい俺とは違って能力も最高ランクに強い。

少しナルシストなところに腹を立ててしまったが、この世界で選び抜かれたらひょいっと飛んでいきそうなくらいには選ばれた人間だ。

俺はこんな完璧な人間は好きだ。まさに人が目標にするには丁度いい人間だろう。

そんな俺よりも戦闘力も人間的にも、勝っている相手にどう勝つか——簡単だ。

「今」のありったけをぶつける。ただそれだけの話だ。

「ガタガタうるせえんだよクソナルシスト」

俺はそう叫ぶとヤツの方へと全力で蹴り出した。

こいつにとっておきのをぶつけてやるぜ。空になったマガジンを捨てる。

走りながら、両手の人差し指で2丁を銃を円状に回すと、右手の小指と薬指で、太もものマガジンベルトにあるマガジンを、右足を上げる動作と一緒に、小指と薬指で目の前に浮きあげるように前の方へと投げる。

ワンテンポ遅れながらも左も同じように、マガジンを空中へと放つ。叩きつける動作の遠心力と、後方に突き上げるような腕のフリでマガジンを綺麗にはめ、2丁の拳銃のリロードを完了させた。そして腕をクロスさせるように構える。

ジャンプをしながら、獲物に飛びつくように飛びかかった。左手の引き金を引く。

「遅いッ！！」

当たったと思いきや、彼は読み通りに瞬間移動で俺の右へと移動している。

チャンスだ、すぐさま前に倒れるように回避行動をとり、空中で右足の靴底を彼に向けた。

靴底には時速200キロの威力がある投刀ナイフが仕込まれている。

左肩にあるスイッチを、機械人形のように素早く押し、首から骨の音が聞こえたが、構いなしに前に転がりながら前方へと撤退。

凄まじい速さのナイフは一直線に彼の肩へと突き刺さった。

一撃必殺の隠し技が、狙っていた首とは違い、肩に当たってしまったため、少しばかり癩に障った。

肩へと深く深く突き刺さるそのナイフに、彼は耐えきれずに地面に膝を付けた。

「すごい威力だろ、チツ肩に当たったのかよ」

距離をとった俺は、そんな舌打ちを投げかけ、怒涛の銃撃を容赦

無しに彼へと目掛け放つ。

彼は痛みに悶え、その肩を構いながらも、全ての銃弾を防ぐため障害物に身を隠した。

放った1発が彼の左膝の上に当たったらしく、左足を引きずっていった。

彼が右に出るとは、彼の行動から予測できた。なぜなら彼は俺を中心とした、右回り90度に瞬間移動ができることと、彼はある程度近づかない限り、瞬間移動は使えないと、彼の傾向からわかったからだ。

いろいろと小細工の準備をしておいてよかった。

それを読んで今まで隠しておいた必殺の時速200キロナイフ。

まあ肩に当たってしまったのだが。

「クハハハハハハハ」

物陰から彼の笑い声が聞こえる。その狂ったような笑い声に、ついに壊れたのかと勝利を確信した優越感が俺の中で溢れ出てきた。

「Fランクの俺に追い詰められる気分はどうだよ、Aランクさんよお!!!」

まるで小悪党のように俺は彼へと叫んだ。

最弱が最強に勝っているという願望めいた現実が俺の目の前に広がっていたため、俺の本性にも近い小悪党振りが、表の感情になって現れたのだ。

気持ちいい、今一瞬のために俺は生きてきたんだと、"生きる意



脳の興奮作用の物質が限界を突き抜けて、俺の体中へと駆け回る。

俺の反逆の見せしめに、まずはこいつの首を取ろう。

気の油断は後の大惨事と剣先生が言っていたが、今の俺には全く浮かばず、目の前の現実にただ興奮しているだけのクソ人間となっていた。

## 第五話

「終幕フィナーレだ！！ Aランクさん  
よおー！！」

俺はヤツの隠れている物陰へと全速力で向う。  
すると彼は、茂みに隠れて覚悟を決めた動物のように物陰から出てきた。

「君は強い、それは認めよう。だが最後に勝つのはこの僕だー。  
君だけには、ここまで僕を追い詰めたお礼として、一日一度限りの  
奥義"を、見せてやろう」

そうして彼は構える。それも今までに無いようなドッシリとした  
構えになる。

俺はドバドバと溢れ出たアドレナリンによって、警戒を怠り、獣  
のように叫ぶ。

「ほざけッ！ クソナルシストッ！！」

最後の最後である銃弾を、ヤツの体を目掛けて放つ、放つ、放つ、  
放つ。

「慥・時雨鎌イ太刀ー」



なんてたかが知れている。まあ、あえて僕がハンデを使ったんだ。必殺技を使わないという「ハンデ」をね」

ついに目の前が漆黒の世界へと進み始めた。

わずかながらの理性で俺は慢心をしてたと自分を分析する。

（あれだけ頑張ってる、剣先生に修行までついてももらったのに……  
こんな一つの間違いで俺は）

薄れていく後悔と意識の中で、今までのことが走馬灯のように駆け巡る。

◇ ◆ ◇ ◆ ◇

剣先生と修行していた時のことを思い出した。

「少し私の昔話をしようか」

いつもの1対1のトレーニングを終え休憩していたところ、剣先生が話しかけてきた。

「聞きたいです」

その時の俺は剣先生については、スリーサイズと家の場所ぐらいしか分からなかった。

「そうだな…… 私が傭兵を始めた時の話をしよう」

そう言うのと彼女は、遠い過去を懐かしむように視界を前に向けた。

「傭兵をやる前の私は警察という治安を維持する仕事をしてきたんだ。当時の私はな、どうしても多額なお金が必要だった。そのため当時勤めていた警察をやめた。まあ元からあのような卑劣な場所は、すぐ辞めるつもりだったんだがな」

そう言い彼女は続ける。

「前払いで何千万とくる傭兵に少しばかり性に合っていると思ったよ。それが傭兵になるための動機ってところだ。私は金の為に人を殺せる人間なんだ」

まるで自分に言い聞かせるような言いぐさだった。

数々の伝説を残してきたと言っても、彼女は一人の人間だった。

「昔はでしょう？ 今はどうかは知りませんが、昔は昔でしゅよ」

慰めるつもりが、思いっきり噛んでしまった。伝わったのかドキドキしてしまう。

「ふふっ、君でも励ますのか。すこし驚きだよ」

彼女から笑顔が溢れ出る。俺が噛んだおかげ？

「初実戦は凄かったよ、弾が、どちらかが殲滅されるか、撤退するまで物凄い量が飛び交っているんだ。スリル満点で楽しかったね」

笑顔で話す。よほど楽しかったようだ。

「戦地に行く前は女性というだけで散々ものを言わされたよ。そのたびに片っ端から全てぶっ潰してきたが」

これまた笑顔で話す。この人にかなう人なんて絶対いないだろうに……

「まあここからが楽しくなる。私が三度目の戦地に出向いたときの話だ」

先ほどとは違い。真剣な顔になった。よほどなことがあったんだろうか。

「2003年、2月14日、世間一般では血のバレンタインなどと呼ばれているな」

「確か能力者同士の初めての対抗戦ですよ。第1戦がカナダ、第2戦がここ日本の北海道、他は忘れましたが」

「全く…… 授業をしっかりと受けろ。とにかくあそこに、トリックスターズの囚小隊として派遣されたよ。当時、超能力者なんてアニメや妄想の話だと思っていてな、何も知らない私たちはESP達の

殺し合いに参加してしまった……」

彼女の顔が険しくなる。

「バカげていたさ、突如津波が現れたり、何も無い空が突然と夜へと変わったりな。仲間の一人が『ここが天国か？』ってジョークだけは笑えたよ。そいつは死んだがな」

続けて彼女は話す。

「ESPの情報すら無かった時代だ。仲間は無残にも殺されまくった。しかし私だけは運が良かったのか悪かったのか生き残ってしまった。逃げもできず、仲間が誰もいない状況なんだ。お前に想像できるか？」

うつろな目で彼女は聞いてきた。こんなにも壮絶な過去話が聞けるなんて想像もしてなかった。

「絶望したさ、戦場は幻想による津波で、前線は無茶苦茶。何が何だか分からなかった。どう逃げるか、後ろへ退避すると弾丸が私達を襲ってくる」

「その銃弾の音が、私のお父さんのよく言っていた『根性ださんか——』という言葉に聞こえてな。とにかくそれのおかげで私は頑張れたんだよ」

「あそこが死線だったんだろ。その言葉を胸に全ての敵を倒し

た。今では伝説となっているが、ただ運が良かっただけだ」

先生の遠くを見つめるようなそんな瞳だ。

彼女の腕にある大きな傷跡で、痛覚によって幻想を取り払ったんだと分かった。

そこで彼女が何をしてきたのかなんて、俺には分からない。だけどこれだけは言いたかった。

「先生…… トイレってどこにありますか？」

「人がこんな話をしているに！ このバカ者！ このこのこの」

その後めちゃくちゃボコボコにされた。



「僕の必殺技を食らった大抵の人間は死んでいった。だから使うということはあまりしたくは無かったんだ。君のような本来勝てるべき人間に使ってしまったのは、僕の慢心のせいだろう。まあ無能力者の君となら、どうあがいても僕が勝っていたけどね」

猛然とした意識の中、俺はこう思っていた。

ああ、ごもっともだ。俺には「能力さいのう」がない。

でもこんなに届かなかったのかよ……

それでもあきらめない人が俺を見ていた。

「佑!!!!!!!!!!!!!! 根性ださんかあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」  
聞き慣れた声が会場に唯一繋げられるマイクで絶叫していた。  
そんなことをするのは彼女しかない。

そう剣先生だ。

彼女の声に反応した、消え掛かりそうな精神界にある俺の魂が、  
朽ちた体を損傷構いなしに、起動パルスを叩き起こす。

反応するように体中の細胞が目覚めていく。

内からひっきりなしに湧き出るような力を使い、平然と這い上がった。

「そうだッ…… 最後の一滴まで…… 俺はッ」

そうだ俺は剣先生に戦いだけを教えてもらったんじゃない。

諦めない気持ちまでもを教えてもらったんだ。ここで朽ちるわけにはいかない。

自然と腕の傷と、胸を切り裂かれた大きな穴の激痛が全くというほど無くなっていった。

そして、落ちていたナイフを素早く口で掴む。

全速力で万丈王也の方へと走った。

「もうやめろ、出血多量で君が死ぬぞ。審判！ 早くやめさせろ！」

彼は激情に任せ審判に抗議した。しかし審判は剣先生の手により  
気絶させられていた。

「チッ、あのクソアマ教師！！ っっっかし君は、ハハッーなんて

やつだ」

舌打ちをして、彼はあの大きな鎌を構えた。

その顔は何か覚悟を決めたような、形相たる顔だ。

「化物めッ！！」

来る。鎌を彼の右側に大きく振りかぶる。その振りかぶった角度だけでも、全てを一刀両断するほどだ。

冷静に彼の攻撃を思い出す。ある程度近づくと彼は消え、俺の真右限定に現れるんだったはずだ。

彼は、俺の予想していた範疇に空間ジャンプしてきた。

こいつは単調すぎる。

すかさず俺はしゃがみ、彼のジャンプしたての地に付いていない足を、右足で回し掛ける。

激痛が走るが、構い無しに、切れた腕で体重を支える。

彼が右回りに倒れる姿を確認した。

彼は頭を強打するように地面に打たれた。

猫のように彼の体に飛び乗り、啞えていたナイフを首元に突き刺す。

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

試合終了の合図が会場全体に鳴り響いた。そのまま俺は意識を失った。

## 第六話

8月4日午前0時過ぎ、一人小柄な少女が自宅にひきこもっていた。

「あ、刀拳乱舞の新作グッズキター。あ、ポチリポチリポチリ」

パソコンの前でひとり呟きながらマウスをカチカチ鳴らす。

そのさばき方はエサを捕る獣のようだ。

一段落終えたのか、椅子に背中からもたれかかった。

「はあ」

彼女は、喜望舞へきぼうまいぐ。

彼女はひきこもり生活を送っている。しかし最近になって、この部屋にいたことがどんどんと苦痛になった。

彼女が引きこもった理由。それはクラスでの虐め、親しかった幼なじみの女子からの裏切り。

そのせいで彼女は人間不信に陥り、今に至る。

彼女の中で過去の悲しみが走馬灯のように思い出す。彼女はこの数年間ずっと苦しんでいた。

腕にはリスカ後が無数にある。最近になって精神剤が増えた。今はこれ無しでは過ごせない体だ。

彼女はそんな自分が情けないと思いつながら、自堕落な生活を送っている。

こんな自分が許せない。こんな生活から変わってみたいと思っていた。

その時だった。

凄まじい勢いで、舞の前にあった家の壁、机共々パソコンまでもが、木っ端微塵に消し飛んだ。

一瞬の出来事と凄まじい爆音のせいか、彼女は現状を飲み込めない。

ふと彼女の前に全身スーツの青年がいた。

「ミッションの女性を確認。捕獲後、帰投します」

青年は耳に着いた通信機のようなものでどこかに連絡を取った。

彼女は青年の機械的な行動に恐怖を覚えた。

この人には関わってはいけないと彼女は直観で気づく。

後方を確認し、引いた腰をすすりながら、後ろを確認するように携帯端末を探す。

見つけた。すぐさま警察に電話をかける。

「無駄だ。一緒に来い」

スーツ姿の男は舞から携帯を奪い。画面共々真っ二つにした。

そして彼女の後頭部に近い首筋を叩いて気絶させた。

スーツ姿の男は舞を担ぎ、妖怪のような脚力でその場から姿を消した。

彼女はが貨物室で起きた。

辺りは暗く、周りの状況がわからない。

顔に目隠しのローブが巻かれていることが分かった。

手は後ろで縛られていて解くことはできない。

彼女は後方から微かに聞こえる声に耳を澄ました。

「……様から次のスケジュールが送られてきた」

まるで機械のような口調で一人の男が話す。

「わかった」

二人いるのだろうかと彼女は勝手な憶測を立てた。

「0122、お前の能力残時間はどのくらいだ？」

「今日は、後1分半だ」

能力残時間？ 舞は、この間のネットで見た記事のことを思い出した。

当時（7年前）のネットではデマと事態は終息したはずだが、後の超能力者の犯罪、ネットに上がった超能力者同士の戦闘映像などで完全に認知されるようになる。

最近では、反社会テロ組織が能力者を使い、悪事を働いているという噂まで聞いたことがある。

もし能力者から拉致されて、ここが知らないところならば、早く逃げなければと舞は思った。

こんな所では彼女は死ねない。それは彼女の大好きなアニメの最終話をまだ確認していないからだ。

ここに出るため彼女は思考を張り巡らした。まずは顔のローブと手を解かなければ何も始められないと考えた。

彼女は周りの物体を確かめるため体を動かす。

顔の横あたりにフックのようなものが、ほっぺたの感触でわかった。

顔のローブを引っかき、上手くずれるように動かす。弱く締めていたのか簡単に取れた。

周りを確認した。段ボールが彼女の周りに頻りにあった。今の状態ではここからは動けない。

せめて手だけでもと、後背にある手を必死に動かし、先ほどのフックに引っかけて引っ張る。

少しずつだが、ビリビリと音を立てている。時間をかければ取れそうだ。

彼女は自分の行動力に感動していた。

人間このような極限状態では動けないと思うが、ここまでできる自分を見直していたのだ。

「ん？ 何か物音がしたぞ。少しアレを確認してくる」

前方のドアから先ほどの男性の声が聞こえた。

ダメだこの状況じゃ何をされるか分からない。

そう考えついた彼女は、ローブを戻すかと考えた。いやこれじゃ間に合わない。

彼女はこの状況に絶望した。

その時だった。

勢いよくドアの反対側が蝦蟇口財布のように大きく開いた。

床が後ろに傾き、物凄い風と共に、段ボールの群れが白い空間に  
どンドン吸い込まれていく。

開いたと同時に、舞の重心も白い空間に傾く、先ほどの手のヒモ  
が破れた。

舞は段ボールの群れと一緒に青い海へと落ちていった。



医療用のカプセルの中で俺は起きた。

両方の手から激痛が走る。左手は戻っていたが右手は完全に無くなっていた。

何十もの包帯に、凄い点滴の数。

ランク戦がそれほど凄まじいものだったと、今になって分かった。

「佑兄さあーん」

左の方に夕が見えた。勢いよくカプセルを叩く、あまりの力の強さで器具が全て揺れている。

カプセルの中は完全密封状態で、音がかなりうるさいものになっていた、

「ちょっとうるせえんじゃボケ！」

「よがっだあああ生きてだあああああああああああ」

うわあ、ぶっさwコミュ抜けるわw 夕の泣き顔が最高にブサイクだった。

「佑！ 生きていたか、そのまま死んでもいいんだぞ」

剣先生はそう言いながら、カプセルを勢いよく開け、力任せに俺を思いっきり抱きしめた。

クツ、苦しい。む、胸が！！彼女の胸が俺の口と鼻の穴を塞ぎ止めるようにポヨンポヨンと押し付けられ、俺の息ができなくなっていた。

が、ガチで俺死んじやう。

「先生、佑兄さんだけに特別扱いだなんて、教師としてそれはダメでしょ！」

夕が負けじと俺の足を引っ張る。これ何の拷問。

ちぎれる！ 俺氏、ちぎれちゃう！ 縫いだ傷口が更に酷くなっっちゃうよ。

「うるせえ！！！！しばき倒すぞクソガキ共！！！！！！！！！！」

保健室の先生が阿修羅のような顔で俺たちを脅したてた。俺は何一つ悪くないです！

他にも負傷者はいるので、おふざけモードはこれにて終わった。咳ばらいをしながら剣先生は暖かな目で俺を見る。

「う、おっほん！ とにかくだ。初勝利おめでとう佑。晴れて君はDランクだ」

「佑兄さんおめでとう」

「え、お、俺がDランク！！！！ どういうことなんですか！ 飛び級じゃないですか！！！！」

驚きすぎて、負傷した腕が痛い。普通は一つずつ上がるものだろう。どうということなんだ。

「Aランク相手にあの健闘だ。妥当な判断だと私は思うが？」

確かに、この学園で最強ほどではなくても、あの卍城王也に勝ったんだ。

3か月前からすると、夢のようで夢じゃないということが少し笑ってしまった。

「そ、そういうえば次の試合は!？」

こんなことをしている場合じゃない。次の試合の準備をしなければ……

「何言ってるんですか佑兄さん!？」 次の試合は1週間後ですよ」

「だがその体じゃ何もできはしないぞ」

そうだ、左手は辛うじて動くが、右手は肘から下が完全に無くなっている。

こんなじゃまともに戦うこともできない。

こんな俺を見られたくはなかったから、顔を手で覆うように下を向いた。

「まあ、まずは私の話を聞け。君は能力者の証拠である、「能力印」が無い。これはつまり「普通の人間」として生きていくことができ

るってことなんだ。能力者にとって、「右手が無い」ってことは即ち、「引退」を意味する。君は能力者という肩書が続けるか？ それともこのまま能力者という肩書を背負いながら、無能力者として生きていくか？」

彼女はこちらを心配するかなのような口調で聞いてきた。

「何を言ってるんですか？ せっかく剣先生に修行までついてもらって、ここまで強くなることができたのに、ここで終わるわけには」

彼女にそう告げる。

「実は、今の能力者ではないお前に、日本国の自衛隊から推薦が来ている。どうだ、もう「能力者」として固執する必要もない。新たな新天地で頑張ってみたらどうだ？」

彼女はトントンとタバコを手のひらで叩き、俺に推し進めるように言う。

今の自衛隊は、完全な日本国の軍隊となっている。

能力者が戦場を跋扈するような時代に、対能力者用の最新鋭の武器と、剣先生のような対能力者のスペシャリストが沢山いるそうだ。

「私も同じ考えです。能力も使う必要の無い、自衛隊に行った方がいいと思いますよ。そうなるともう私と会えなくなりますけど……」

双方とも元気がないような顔だった。二人とも俺のことをよく知っていて、俺のことを思っている事なのだろう…… 確かに能力に固

執する必要は無い。

「少し…… 一人で考える時間をくれませんか？」

選択を急ぐ必要はない。少し考えることにした。

「確かに、あのランク戦の後だというのに、すぐに聞いてしまっすまない。結論は焦らなくてもいい。ゆっくりな」

剣先生がそっと言い聞かせるように言った。

「よしっ、私はそろそろ審判の用意があるから行くよ。また後でな佑」

そう言い、剣先生はベットの横にある椅子から、かけていたジャケットを着た。

「私も彼氏が出るから。んじゃまた後でね。佑兄さん！」

剣先生とタがそれぞれのところへ行った。

このキズはどのくらい掛かるんだろうか。今は寝そべりながらそのことだけを考える。

天井を見た。そして今日の戦闘について思い出してみる。

必殺技というデタラメな剣撃、そして俺自信である無能力者者の限界、勝利と引き換えの右手。

今はよそう。次の試合はどうするべきなんだろうか。義手を買う

にもお金が足りない。

気づけば俺は、何故かこの機関に来る前までの記憶を思い出そうとした。

しかし俺にはそんな記憶はない。

多分この機関にいる全ての子供達も、多分俺と同じなんだろう。はじめの頃は忘れてしまったことが悲しいことなんだと子供ながらに思っていた。

どんな親でどんな生活をして、どんな毎日があったかなんて、もう全くと言っていいほど覚えていない。

能力者として生まれた俺達に課せられたのは、兵士として日本国を守ること、そして侵略者達を倒すことだ。

能力者として生まれたからには戦う人生だけが俺たちを待っている。

考えているうちに寝ていた。

6時間ほど寝て俺は起きた。

機関最高峰の医療カプセルの技術で、体中にある軽い切り傷などは完全に回復していた。

しかし右手はいまだに包帯が巻かれている。

初めて手がなくなるといった感覚を味わった。

もし俺がこのまま無能力者として、能力者を相手に戦うとなるとどうなるんだろうか。

あの時みたいには上手くいかないだろう。

ならここは能力を使わない自衛隊に入ったらいいんじゃないだろ

うか。

確かに能力を使わないあちらの方が俺の性にあっている。

悩んでいるこういう時は、散歩をした方がいいと本で読んだことがある。

「先生、散歩してもいいでしょうか？」

横の生徒の世話をしていた保健室の先生に、散歩をしてもいいかと訪ねてみた。

「今は安静にしてほしいんだけどね。まあ顔色は大丈夫そうだし、ダメだったら早く帰ってくるんだよ」

先ほどの怒鳴り声とは全くと違い、優しい声音でそう言った。随分と歳を食っている先生だが、顔からして昔はかなりの美人だったと分かるほどの人だ。

「はいありがとうございます」

立とうとすると少しくらっとしてしまっただが、歩く分には全く問題は無かった。

海を見に浜辺に着いた頃には、夕日は沈みかけていた。

淡いオレンジ色をした雲たちは、これからくる漆黒の世界を運んでくる。

夕日を見て、綺麗だと思った。

ふと剣先生の言葉を思い出した。

「結論は焦らなくてもいい」たしかに、ここを卒業までは後7か月もあり、1週間後には2回戦目。何も急がなくてもいい。

ゆっくり悩めばいい。

無理に答えを出さなくてもいいんだ。俺は何を急いでいたんだろうか。

目の前の霧が晴れたようで、少しだけ楽になった。

しばらくこの夕日を眺めていた。

いつもはこんなにもしっかりと夕日を見てはいなかった為、いつももあるこの綺麗さが逆に斬新で少しばかり感動している。

すると沖の方から、何やら黒い物体が近づいてくるのが見えた。

あれは人か？ しばらく様子を見る。

人が、背中を突き出しながら浮かんでいるように見える。

目を凝らした。人だ！ 今すぐにも助けに行かなければ。

素早く立ち、左手にある点滴を引き抜き、浮かんでいる沖の方へと急いで泳いで行った。

ダメだ戦闘で体がかなりダメージを受けている。

疲れのような、鈍っているような感覚が体中を襲う。

なんとか溺れている人を、岸まで連れていくことができた。少し小柄の少女である。

意識が無いのか、顔が青白い。顔は凜とした目が特徴的な美少女

であった。

彼女の胸に耳を当てて振動の鼓動を確かめる。鼓動は無い。

血の気が引いていても、綺麗な顔立ちでずっと眺められるほど、とても整っている。

顔を見たい気持ちを抑え、生きているかもしれないためすぐに人工呼吸を始めた。

なんでこういう時に右手が無いんだ…… 右手が無くなっているのを恨む。

10分くらいひたすらやり続けた。体も限界で気合だけで人工呼吸をしている。

体中が悲鳴を上げていた。

もうダメかと諦めていたその瞬間、彼女は口から嗚咽をするように海水を吐き出した。

よかった生きていた。安堵で体中の力が抜ける。そのまま彼女の胸に倒れこんだ。

「げっほげほ、刀拳乱舞の（上手く聞き取れなかった）を見るまでは…… 私は死ねんだ……」

彼女の口からなにやら何かが聞こえる。

刀拳乱舞ってたしか、そういうPCゲームがあったような……

彼女の顔色もかなり良くなり、少しばかり安心する。

彼女の発せられた言葉と、先ほどの必死な俺の行動のギャップが笑えてきた。

まあ助かってよかった。



「今さきほど、アダムとイブが出会った。例の計画は、順調といったところだろう」

一つの何かが他の何かに現場を伝えている。

言い終わるやいなや、言い終わった一つの何かを囲むように、次々と、ホログラムの岩板が出現し始めた。

「黄金の果実への導きの準備は完了した。計画通りにいつでもいい」

03と書かれた老婆の声が何かに告げた。

「こちらは先月の計画変更により、大蛇の召喚儀式にあと一ヶ月の時間が掛かる」

02が後を追うように告げる。

「まあ慌てるものでもない。審判の日からは時間はまだある」

04はなだめるように言う。

「我々の計画まであと少し。アダム、イブよ、あなた達はどんな物語を私たちに見せてくれるのか……」



## 第七話

昨日俺は、ランク戦でAランク相手に勝ちを挽ぎ取り、代償に右腕を失った。

今は慣れない左の片手で、朝ごはんの調理をしている。

料理が完成した。すると、昨日溺れているのを助けた少女が起きた。

「えう…… どこ、ここ……」

彼女は、ベットの上で子リスのように周りを見渡している。

すると何かを思い出したのか。何かに恐怖をするように、体を丸め小刻みに震えだした。

その姿は、虐待をされている動物のように、全てを拒絶するように震える。

物音で気づいた俺は、できた料理を置き、彼女の寝ているベットへと急いで向かった。

「おはよう。僕は君に危害は加えない。もう一度言う、僕は君に危害は加えない」

震える彼女の目の前で、腰を下ろした。

目線を合わせ、彼女にゆっくり優しく言う。これで俺は安全と分

かっただろうか。

彼女の手首からは拷問を受けたのか、無数に切り傷がある。

時間が経っている傷、最近できたような傷。

痛々しいミミズ腫れの痕に、ただ悲しくなった。

近くから彼女の顔を見る。目はキリッとしていて、他のパーツはかなり整っていた。

モデル雑誌の少女たちよりも、あまりに出来上がっている顔立ちは凜としていて、おとぎ話に出てきそうなほど綺麗であった。

しかし彼女の顔は、かなり疲弊している。今すぐに、彼女には安全と休息が必要だ。

「わ、わたし誘拐されて、飛行機から…… おち、落ちて…… 怖かった」

ぼそぼそと言ってはいるが、彼女は必死に言葉を発している。

これだけでもかなり辛かったんだと感じ取れた。

「頑張った、君は頑張ったんだ。ここは安全だ、君はもう頑張らなくていい」

そう言い、彼女の右手を優しく握る。

その手は少し冷たく、守ってあげたくなるような小さな手である。

彼女の目から雫が出る。ゆっくりと頬を伝い、ベットに落ちた。

彼女は、ダムが壊れたように一気に泣き崩れた。

嗚咽が混じりながら、次々と出ては長袖で滴をふく。

左手で握るのをやめ、背中を優しく摩る。

そして抱きしめた。強く、強く、強く。

とても心の傷は深そうだ。彼女が泣き止むまですっと抱きしめてあげた。

この高そうな服からして富裕層のお嬢さんなのかもしれない。

基本、富裕層の家は、警備がかなり厳しいはずだ。間違えても、誘拐なんて策な警備ではないはず。とすれば、犯人は相当のやり手か、能力者が誘拐したと考えられる。

ここは下手に動くよりも、ここでかくまう方がいいのかもしれない。

実は昨日、保健室に抱きかかえて行ったんだ。

だけど、ここ（ESP学園）の登録が無い人は見れないと言われ、仕方なく俺の部屋で寝かしている。

と考えつつも、彼女にそばにいて欲しいと思った。

それは、俺がどうしようもなく、彼女に一目ぼれをしてしまったからだ。

「朝ごはん作ったんだ、食べようか」

彼女の機嫌を聞くように誘った。恐らくだが昨日から彼女は何も食べていないはずだ。

「今は食べたくない……。……ごめんなさい」

彼女は、うつろな目をして呟くようにそう言った。

今の彼女に、俺はどうすることもできない。しかし今の彼女には食べ物が必要だ。

「今日の朝は豆腐だからさ。一口だけでいいんだ。食べよ」

ここは彼女のことを思って、無理にでも食べさせた方がいいのかもしれない。

今日は水曜日の朝。毎週、決まって豆腐を食べている習慣がある。

「わ、わかった豆腐食べる」

どもりながら彼女は承諾し両手を前にしている。

「起き上がれないの、ひっぱって」

「いいよいよよ、持ってくるから、ここで寝てて」

無理に動かなくてもいいのにな、とか思ってしまう。反射的に右腕を出してしまった。

「み、右腕…… も、もしかして私を助けた時に？」

恐るおそる聞く彼女、顔が青ざめていた。

それは俺の右腕は先が無く。

血の滲んだ真っ赤な包帯が、グルグルと巻かれているからだ。

彼女を助けたことと関連づけて、考えてしまったのかもしれない。

「あ、これか…… これは昨日の決闘でさ。まあ鎮痛剤が効いてるから、今は大丈夫だよ」

しびしび頭を掻きながら彼女に言う。

彼女には包帯で巻かれているため、傷の様子は見えてはいないが、切られた腕先は皮膚で塞がっていて、完全というほどでもないが昨日の治療で治っていたのだ。

「病院いかないと…… どう見ても大丈夫じゃないよ」

こちらを心配するように彼女は言う。

そういえば昨日、あのまま病院を抜け出してきたんだっけ……  
さすがに戻らないとな。ついでに無くなった右腕についても聞いておかないといけない。

「心配してくれてありがとう、本当に俺は大丈夫だから」

いつもユウにする癖で頭をポンポンと撫でてあげた。

「いや…… その、うん……」

彼女は下を向くと、目を合わせずにいた。

「そういえば君の名前聞いてなかったね。俺の名前は佐部佑」

「私は来望舞…… ここはどこか、教えてほしい」

ボソボソと身を縮めるように喋る彼女。くるりと俺の部屋を一望すると、彼女は聞いてきた。

「ここは、俺の家だよ。そこそこきれいでしょ？」

自慢をするように手を広げながら俺の部屋を紹介をする。

俺の住処はコンテナでできた6畳ほどの大きさである。

ドアを開けて、すぐ左には台所があり、正面には16インチの10年前のブラウン管テレビに、そこそこの大きさの本棚、部屋の端っこには小さいテーブルが有り、そこにノートパソコンが置かれてある。

そしてその正面に、今彼女が寝ているベットがある。

パソコンは、俺のランク（特別枠）では買えないような代物で、月末に集められるジャンク品を、俺が修理をして使えるようにしたものだ。

ネット回線は隣のBランクアパートのコードを引っ張ってきて使っている。

なので通信速度が遅くなるが、これはしかたあるまい。

「狭いけど…… 落ち着く」

彼女は膝を抱きかかえるように寝ると、布団をくるっと体に包む、彼女は布団に顔を埋めていた。

あまりの可愛さに思わず俺は小動物を触るように撫でる。

によきと顔を出し俺の撫でる動作を見ていた彼女。こうされるのは満更でもないようだ。「ご飯食べようか」と彼女の頭を優しく触りながら聞く。

彼女は小さく頷いた。俺の料理は彼女の口に合うだろうか。

一人昼食を食べた俺は、彼女とテレビを見ていた。彼女は一心不乱にご飯を食べている。

お昼のバラエティ番組が終わった直後、緊急ニュースが写り込んだ。

「昨晚未明、来望財閥の来望舞さん16歳が何者かに拉致されました。犯人は不明とのことです。来望さんの自宅からの中継が繋がっています。太田さん太田さん」

ニュースで写り込んだ、「えっ！」とスプーンを落としながら、穴が空いた豪邸の映像に彼女は目を丸くしていた。

「私の家じゃん！！ ついに私にもテレビデビューきた」

急に目が輝き出しガッツポーズを شدした。

「なんだよそれ！！ 初めてがこんなので嬉しいのかよ！？ お嬢さん誘拐されたんだよ！！」

なんともまあツッコミを入れたわけだが、彼女はニヤニヤしている。

「えへへ、でもほら私かわいい」

と見ると彼女の学ラン姿の写真がニュースで使われていた。

写真の端っこには17歳と書かれており、俺と同一年ということに少しばかり驚いた。

「高校生ってやつなの？ その……舞さんは」

いきなり名前で呼ぶなんてどうも馴れ馴れしいんじゃないだろうかと思いつながら、彼女の名前をたどどしく読んだ。

「そうJKだよ。舞って読んでいい」

名前で呼ぶ許可が降りて、嬉しいなとかそんなことを思ってしまった。

お返しになんておかしいとは思うけど、俺のことも名前で呼ばせても。

「俺も佑って読んでくれ」

キメ顔ともいかずとも、少しばかり彼女の反応が気になりながら顔を見る。

「わかった佑」

ぎこちない彼女の笑顔が見えた。それも可愛く見える。これが、この感情が、恋をしたってことなんだろうか。

「俺ってさ、舞としばらく一緒にいたいと思ってるんだけど、舞は家に帰りたい？」

勢いで拉致犯罪者のような変なことを言ってしまった。一歩間違えれば変態である。

「えっ…… うん、実は私もしからくここにいたいって思ってた」

彼女は口を隠すように驚くと、嬉しいような感情が籠った声音で言う。

「じゃあこのニュースの真犯人は俺ってことで」

「いいねそれ」

互いを見合わせ、双方から笑顔が出てきた。

彼女も俺に慣れてきたんだろうかなとか、彼女の反応を見てそんなことを考えた。

『緊急特殊召集、佐部佑、職員室へ来い。繰り返す。緊急特殊召集、佐部佑、職員室へ来い』

全土を渡る緊急の地区放送に俺の名前が呼ばれた。

何か俺がやらかしたのかと焦る感情が湧き出てきたが。

もしかすると…… 舞のことなんだろうか。

「佑放送で呼ばれたよね」

「そうそう、お怒りの召集だよ。ここだと誰が来るか分からないから舞も一緒に行かない？」

こういう一方的な呼びかけには急いで行かないほうが良いと、俺の人生経験から学んでいるため、悠々と準備を始める。

「わかった、着替えとかある？ 急いでたらそのままが良いけど……」

「いいいいいよ、こういうのはゆっくりでも良いんだ。着替えなんてなんでも貸してあげる」

「ありがとう、おぱんつとシャツズボンで」

「おk、おぱんつはこれしかないけど」

俺はできるだけ新品で、小さいボクサーパンツを舞に見せる。

「あ、ちょうどいいかも…… 男の人ってこんな履くんだね」

広げたパンツを受け取ると、びよんびよんと横に引っ張っている。ちょっと彼女の息遣いが荒くなったような気がしたが、多分気のせいだろう。

「トイレで着替えてくる。すぐ終わるから待っててね」

マジマジとパンツを見ながら、くるっとトイレの方向へと回るとドアを開けトイレに入った。

さ、さすがに着替え姿を見せる、完全未防備な女の子では無いよなど、ガツカリとまではいかないが、少しばかりしょんぼりした。そんなことを期待していた俺という存在には、もっと悲しくなっただが。

そうして少しして彼女が出てきた。「どう？」と聞いてきたが、ふくよかとも言えないボディが完璧すぎて、いくらダボダボの男物の服を着ていても、その魅惑の体は浮き出てくるんだなど、素晴らしい、現代のほこ×たてを見た。

そういえば、あの番組っていつの間にか消えてしまったよな。詳しくテレビを見ていなかったから、どんな内容の番組だったかなんて覚えてないけど。

「可愛い子って何を着ても可愛いんだね」

お世辞ではない本音を、脊髄反射のように彼女に言う。

「ありがとう、嬉しい」

彼女、そのままの表情でもかわいい、なんて当たり前のことなんだけど、俺の言葉に反応して、恥じらいでいるような表情を見せる彼女もほんとかわいい。つまり可愛い。

「できるだけ怪しまれないように帽子もかぶろうか」

「うん」

適当なキャップを舞に渡し、彼女はかぶるために髪を一箇所に纏めるようだ。

長い髪を手についていた輪ゴムでポニーテールのように後頭部で締める。

その女の子の醍醐味ともいえる仕草にマジマジともいかないが、横目でしっかりと見る。

揺れる髪からはほのかにシャンプーの香りが漂い、女の子の匂いというものに、改めて女の子が側にいるんだなと改めて実感した。準備が満タンで「よしこれから行こう」と言おうとした瞬間、ドアが爆風に晒されたように開いた。

「佑にーさん！！ おはよー！！！」

暗がりの部屋を、ライトで照らすように大きく開いたそのドアの先に、夕がいた。

「「「ぎゃー！！！！！！」」」



## 第八話

「そういうことだったんですね」

「ああ、そういうことだ」

舞がどのような経緯でここに来たのか、そしてこれからここに住むということそれらを夕に伝えた。

「って！！ 何言ってるんですか！！ 普通はこのことを警備隊に言うか、教師に言うかでしょ！！ んじゃなくて、なんで佑兄さんの部屋にこんなやつが住んじゃうのよ！！」

「なんか訂正箇所がおかしいよね！ それとこんなやつとか言うな」  
「こんな泥棒猫に佑兄さんを取られたくない！！ 私もここに、一緒にいる」

夕さん、夕さん。目が笑ってませんよ。物凄い怖いですよあなた。

「ぶふっ……」

舞が顔を両手で隠すように、身を震わせた。

「な、なに笑ってんのよ！」

「そ、その……何か漫才を見ているようで」

「お、お前〜！！ 煽っているのか、この私の怒りを！！」

髪がスーパーサ○ヤ人のように天に突き刺すように天に上る。ま、まずい家が壊れちまう！！

「わかったからお前も住んでいいから、せめて家だけはッ！！」

こいつがキレてしまったら、心身的にも、お値段的にも、タダではすまないのでお怒りを沈めるようにと、ひたすら土下座をする。

静まりたまえ〜 静まりたまえ〜

「ま、まあ佑兄さんがそこまでするなら…… お前！ 私の許可なしに、佑兄さんとは変なことをしないこと！ じゃない、佑兄さんと変なことをするとマジで許さないからね！！」

腕を組み彼女は、舞を睨んだ。それを怖じけずに舞は答える。

「はいよろしくお願ひします」

ハッキリ言えるような性格なんだなと、舞の意外な一面を見た。

言い終わると彼女らの目と目が睨み合う間にビリビリと凄まじい電流が流れているように見えた。

ピロピロピロピロ。ピロピロピロピロ。

どうやら俺の携帯端末に誰かから電話が来たようだ。すぐさま画面を確認する……

「レディをいつまで待たせる気だ。凶に乗るなよ少年（血管が浮き出たマーク）」

剣先生からのメールに、ブルッと身の毛がよだつ。

あの放送は剣先生によるものだったのか…… やべえよこれ凄い怒られちゃう。

「舞、そろそろ剣先生のところへ行こうか」

余談にも余談過ぎなため、そろそろ剣先生のところへ向かわなければならぬ。

「帰りには私の服と下着を買いたい」

「おk店の場所教えてあげる」

てきとうに財布を取る。そして外に出るべくドアを開けようとした。

「ちょっと待って！ 私も行きますう！！」

夕が腰に抱きついてきた。こ、腰が砕けちまう！！

「（コンコン）失礼します」

俺は職員室に着くと、扉の前で舞と夕をおいて一人職員室の中へと入った。

念のためというか、喧嘩をしないようにと双方に言い、さらには5メートル以上は近づくなと釘を打った。

扉を開けると、すぐ目の前に大きいおっぱい、いや剣先生が仁王立ちをして俺を待っていた。

「この監督様は遅れてきても謝罪は無いのか。これは余程有能な監督なんだろうな」

そう言うと、剣先生は手をチョップするように構え、案の定、俺の頭目掛けて鋭い刃のごとく手刀が降りてきた。

「誠に申し訳ございませんでした。腹痛がひどくて」

何気ないように真剣白刃取りをしながら、頭を下げる。

傍から見ればプロポーズしているようにも見えなくもない。

「素直に当たっている、この野郎……」

手を握りしめるように彼女の手刀を止めていたため、剣先生は俺の手ががっつり掴んでいることに気づいてしまったのか、すぐさま手を俺の両手から引き抜いた。

そして後ろを向く、わずかに頬の色が薄い赤色に見えたが、多分気のせいだろう。

「そ、それで要件ってなんですか？」

さすがに扉前で二人して話すのもアレなので、剣先生の机まで来て本題に入った。

「最近、ここの訓練生ではない者が誰かの寮に混じっていると、どこからか報告が入った」

剣先生は腕を組みながら話をする。

「それは物騒なことで、警備隊は仕事してるんですかね」

まるで他人事のように彼女に告げる。もともと嘘はうまい方なので切り抜けられるだろう。

「ふざけるのも大概にしろ。これは何だ？」

そう言いながら彼女は一つの映像を俺に見せた。

それは……俺が舞を左肩で背負い抱えて自分の家に入っている写真だった。

完全に犯罪者のような目付き（その時はいろいろと疲れていた）に、後ろに回った手は完全にお尻をにぎるようにいや、揉んでいたのである。

「だ、誰だこいつ！！　こんな変態が俺の部屋に！！　こんな悪党、俺は許せねえ！　捕まえてきます」

腕を捲りながら、この場から逃げるべく彼女を振り切ろうとした。その時、彼女の手が俺の後ろ襟橋を掴んだ。

「この大嘘つき監禁魔め！！　お前がここに連れ去ったという証拠もしっかり突き止めてある！！　それよりも！！　やったのか、この小娘とやったのか！！　このヘタレ野郎！！」

彼女は俺の首を鷲掴み、前後へと揺らしに揺らす。頭がぐらぐらんと動き、視界が大波に揺れている船のようになっていく。

「してないでえす、してない。僕はあ、手を出してないですう」

問題は監禁したということなのに、貞操の話は全くと違うと思うんですけど！！

確かにお尻は触ってしまった。

だがあのように担ぐと、どうしても触ってしまうものなんだよ。

あー首がもげる。

「してない……　そうか」

俺の首をおもちゃのように振っていた動作を突然にやめると、安心したかのようにその手を襟元から放した。

「とにかくだ。彼女は来望財閥のお嬢様なんだろう。拉致をされた

件、さらに手を出したのかとなると大変なことになってしまふ。それはわかってはいるな監禁魔」

来望財閥…… それは日本の財団トップであり、日本の全ての権力に通じる力を持っているというグループだ。ここESP教育機関もその財閥の手が広がっている。

まさに日本の裏支配者という言葉が一番似合っているグループである。

そんな財団に歯向かった者たちは奇妙な最後を迎えているらしい。それよりも監禁魔という不名誉なあだ名を付けられたことに少しばかり腹が立った。

「来望舞さんは一緒に来ているな？」

「はい、どうして一緒に来ていると分かったんですか？」

できるだけ注意を払いながら、彼女らと来たつもりだったんだが。

「馬鹿か今時は監視カメラで分かるだろう。私にも舞さんに合わせたい」

「分かりました…… 呼んできます」

「え、えっと…… 私が来望舞です」

そう彼女は警戒をしながらも剣先生に言うと、俺の後ろに隠れた。

「どうやらこの先生は苦手なんだと……その気持ち、俺にもわかる。」

「私の前でくっつくな、ベタベタするな」

凄まじい光線のような眼光が俺を襲う。怖いよあなた怖い。

ということとで本題に入った。

「念のために聞いておきます。あなたが来望舞さんでよろしいですか？」

剣先生は考えるように左手で支えながら、右手で顎を触ると、丁寧な口調で彼女の名前を聞いてきた。

「はいそうです」

「東京特区住みであるあなたが何故ここに？」

「え、えっと……一昨日、誰か素性のわからないものから連れ去られ、気づけば飛行船で監禁されていました。そして、突然とその飛行船のハッチが開いたんでしょうか？よくわからないですけど、荷物と一緒にこの島付近まで落ちてきました。そして荷物をイカダにして上陸しようとしたんですけど、溺れてしまっ。海で漂ってるところを、佑さんに助けられたということですよ」

話すことに慣れたのか、話す言葉には上品さが垣間見え、彼女が本当にお嬢様だということに気付かされる。

「素性がわからないものですか…… 連れ去られた当時の状況を詳しく教えてくれませんか？」

「はい、ある日パソコンを見ていたんです。いつものように時間が過ぎ、何も変わらない一日だろうと思っていました。そんな日に、突然と物凄い爆発音とともに、私の目の前に一人の青年が立っていました。歳は20代前半でしょうか。顔はサングラスがかけられており、大まかな顔しか私にはわかりません。多分その男に連れ去られたんだと思います。それから、彼らの飛行船で起きた私は、こんな話を聞いてしまいました『お前の能力残時間はどのくらいだ？』と、能力者の噂はネットを通じて知っていました、まさか本当に超能力者がいるなんて思いもしませんでした。私が思い出せるのはこのくらいです」

反射的に『俺も能力者だよ』と言おうとしたが、喉に突っかかる寸前で飲み込んだ。それは俺には能力が使えないからだ。

「n・ESP—トリックスターズ…… 財閥令嬢を誘拐とは、近々また何かをしでかすということか」

n・ESP、それは人工的に作られたESPのことをn・ESPと呼ばれている。

十年前禁忌の研究により、何の能力も持たない通常の人でも擬似的に能力が発動できる発明が発見された。

実際にそのn・ESPが作られる過程は非人道的だと大々的に発表され、今は作られてはいない。

だが3年前にトリックスターズはn・ESP作成に手を出したのだった。

トリックスターズとは、能力者で結成された反社会的勢力である。

「でも何故舞を誘拐したんでしょか……？ あえて舞さんをこの島に匿わせているという可能性も考えなくもないですよ先生」

助言をするように剣先生に言う。一応この可能性も有り得なくはない。

「なるほどそれも考えなくもないな…… 今から財閥トップに電話をしようと思います。そして明日には舞さんの迎えが来るでしょう。あなたの身元引受は、私が責任を持って行いますので、今日は私の家に来てください」

ぎこちない敬語を使う剣先生。

「せっかくのお気遣いご遠慮させていただきます。私は佑の豪邸に泊めさせて頂くという約束がありますので」

そんな約束は無かったが、彼女が自分から家に泊まると言ってしまったことに少しばかり喜んだ。

言い終わった彼女は、ちらっと俺の表情を確認しているようにも見たが、どうやら話を合わせてほしいとのことらしい。

「剣先生、舞もそう言ってるんだしいでしょ。ま、間違いなんて起きませんよ」

うむ、人生一度も間違いなど起こしたことがない俺だ。

絶対に間違いなんて起きない。

何故かって？ そりゃ俺様がヘタレだからさ！ ははははhhh

hhhh!!

「ぐぬぬ……で、では電話をしましょう……」

「いえこちらでさせて頂きます」

剣先生は荒っぽく学園の備品である電話を持つと、凄まじい速さで日本国番号を押す。

そして打ち終わると舞に渡した。

夕の時のように、目と目の間に物凄い電流が走ってるように見えた。

この電流で焼鳥が焼けそうだ。舞ってこんなに気が強かったんだなあ……

「なんでいつも夕がない時に、話が進んでるんですか!!」

すごい勢いでドアが開いた。夕の髪が上へと逆立っていた。



## 第九話

昨日、舞は彼女のお父さんに電話したところ、どうやらそのお父さんからのご要望で、この学園で彼女を匿ってほしいとのこと、舞の住在の件は決まった。

そして彼女の独断と偏見により、俺の家に来ることとなったのだ。

朝、小さく空いていた窓から、日差しと鳥の鳴き声が聞こえる。

そんな鳴き声に頭が冴えてしまった。おまけに強い日差しが直接俺の頭に照っていたため、まぶたは開けることができない。

いつものように目を閉じながら、ベットから出るべく体を起こそうと思った。仰向けになった体を左手であげる。

おっと、何かが俺の左の肘を取るように動いた。

肘の力が抜けた俺はそのままベットへと戻される。

おっっふ、何だこれ、めっちゃスベスベした肉マンの形をしたようなものが俺の顔を覆った。

柔らかくていい匂いだ。それに2つあるようで、タップタップと揺れるそれは、包容力の塊のようである。

その2つの中央にはボタンのような突起が一つずつあり、俺の丁度頬あたりを擦っていた。

左右に首を振るように顔を細かく動かした。埋めるたびに、頬に



あああああ！！」

オウヘェッ（エコー）

俺は、意識は目の前の項家に集中していたため、いきなりの強襲には全くと対応ができない。

俺は流星のごとく流れる飛び蹴りを、躲せる余裕もなく顔面へと直段させた。

ベットから蹴飛ばされた俺は、バトル漫画のように壁に頭と体を強打し、完全に意識がぶっ飛んだ。

ん？ 目が開かない…… パンパンに腫れた目をやっとこさ開いて辺りを一望する。

どうやらここは俺の家ようだ。「イケっ！！ イケえっ！！」と声が聞こえたが、どうやら目の前でタと舞がテレビとにらみ合いながら、スーパーファミコン対戦をしてる。

体が動かない、コインケースの穴のように狭まった視界で、俺の体を見る。

芋虫のようにロープが体中全体を覆っていた。何だこれ、足まで覆う必要ないでしょ！！

「んんうんうんんん！ んんんぬ、んんんんんんん！」

つつかれた芋虫のように、全身をくねらせながら、彼女たちにごから出してくれと訴えるように動く。

「タスク！ もう少してこの戦いは終わるから！ そしたらすぐに



据え膳食わぬは男の恥とは言うが、アレはさすがに欲望に直球すぎると思つた。

「いいよ全然気にしてないから。ああいうのはもう少し二人の仲が良くなつてからね！」

魔法をかけるように彼女は、左手の人差し指を顔の近くで構える。お気に入りの生徒を叱っている先生のようなだ。

「わかつたよ。そういうえば二人はなんでゲーム対戦をしてたんだ？」

「夕さんが佑を縛るなんて言うから、私が助けようと思ったの。口論になつちやつてゲームで決めようつて。結局縛られちゃつたけど」

喧嘩っ早い夕だが、さすがに一般人相手にはしっかりと対等にするんだなど、安心というか心が和んだ。

「なるほど……でも結局は助かつたんだし、ありがとな」

「はいどういたしまして。私はねーこの生涯戦わずして、ずっと他者から欲しいものを強請つて生きてきたの」

素晴らしい彼女は前の方を歩く。そして続ける。

「夕さんから聞きました。佑のその腕は勝ちを取るために失つたんだっけ。それを聞いてさ、たすく達にとって戦うとは普通のことな

んだらうなって思うんだけど、私にとっては、とってもカッコイイことだと思ったんだ。そんなあなた、そしてユウさんに感化されて、今までの強請っていた自分よりも、あなた達のような人に少しでもなれたらなって」

勝ててよかった、そう言いながら彼女は、俺の方を見ると爽やかな笑顔で言う。

「そうか……」

二人は影で腰を下ろす。涼しい潮風が二人を包んだ。最初に巡り合ったときよりも、少しだけ大人びいて見える彼女。その姿に穏やかな気分になる。

「俺は強請らずにずっと待っていたんだ。だからどうしてもスタートラインには立てなかった。だけど今は違うんだ。俺を鍛えあげスタートラインに立たせてもらった人、俺が寂しくならないように構ってくれた人、俺を応援していた人。その人達のおかげで俺は今、スタートラインに立てている」

そうして俺は無くなった腕を見る。

舞は欲しいもののために戦うと言った。俺のほしいもの……

俺はあの人のようになりたい！！

それを目標にして生きてきたんだらう。

あれほど彼女らから支えられてきて、何故俺は諦めていたんだらうか。

目標に近づくために今できることは……

ランク祭で勝ち続けることだ。

「ありがとう舞」

俺は舞を抱きしめた。

「ど、どうしたの？」

突然に抱きしめられ彼女は驚く。

「俺はあることから逃げようとしてたんだ。もう俺では無理なんだろうなって、俺には限界があったんだなって、違う。そんなんじゃ、あの人のようにはなれない」

「……………」

彼女は黙って俺の言うことを聞いていた。

「舞……………俺やってくる。どうか情けない僕だけど見ていて欲しい」

「……………わかった。無理しないでって言いたいけど、男の子にはそんなこと通じないよね」

彼女もまた俺を抱きしめた。

「剣先生!!」

舞と海を歩いた後、俺は剣先生のいる職員室へと向かいドアを開けた。

「お、どうしたゴムが必要か？ 残念ながらお前のドリチンに似合うゴ」

「先生!!」

俺はここにくるまでで疲れてしまったため、怒鳴っているように発してしまった。

「ど、どうしたんだ」

驚いたのか彼女は目を丸くして俺を見ている。

「確かここにいる能力者は。各々のオリジナルの武器を貰ってるんですよ」

「ああ、そうだ。再注文にはとんでもない金額が掛かるがな」

「……ランク祭に出るため、俺のオリジナルの武器をくれませんか」

唾を飲み込み彼女に告げる。下に向いて深く呼吸をしていた俺は、顔を上げ手を膝につけながら彼女の顔を見る。

「ランク祭…… 僕は出ます」

そして胸を張るように常態をあげると、しっかりと彼女の顔を見た。

「能力者という飾りがなくてもお前は出ると……」

剣先生は俺を試すように見た。

「……はい、僕は勝利が欲しいです」

俺はその先に、あの人に届けるようにもっと先へ進みたい。

「もう一度言っておく、私が能力者を相手にして今こうして生きているのは、私が強いというわけではない。ただ運が良かったからだ、私の運が良かったから……」

それでも分かっていると頷いた。

「……わかった。こちらへ付いてこい」



## 第十話

剣先生に付いていくと、そこはESP学園地下奥深く。

洞窟のような階段を降り、さらなる最深部へと二人は向かった。今までもこれからも二人には会話は無い。

しばらく歩いていると大きな門のようなものが遠くから見える。

その門はまるで、誰にも明かしてはいけないような、何かとんでもない実験している近代科学的のような扉で、核シェルターと言ってもいいような頑丈な作りをしている。

扉の前まで来た。剣先生は持っていたリュックを下ろすと、なにやらカードキーを取り出した。

そしてドアの右にあるカード認証入れにカードを入れ、タッチパネルの暗証番号を手慣れたように打つ。

最後の番号を押すとその強固なドアは大きく開いた。

手前の鉄製のドアが開き、次は横になった渦を巻いている鉄柱が回るように開いていく。

そして何重にもなった鉄の仕掛けがその大口を開けるように開いていった。

その鉄壁の壁の中身に、何があるんだろうかと期待にも似た好奇心が湧き出る。

煙と風が共に俺に当たり、鉄と石油の混じった匂いが俺の鼻を刺激する。

正面には鉄網の柵がさらなる地下を隠すように張り巡らされている。

「こ、この下に何が…… 何があるんでしょうか」

明らかに人工的に作られたとは言えないような膨大な大きさの穴  
いや没落地に、ただただ俺は眺めることしかできなかった。

下の方には何かを隠すように深い深い霧が辺りをさまよっている。

「知りたいか、そういえば訓練生がここに来るのはお前が初めてだ  
な」

そう言うと、さっさと右にあった階段で下に降りていく。

それについていくように俺も階段を降りた。

「佑」

先程まで会話が全くと言っていいほど無い。

そんな重たい空気で突然と発せられたこの声音は、いつものよう  
なバイタリティーが無かった。

「はい、何でしょうか？」

先生の体長が悪いだろうか？　ここらあたりで休憩を挟んだほ  
うがいいのか？

「お、将来の夢は決まったか」

何かを断ち切るように、発した言葉の頭が変わっている。

彼女は何を言おうとしたかなんて俺にはわからない。

「まだ決まってないですね…… それより先生、少し休みませんか？」

「ああそうだな……」

二人は2段離れた位置で座る。左足の先には剣先生の体がある。

先生は目の前の先が見えない霧をじっと見ていた。霧が動くように二人の時間が過ぎていく。

そんな元気のない姿を横目で流しつつ、持ってきたペットボトルを彼女に渡そうと体を伸ばす。

「佑…… 聞いてくれ」

途中までに伸び切った左腕は、彼女の声と共に元の場所へと戻った。

「私はな、お前に挫折をさせようと思ったんだ。一度挫折させて、本来のお前が進むべき未来へと行かせるべきだと思っていた」

彼女の本音…… いや抱えていただろう話に俺は黙って聞いていた。

多分彼女の予定では俺は弮城王也に負ける予定だったんだろう。彼女の話すことから推測をした。

俺に才能があるとまで嘘をついて、俺を教えていたなんて思うと彼女の人の良さに感激する。

「お前は能力者として生きるべきではないと私は思っている。それと同じくらいに、もしかすればお前はとんでもない能力をもっているのかと、日々期待をしてもいる」

いつものように直球で急所に当ててくるような言葉ではなく、とんでもなく回りくどい彼女の発言に驚く。

感激で視界がぼやけてしまうと思い、いつものようなふざけた思考に俺は戻したのだ。

「先生急にどうしたんですか？ 生理でもきたんですか？」

いつものように軽い冗談を彼女に投げた。

「今私には冗談を話すような元気は無い」

俺の顔を見ると立ち上がる。それを見越して彼女にペットボトルを渡す。

ペットボトルを手に取ると彼女は続けた。

「今でも引き返せるな」

来た階段を見上げる。そして続ける。

「佑ーずっと私のそばで一緒にいてくれ。私はお前を失いたくは

ないと、お前が気を失っている時に初めて気づいた。もうどうか…  
… 生死に関わるようなことはやめてくれ」

そう言うと彼女は顔を隠すように前を見た。

背中を見せる姿は乙女のように、彼女らしくない姿に俺は驚いた。  
今までこのような姿を見せたことが無いため啞然とする。

「何を言ってるんですか？」

驚きつつも彼女の言っていることには理解が追いつかず、質問をする。

「……ランク祭には出るなと言っているんだ」

といい、彼女はペットボトルの水をその小さく尖った唇に流し込む。

色々と考えが巡りそうになったが、舞に気付かされた回答を思い出した。

これを彼女に伝えるんだ。

「……僕には目指すべき目標があります。そのために僕はランク祭に出ます」

少し間が空きながらも、そのように言うと彼女を見た。

それに反するように彼女も俺を見る。

そして俺はあのランク祭のことを思い出したので話す。

「剣先生あの時、俺を応援していたでしょう？」

あの円城王也の必殺技を食らわされ、視界が暗くなってる中、彼女は『根性出せ』と誰よりも声を大にして叫んでいたはずだ。それもマイクでだ。

「あれは……」

言葉が詰まったのか彼女は、必死に言葉を選んでるようにも思える。

少しばかり可愛く見えてしまった。やっぱりこの人も女の子だ。二人にまたもや沈黙が流れた。

ケンカ別れ前のカップルのようで客観的に見て面白いと思った。

「先生、僕なら大丈夫ですよ。不格好になるとは思いますけど勝つてみせます」

そっぽを見る彼女を見ながら話した。

「勝って僕なりのダサイ勇姿を師匠であるあなたに見せたいと思っています。そして目標に少しでも近づく、それが剣先生への僕なりの恩返しです」

どんなに不格好でも俺は目標のためなら耐えられるだろうと思う。

だから……

「お前……」

しばらく彼女は俺を見ていた。その顔は感動しているようにも見える。

こうも続ける。

「本当にこの3ヶ月間で変わったんだな…… このドリチン野郎」

彼女は精一杯の笑顔を見せると、俺の頭を左腕の肘で締めげんこつで頭をグリグリする。

ドリチン野郎は全く関係がないでしょ！！

「痛い痛いですって」

横には大きな乳袋があったが、頭のグリグリの痛さで意識が乳袋には行かなかった。

「はやく奥へと行きましょう先生」

なんやかんやありながら二人は地下の研究所のようなところに入った。

大きな穴に沿うような右に付けられた階段を降り、下の方へと進んでいく。

すると右に洞窟のような穴がありその中に研究所があるのだ。

ちなみに階段はまだ奥の下の方へと続いている。

剣先生はまたもやカードキーを入れると、今度は音声認識のよう

……

いやこれは誰かに連絡をしている。

「おじいさん久しぶりだな……。今日は武器を依頼してきた……。そうだ、私のお気に入りのお生徒だ……。ああ名前は佐部佑……。じいさんタスクに合いたがっていただろう」

と彼女と中にいる人の会話を聞く。

剣先生も俺以外の男性と話すような人なんだなと彼女の一面を見た。

まあ俺以外の男子生徒と話すような時もあるけども。

プシューと音がなり、二人は中の方へと入った。

「お前が佐部佑か……」

ドアが開くと出待ちをしてるように70代くらいのおじいさんが正面に立っていた。

「はい、えっと……」

「そういえば紹介はまだだったな。この人はリットナー博士」

剣先生はおじいさんを紹介した。

「よろしくお願ひしますリットナー博士」

何がよろしくなのか自分でも分からない。

彼はどんなことをしているか分からないからな。

しかし、リットナー博士という名前からして外国系の人と思うが、この人は純正の日本爺さんである。

まあ日系という可能性も捨てなくもない。

「そこに掛けたまえ」

少し奥の方へ行くとテーブルとソファが置かれていた。二人して座る。

辺りはチリゴミだらけで、お世辞でも綺麗と言えるほどではない。二人して千鳥足になりながら座る。

「ほれ」

おじいさんは3人分のお茶を淹れると、俺と剣先生が座っている正面のソファに腰掛けた。

如何にもおじいさんと呼べるようなぽっちゃりとした体格にソファが沈む。

「お兄さんの噂は聞いてるわ。お兄さんは、あの卍城王也を倒したんだろう」

リットナー博士は髭のもじやもじやを触りながら喋る。

「ああ、まあ」

「それよりも本題に入るぞ」

話を中断するように彼女は言った。

「ほいほい…… 要するにお前は武器が欲しいっっちゃうことなんだな」

俺の切れた腕を見るとリットナー博士は目的を当てた。

「はい、この腕の代わりになるような物を」

そう言い俺はなくなった腕を見つめた。

昔の面影が全くと云っていいほど残ってはおらず肉が切断されている骨を覆うように発達している。

「腕とな…… 義手なら残り物があるぞい。ちょいっと弄ったら使えそうやな」

博士はそう言うと、ポケットの中からメジャーを取り出した。

「ほれほれほれと。こっちもな、ほれほれと」

手慣れたように博士は、俺の切られた腕のサイズ、太さを図るとメモに取った。

「ちょっと待っておれよ」

付箋メモがたくさん貼られたドアを開け、何かを取りに行った。

「あれでも凄い腕が立つ人だ。心配する必要はないぞ」

博士がいなくなっていていつの間にか彼女は、部屋の氷像を見ながら話しかける。

「もしかしてこの学園生が持っているオリジナル武器は、彼が作っているんですか？」

まさかとは思うので冗談半分に彼女に聞く。

「そうだが……今は一人で全てをやっているらしい」

トントンとタバコを詰め彼女はジッポでタバコの先端に目をつける。

あれだけの人数の武器を作っているなんて本当に凄いなと思った。型は同じようなものが多いが、一人ひとりの大きさなどを考える、とんでもない作業量である。

どんな頭の構造をしているんだろうか……  
化物のような人で少し引いてしまった。

「ほれ終わったぞい」

俺はしばらくテレビのバラエティー番組を見て時間を潰していた。あまりにもつまらなすぎて眠気が襲ってきていたが、彼のドアを開ける大きな音に目が覚めてしまった。

彼の腕には、鉄製の義手がある。

まるでアニメに出てきうな卓越されたデザインに、腕装甲の間からは内部の部品が見える。

元の生身だった腕よりも一回りも大きい義手に高揚感が溢れ出る。まさに男のロマンの塊であった。

「5年前にある少女に作ったパワーアームだぞい。それを戦闘用へと改良させたんじゃないが特に需要は無かったんじゃない。まあお前が欲しいということでも久しぶりに弄っちゃたんじゃないが上手く言ってる。やはりワシは天才じゃ」

ガハハと如何にも昔の鍛冶屋のような笑い方だ。

「早速付けてもいいでしょうか？」

その義手をガン見しながら聞く。カッコイイ義手を早く付けたかった。

「ほれ。あ、ちょっと待っておれよ。出力を弄るのにパソコンが必要なんじゃ」

手に持っていた義手を俺に渡し、先ほど義手を取ってきた部屋にパソコンを取りに行った。

試しにちょっと付けてみた。波を腕で感知するようなものらしい。早く動かしてえ……

「では始めるぞい」

博士はパソコンに義手を接続すると、カタカタと何かを弄り始めた。

博士の説明もなくあらかじめ付けているが、何も心配はないようだ。

は、早くしてくれ……

「では動かしてみてくれ」

俺は今までの右手を動かしていたときのことを思い出し、義手を動かした。

ウィイインとロボが動くような音を立てて、手のひら関節一つ一つが動いていく。

ロボであるため少しだけぎこちないがそれは許容範囲だ。

「す、すげえ。やっぱり義手ってかっけえ……」

驚くほどまでに滑らかに動く義手に感動を隠せない。

「ではこれを持ってくれるか」

そう言いながら博士は空き缶を俺に持たせた。

掴むのにはコツがいるらしい、2回めで成功した。

少し難しいなと思ったが練習次第では元の腕とは変わらないだろう。

「うむ丁度よい設定じゃな。やっぱりワシは天才じゃ」

ふむふむと彼は頷いた。自画自賛が許されるような腕に俺は心の中で感服した。

「わかっているとは思いますが、動力源はその肘関節にあるバッテリーじゃ」

俺はグットボーンにあるボタンを押した。

するとデジカメのバッテリーのように取り出せた。

ちょっとこの作りには心配になってしまう……

「あの…… 僕って結構無茶をするんですけど強度って大丈夫なんでしょうか？」

無茶苦茶に動く俺はきっと壊してしまうんだろうかと心配になってしまう。

「ほほほ、前に言ったじゃろう。これは戦闘義手、チタン製の義手じゃ。ゾウの体重にも耐えられる作りになっているぞ」

ガハハとまた自慢するように笑った。

す、すげえ……

まるでアニメじゃないか……

俺はやるぜーこの腕、そしてこの2丁の銃で……

ランク祭を勝ち抜いて見せるー！！

## 第十一話

目の前は、自然にある断崖絶壁の崖。

足元には足を滑らせる罌のように石が転がっている。

目の前の視界いっぱいには、都市開発が進んでいない野原だった。

目の前からは、風、風、風、体を鍛えているため、よろけはしなかったが十分に強風とも言える風だ。除くように崖下を見た。

深呼吸をして、高さという恐怖を映像という一つの情報にする。

崖から離れ目をつぶる。近くにある木から鳥が2羽飛んで行くのが、聴覚からの情報が入った。

風が止む——助走をつけた俺は勢い良く崖から飛び降りた。

落下というものは俺が想像をしているものよりも遥かに早く、しっかりと周りを凝視すれば見えるものの、脳に景色と認識させれば、周りの景色が淡い線を引いているようにも見える。

できるだけ早く、拳を地面を殴るように構える。

空中で落下する最中、おおよその着地点を見定めた。

着地と同時にそのまま殴れば肩の関節が外れるため、着地は機械の腕に任せ、体全体は受け身を取る。

地に付いたパワーを分散させるためだ。前転をしながら俺は地に立った。

腕関節の義手の扱いには慣れてきた。

全ての受け身をこの義手に託しているが、あの博士の言っていたように、ちょっとやさそとの負荷では壊れない。

機械の腕というものは、生身の人体では無いため、無茶は通じるらしい。

それから15メートル上から俺は何度もフライハイしていた。端から見ればスタントマンの練習か？と思われるだろう。もしくは狂人の類。

「義手の調子はどうだ？」

剣先生が、簡略式ペットボトルを俺に投げしてきた。義手の腕でキヤッチする。

目の前で受け取ろうとしようとしたものの、義手のパワー力に風船のように中身が俺の顔面へと掛かった。

「ダメですね。こればかりは……」

そうこの義手の握力調節はかなり難しい。昨日博士からこのことを言ったものの、『そればかりはお前の訓練次第じゃ』と言っていた。

大雑把な俺には、パワーの調節というものは時間が掛かるだろう

……

でも絶対に、この腕を使いこなしてやる。

その二日後に、俺は昼食を作っていた。

スライスされている豚肉を9枚を熱せられているフライパンに引いていく。

拾ってきた特注であったらう大きなフライパンは、いい音を立

てながら豚肉の油を搾り取る。

月曜日は決まって肉肉の肉づくしの料理を作る。慣れたように三人分の料理を作っていた。

生姜焼きは焦げが気になるため……

ってなんで3人分の料理を作ってるんだ俺は！！

「佑兄さんごはんはまだですかァ!？」

「匂い…… いい匂い（ジュルリ……）」

夕と舞がこちらに持って来いと言わんばかりに、小さい四角のテーブルに向かい合って座っている。

食事代がさすがに馬鹿にならない……

舞はいいとして夕からはしっかり金を取らなあかな……

「夕、舞！ 皿ぐらいは用意してくれ！！」

こいつら…… とても意気投合しているのだ。

仲が急に良くなったり悪くなったりと、とんでもない連中だ。

俺には女の子の気持ちなんて全くと分からない。

明後日にはランク祭2回戦目というのに…… もうちょっとはだな、俺を気遣え！！

そして、特に何もなくランク祭当日。俺は学習館へと来ていた。

舞は剣先生に任せ、今は次の対戦相手の知らせを待つ。

2階にある教室へ上がる階段を登る。以前はあんなに重かった足

並みがこんなにも軽くなっていることに驚いた。

左を曲がり、俺のクラスの奥の方を進む。

廊下で佇んでいた人たちはみんな俺を見ている。なんで俺を見ているんだ。あるものは俺と目を合わせると逸らす。

教室へとドアを開け俺の机へと進んでいった。

卍城王也を倒したためか、クラスの連中の俺を見る目が変わっていた。

Eランクの連中は、完全に俺を少し見ると、すぐに会話を始める。アレに勝ったんだから評価も変わるんだろうなと思う。

あるものは完全に避けている。元からそんなもんだったから大して気にはしない。

もとからゴミを見るように見るお前らのことが大嫌いだからだ。対戦相手の発表がもうすぐだ。

「対戦表だ。出場者は確認を」

黙想をしていると担任の矢吹がランク祭の表を配った。前の席の男が俺にへと配る。

どらどらと確認してみると3回戦目、佐部佑 盾田剣士という文字が並んでいた。

クラス中がざわめく。

「では、出るものは各自準備をしておくように」

いつものような硬い顔をしながら矢吹は教室を出ていった。

「あの…… 佑くんでいいんだよね」

表を確認してすぐに、後ろの彼女から声が聞こえてきた。

振り向きつつ名前もしらないため、どんな対応をしたらいいのか俺には分からず敬語を使う。

「はい佑です…… なんででしょうか？」

俺は何をビビってるんだろうかと思いつつ彼女の顔を見た。

「次の対戦相手、盾田剣士ってこの学園最強の能力者だよ…… どうするの？」

どうするのって言ったてなあ……

「えっと…… やるしかないでしょう？」

そのことを聞くと、彼女は世間知らずを見るように俺を見た。なんだよ当たったからには勝つしかないだろう。

「アレは人じゃない…… アレには絶対に勝てない」

彼女は俺を心配するように見た。

「ここにいる大方の人たちって、テレビに出てきているような普通の人ではないですよ…… 一応調べてみます」

そう言い返し、手元の携帯端末で学園のデータバンクにある能力

者情報を調べる。

前日もそうだが何故俺が対戦相手の調べ物をしないのかというと、結局戦場では素性の知らない相手と戦うということが当たり前なので、大して意味は無いと思っていたからだ。

歳16歳、育成機関取締役、北九州事変にて多大なる戦果をあげる。その若さで全勝無敗の戦闘力を誇り、去年はその健闘を讃え：

：

「見た？ 付いた二名セカンドネームは、『拒絶の王』。第22回生のなかで一番S級に近い存在……」

写真は、短く後ろに固まった髪、力でねじ伏せる武士のような四角い厳格な顔立ち。

16歳とは思えない、百戦錬磨の戦士とも言えるそんな顔だった。どれほどの戦場を越えてきたのかは彼の顔を見れば分かる。彼は相当のやり手だろう。

「……どんなに強い相手だろうとやるしかないでしょう？」

あの人のようになりたい。そう願った。それを叶う環境を貰った。そうだろうオレ一人ではここに座ってもいないだろうし、このリンク祭にも出られなかっただろう。そのために俺を応援している人のためにもやらなければならぬ。

昔の戦争は数である程度の戦況が決まったらしい。

今は能力者の個人的な強さにより戦況が決まる。だからA級はすぐに戦場に送られる。

「あなたがどうしようとも構わない。今更言うのも…… だけど時には引くことも肝心よ あなたには無」

真剣な顔は、無謀に立ち向かうとする戦士を見るような目で見ていた。

この言葉でどれほどの重みか――。それでも、それでも。

「俺はやるよ…… 心配してくれてありがとう」

彼女の顔を見ると、できるだけ笑顔を向ける。そして俺は席を立った。

無謀と言う彼女に背を向けて。

「なんでいつもそんなに距離を取るの!？」彼女の放ったそんな言葉さえ、今の俺には伝わらなかった。

闘技館に向けて歩いていった。

いつものような足取り、完璧とも言える体の調子、機械の腕、足、視覚、嗅覚、聴覚、その全てがいつも通り。

唾を飲み込むといつものように胃の方へと送られていく音が聞こえる。

全てが何も変わらなく、特に不調もない。

意識も変わらない、入ってくる情報を全て処理するこの脳も。

出場者の待合室まで来た。勝つためにと仕上げてきたこの体も鮮明なほど普通。

何も考えることもなく椅子に座り、黙想を始める。

余計なことを考えないほど、思考も安定しているのを実感する。

「佐部佑準備を」

待っていた係である矢吹の言葉。静まり返った待合室は彼の言葉だけが響いた。

「やってやろうじゃあねえか！！ 無謀ってやつを負かしにッ！！」

無謀？ こちらはそんなの鼻からわかってんだよ！！

引け？ 誰が引くんだよ。

前線無敗？ だからどうしたんだよ。

S級？ 何だそれは！？

俺は勝つんだよ全てをかけて、命をかけてえッ！！！！

やつを倒すという前のめりになった意識と体を抑えつつ闘技場へと入る。

周りの観客席は、卍城王也戦の時よりも人数が多くなっていた。

誰もがヤツを応援しているんだろう。俺には支えてくれた剣先生、舞、夕がいる。

絶対に彼女らの前で負けたりなんかしねえよ。こちららパワーがな、無限大なんだよッ！！

用意された白線まで俺は歩く。緊張もなく、ただ真っ直ぐに正面を見据えて待つ。

前の扉が開いた。左右同時に開いたその扉、中央にいた大柄の男に会場のライトが光る。

ずっしりとした丸鉄のような体格は、全てを威圧するように気配を漂わせていた。

戦車いや、鉄の城をイメージするような巨体に扉はその男にとって紙のように見える。

男は歩いた。地を蹂躪するが如く剛脚は、地にいるものすべてを踏み潰しそうである。

たまらない、見るだけでも彼がどれほどの手練かということが分かる。

ヤツを倒すんだ。そして俺がやれるということを手分けしてやる。彼を睨みながらそう心のなかで唱えた。

ヤツを倒さない限り、俺は憧れのあの人にはなれない。絶対になるんだよ、あの人のように。



## 第十二話

二人白線へ並んだ。対局する二人は反する存在のように、体格も、その全てが反して見える。

それほどまでに、彼の存在感に場違いという考えが産まれる。武器を使わない能力者と言っていたが、本当に武器を使わないよ  
うだ。

ただ堂々に振る舞う姿。その巨体が武器のようでもあった。

「お前が卍城王也を倒した無能力者、佐部佑か」

彼はそう言う。その発したことばからはまるで、俺の相手をして  
いるようには思えなかった。

景色の虫と喋るようだ。

「ああそうだ、次はお前も倒すけどな」

彼の虫と喋るような声音に怒りが芽生え、俺の口から笑みが溢れ  
た。

彼の言葉に、買い言葉を。

そして、俺は右腕の皮膚に見立てた皮ゴムを破り取るように取っ  
た。

機械のは光沢を浴び、その強靱な黒鉄の腕を奴に見せる。

「朧城王也…… アイツは甘い。右手一本だけとはヤツらしい」

腕を見るに奴は感想を漏らした。

「フンッ ほざいてろよ」

戯言を振り払いように俺は鼻息を出す。

「そうして頂く、しかし、お前ごときでは俺の足元にも及ばないだろうな」

鉄壁の鉄城から見下ろすように彼は答えた。

彼の中で覆せない絶対的な自信があるのだろうと思う。

「んなのやってみねえとわかんねえだろうがこのデカブツ」

必ずお前の足元掬ってやる。おじさんみたいな顔しやがって、16歳とか嘘だろ。

俺はそう思いつつ手を握りしめる。その手からは汗がにじみ出ていた。

「それもそうだ。実戦というものはそういうものだからな」

1本取られたと笑いながら彼は答える。そして悠々とこう続けた。

「貴様ごときに本気を出せば個々のメンツにも響いてしまうからな…… 安心しろ本気は出さんよ」

先ほどとは違い、絶対的な自身から放たれる声音だ。

「お生憎様、俺もお前に本気なんて出さねえよ。むしろ本気を出す前にお前が終わっちゃうかもしれないからな」

その殺意を交わすように彼に投げかけた。

「ほほう……それは楽しみだ。おままごとの武器でどこまで戦えるか見せてもらおう無能力者よ」

「お前もその動きにくそうな図体でどこまで付いてこられるか試してやるよ。この俺様直々に」

お互いににらみ合い、その眼光からは高圧の電気を連想される。

「口が達者の用意だな。それが戦闘にも反映されるとお前も嬉しいだろう」

「お前も馬鹿そうに見えるけど意外と喋れるんだな筋肉ゴリラ。むしろ喋る練習になったか？」

場の空気は迸る電気のように、ビリビリとしている。

会話の攻防にも慣れてきたころ、係りに並べという指示が入った。

そしてしばらくして実況が叫んだ。

「右手に見えるのは全台未聞の無能力者、佐部佑だあ！！ 底辺オ  
ブランク改め、底辺の魔術師。今度は何を見せてくれるのか！！」

実況が俺の名前を口に出した。会場の観客席からまさかの歓声が  
聞こえた。

卍城王也の頃のような始めの頃は、全くと言っていいほど聞こえ  
なかった歓声が、聞こえるというレベルにまであることに少しばか  
り驚いてしまう。

そうか……俺にも応援をしている人がいたのか。

俺は、舞、夕、剣先生以外の見ている観客全てが、俺の敵という  
勘違いをしていた。

しかしこうして俺を応援している人もいるんだと、なんだか申し  
訳ない気持ちになってしまう。

俺はやる。だから見ておいてくれ。

俺の勝つところを。

「左手に見えるのは、この学園最強の『拒絶の王』盾田剣士だあ！！  
ランク祭三連覇へ向けて、今も勝ち続けています」

鉄の剛球のような男はその屈強な腕を天に掲げた。

その腕からは強者ならざる『気』が肉眼で確認できるほどにまで  
あった。

押され気味な心を立て直す。やるんだよこいつを倒して……

「両者準備はよろしいですね」

——俺はやるんだッ!!

緊迫した空気がこの会場全体に流れる。

ここに居るすべての人がこの間に唾を飲むような緊張感に襲われていた。

俺は目をつぶりイメージをする。『常に優位に立つ自分』その姿を。

完璧だ。

「ファイッ!!」

始まりの合図が切って落とされた。

すぐさま距離をとり、懐から愛銃のSIG SAUER P22

8 XXダブルクロス 改を2丁取り出す。

その金属の光沢を反射させ、銃は前方でヤツの方へと構えながら、引き金を引いた。

爆発によって発生した火花が俺の目の前を飛び散る。

そして放たれた弾丸は、ドリル状の直線起動を描いて、狙っていた彼の頭のほうへと進んでいく。

不意打ちとも言わずともその突然の攻撃に、俺は淡い期待が心の中でにじみ出てきた。

それを押し殺しながら弾の行方をしっかりと確認する。

と、止まった!? 弾が彼の目の前で突然と止まり……

いや、何か「見えないもの」に当たったように空中で停止。

弾丸は生気を無くしたように地面へと落ちたのだ。

壁のようなものが彼の目の前にあるのか……

いや彼の目の前にはどんな物体も存在しない。

「フン、貴様の攻撃など完全に見切っている。次はこちらから行かせてもらう」

彼は前に落ちた弾丸を脚で踏みながら、距離をとっていた俺へとその眼光を浴びせ、流れるように、右手と左手を後ろ腰に回す。

その姿は大太刀を抜き取る武士のようでもある。

しかしその腰には、何も付いてはいない。

「ランセーネン・シールドッ！！ 形ケイ・太刀の型」

そう、あれは丸腰の常態で抜刀の構えを取っているのだ。

その仕草を眺めていた俺は、彼がどんな攻撃をしかけてくるのか、彼、そして自分の周りに注意を張り巡らせる。

「はぁッ！！」

一瞬、その0.2秒の間に俺は、彼の空間ごと切り捨てそうなほど振り切る行動を認識。

勘でその場にはいけないと感知し、すぐさま義手を地面へと叩き込む。

義手のフルパワーで地面へと全開に叩き込まれた体は、弾き出されたように地面へと離れる。

体全体を攻撃を避けるように、地面へと名一杯仰け反りになる。

「何か」が俺の下ギリギリを通るのを、第六感とも言えるようなモノで感じた。

そして何よりの証拠が、掠った服が切れていたことだ。

「叩き切ってやる!!!」

瞬間、彼は兜割りの要領で大きく上半を後ろへと振りかぶる。

怒涛の第二攻撃が来ると気づき、空中にいた俺はヤツの気を逸らすため攻撃へと入る。

宙にいなながらも、最強のバランス感覚で閃光のように体勢を整え、彼の体へと2丁の銃を構え、放った。

丁度振りかぶっている彼の攻撃と弾丸では、圧倒的に弾丸の方が早い。

完全なる感覚で弾を彼の体中心部へと狙っていた。

この一瞬で小さいのである顔面を狙うような度胸は、今の俺にはなかった。

弾の行方を見ずに着地、すぐさまフィールドの遮蔽物へと身を隠した。

弾は見事に彼の両脇腹へと、シンメトリーに直撃していたらしい。奴が両方の腹を押さえているのを移動と同時に分かった。

「っ…… 口だけでは無いようだな無能力者よ」

弾をリロードし、遮蔽物関係なしに攻撃しそうなので、すぐさましのぎ脚でこの場を立ち去る。能力者との戦いは隠れ場所など全くとっても意味はない。

彼らは無茶苦茶なのだ。

そんな無茶苦茶加減を弔城王也との戦いで学んだ。もちろん戦闘に關してもだが……

思考が恐ろしいまでに冷静になっていた。

障害物を転々とするように回避行動を続けながら、研ぎ澄まされた神経で彼のいままでの動向を觀察、そして今までの彼の能力について考える。

彼はモグラたたきのように障害物を一つ一つ潰している。

第1攻撃目彼は俺の銃弾を見事に喰らわなかった。

喰らわなかったというよりも弾丸が、彼の目の前で、生気を無くしたように落ちたのだ。

明らかにあれは、彼の目の前に見えない「壁」があったに違いない。

これは拒絶系統系能力者のバリア展開能力。

この銃の威力は並大抵のものならば簡単に粉々にすることができ  
る。

人工物では到底到達できないような強度なんだろう。「能力者」というものに乾いた笑いが出る。

こいつはバリアの情報全てが、都合の良いように変形できると分かった。

先程の振り切った攻撃は、バリアを太刀の形へと変形させ攻撃したのだろう。

先程の彼と俺の距離は5メートルちょい。見えない太刀のリーチがおおよそ分かった。

個人差があるらしく、展開するバリアの個数、バリアの強度、バリアの形、バリアの色彩が人により違うらしい。

ただしバリアにも重量があるらしく、彼の第2攻撃の速度は明らか

かに遅い。空中にいたため、避けることができなかったものの、間合いを調節することによって十分に彼の攻撃を避けることができそうだ。

見えないシールドに、見えないブレード……

正確な読みと判断が要求されるがーやってやる。

## 第十三話

「おいデカブツ！」

ある程度考えがまとまってきたので彼の真正面へと立った。

「無能力者よ、その反応、思考速度だけは評価してやろう」

それに反応し彼は遮蔽物への攻撃を止め、俺をたたえるように言い放った。

なんでこうもトップを走っている連中は人間が出来ているんだろ  
うか。

少しばかり癢に触ってしまう。

二人はフィールドの中央線に沿うように向かい合っている。

その距離は9メートル。お互いが攻撃をしようと行動すれば届く  
範囲である。

「それよりも。お前のおかげで俺の隠れるところが無くなったじゃ  
ねえか」

奴に嫌味を言うように投げかけた。

俺の横を見渡せば、日本刀で試し切りしたの木々達のように、3  
×2メートルほどの長方形の障害物たちは斜めに切られていた。

それは幼児に遊ばれた積み木のように、無造作に散らかってしまう。

「それはすまない。ゴキブリのようにちよくちよくと逃げ出すお前には、逃げ場所を潰しておく必要があると考えた。住処を潰してしまい本当に申し訳ないと思っている」

彼は軽いジョークをたたくように投げかる。

こいつ最高に煽りがうまいじゃないか。

口のうまさになやりと口元が上がってしまう。

「ったく……むちゃくちゃなんだよ。しかし、なんで何も持っていないのにこれらを壊せるんだ？」

俺は彼の能力について聞いてみた。もちろん彼の能力だけは全くと知識がない。

「何を言っているんだ。お前は、私のことを洗いざらい調べてきたのだろう。初動の見事な避けは、事前の情報がないとできない芸当だ。まあ私は貴様については全くとは調べてはいないが」

お前のことなど眼中になかったからなと彼は言った。

その言い草からは、全てを見透かしたようにも聞こえる。

その強者特有とも言えるその言いぐさに不快な感情が、俺の腹の中を駆け巡る。

俺は14歳から去年の16歳まで、ランク祭に出場をすることができなかった。

だから情報が無いというのも無理はないとも思う。

なんせ俺はランク祭に出ることが叶うまで、陰でさまよう亡霊のように生きていたからな！

最弱無名だった過去…… だけど今は違う！！

「バレてたか…… そうだよ。だけどお前の能力詳細だけは分からない。でもまあさすがにおじさんクラスの上級者は、嫌でも俺の頭の中に『功績』という情報がいくらでも入ってくるよ。だけどよおじさん。俺のことを知らないだなんて、顔に似合って勉強不足なんだな」

全ては能力さいのうと言わんばかりに、こいつらは絶賛というビールを浴びてきた者たちだ。

日陰の片隅にいた俺とは違う人たちだと俺は思っていた。

だけど今こうして最弱無能と言われてきた俺と、互角とも言えないが戦えているんだよ。

一方的に俺が最高に気持ちが良いわけだが。

「ああ、私の勉強不足だ。貴様のような無能力者が卍城を倒したことがいまだに信じれなくてな。卍城は最高の甘ったれ野郎だ。あいつの真の実力ならお前ごときにはおくれを取らないだろう。だが一時の気の迷い、判断ミスでお前のような石ころ一つに転んでしまった」

奴は唾を吐き捨てるように呟いた。

「これでは、他の能力者に示しがつかないではない。そうは思わな

いか？ 我々A級というものは戦争の前線で戦う、いわば国を背負う秘密裏のヒーローだ。そんな重圧の掛かった看板に糞を擦り付け、おいおい自分は病棟で声帯の治療ときた」

声質からは憤怒を感じ取れる。奴の卍城に対しての好感度がそうとうなマイナスであり、彼が「負けた」ことに対してどれだけ心がいない思いをしているのか分かった。

俺には心底どうでもよかった。

「へへっ！ そうかいそうかい。そういえばさすがに俺たち、戦闘を無視してしゃべりすぎじゃないの……」

彼の顔めがけて、不意打ちのナイフを投げる。投げる対象からは、その攻撃は見えないような技術を使った。

これは義手のような瞬発的なパワーが出せなければできない技術である。

右手から、ツバメの急降下ように放たれたナイフは、狙いすましたように彼の顔へと向かう。

しかし、空中で放す途中余計な力が入っていたためナイフは半回転し、柄を頭にして飛んでいってしまった。

「ッ…… 甘い」

彼は何かを慌てるように、顔の前でナイフをキャッチする。

バリアを使うことはせずに右手を使っていた。

はたから見るとば、蚊を空中で握りつぶすかのようにナイフをキャッチしているようだが、しかし俺には微々たる焦りのようなもの

が見えてしまった。

なんだ……？ 今のは。

「不意打ちか…… 弱者の貴様らしいな」

彼は、何かを断ち消すように発した。

速度は十分だったが、さすがに誤ってしまった軌道だ。

いやこれくらいの攻撃は、こんな強者には通用しないのだろう。

さすがはS級に一番近い人間だ。

接近戦はあの見えないブレードに、遠距離はどこにあるのかさえ  
分からない鉄壁の壁……

これらを全て読み切ることなんてでき……いや、やってやるん  
だよ！

発想を逆転させるんだ。こちらのペースにもっていけば活路は開  
くはずだ。

彼の攻撃は明らかに遅い。剣先生についていけたんだからいける  
はずだ。

俺は銃を奴の顔めがけ構える。

彼の姿が大きな壁のようにも見えた。

それは岩窟のようで、今の限界を超えるにはこれくらいはないと  
な。

俺は今の自分そしてこの壁を越えて、あの人に少しでも近づく。

壁があるなら叩き壊すだけ…… ここは接近戦でいこう。拳で行  
くぜええ！！

「行くぜおっさん！！ 俺の攻撃ダンスについてこられるか！！」

俺は姿勢を前のめりになりながら、獲物に見立てた彼を噛み殺しに行くように地を蹴った。

体の時間に対する意識を極限まで起動させ、体感時間が5分の1の境界線を越える。

思考の半分を彼の攻撃の読みに、さらに半分はこちらの攻撃を讀んで展開するだろうバリアの予測に使う。

相手の攻撃による反応は脊髄に全てを任せ、感覚で体を動かす。

この体の使い方は剣先生の教えによって使うことができた。

これは一種の悟り状態まで精神を変化させ、感情による無駄な思考を一切減らし、いかに効率よく相手の攻撃を避け、どれだけ早く攻撃を繰り出せるかということだ。

それらを『覚醒せし感覚《Awake Sinn》』と名付けている。

俺は蹴った脚を再び、ジャンプをするように蹴り上げる。壁を叩き割るかのような勢いを、体全体に感じながら全力で進んでいく。

走りながら愛銃のSIG SAUER P228 XXダブルクロスを懐から取り出す。

周りの景色は奴をとらえると、書き終えた油絵を指でなぞるように、滲んでいた。

あのかいでかい壁を突き破り——俺は勝利をもぎ取る。見ていてくれ。舞、夕、剣先生。

「正面からとは血迷ったか無能力者よ！！」

彼はまたもや何もついてはいない腰から何かを抜き取るように構える。

それを読んでいた俺は銃をバリア状の太刀を持っているだろう手へと放つ。

奴はどうあがいても間に合わない弾に、バリアを使ったらしい。彼の切りかかった腕が途中で止まっていた。

そしてバリアによって防がれた弾が地へと虚しく落ちた。

3秒も満たないギリギリの時間で、奴のミッドレンジまで行けた俺は、落ちた弾と同時に、奴の今にも切りかかりそうな右腕を、左の手のひらでこれ以上は切らせないようにと止める。

そして止めた勢いで義手の腕を大きく振りかぶり、フルパワーで奴の顔面へと叩き込んだ。

奴はスツと寸分で避けていた。

それは大きい図体とは思えないほどの軽い身のこなしである。

奴は浅くしゃがむと、義手のひじ関節の上に突き飛ばすように張り手。

それは俺の使ったパワーを受け流すように使っていて、寸分も狂わないロボットのように無駄がない。

張り飛ばされた義手は、金属とは思えないほど上へと振り上がり、その反動で俺の体がつられるように宙へと舞う。

当時に飛びかけそうな意識を自我へと引き吊り落とし、すぐさま、カウンターとも言えるような右足で鋭いキックを彼の顔面へと決めた。

しかし彼は岩盤のような左腕で受け身によるガード。

攻撃はうまく受けを決められた。

次の左頭部の攻撃へと移すべく、体感と体全体を安定させ奴を眼中で捉える。

しかし、右手が受け刺しの剣を持っているように構えられていた。このままでは奴の受け切りにやられると判断し、体感をバック宙するように後方へ、そしてきれいに着地。

瞬時に奴は見えないブレードを抜き切るかのように構えていた。

すぐさま奴の横大振りによる剣撃を避けるべく、義手を後ろへバックするように叩き込んで距離を取った。

バッタのように回避した俺は、後ろからの衝撃に転がるように対処。

瞬間、鋭い何か俺の目の前を通り過ぎたのが第6感で認識した。奴は見えない剣を横に切り降ったのだらうと感覚的に察知する。

着地と同時に、彼が接近戦でバリアを展開しないことに疑問を抱いた。

俺ごときの接近戦には使わないということだろうか……

強者ゆえの手加減——いやこれは先ほどの過去の先頭と鑑みるに咄嗟には使えないということか？

いやそれはない。先ほどの銃弾を防いだのはどう見てもバリアだ。では弾丸のような強烈な衝撃にしかバリアは発動することができない……？

それなら納得はいく。

軌道が狂ったナイフでの投擲を防いでいたあいつは、妙に焦って

いたからな。

これはまだ仮定の段階だ。もう少し様子を見る。

## 第十四話

奴の巧妙な受け、ロボットののような正確なカウンターにどれほどの努力を要してきたのかと分かる。

さすがはトップを張っているだけはある男だと思った。

ここまで戦えていた自分にも賞賛を送ってやりたいと自分ながらにも思ってしまう。

俺と奴との距離は、おおよそ15メートル。

「全ての行動が、まさに無能力者の限界といったところだな最弱《Fランク》よ。お前の人生を映したような浅い攻撃ばかり……お前はその程度の男か？」

奴は右手を握りしめ、挑発するかのように正面にいた俺の方へと伸ばす。

目からは俺の限界を凶ったようにも見えて、今までの冷静さを欠いてしまいそうになった。

(黙れ)

その挑発を殺すように弾丸を奴めがけ放つ。

さきほどとまったく変わらずに、蚊取り線香で勢いをなくしてしまった蚊のように、奴の目の前で落ちた。

まだ試していなかったことがあったので、実行に移そうと考えた。

それは弾丸を何発も同じところに打ち込むことだ。  
さすがのバリアでもこの攻撃では壊れるのではないか。そう考え  
ついた。

「その攻撃は無駄だと、骨の髄まで理解できたはずだが」

そう言い奴の右の唇がニタリと上がる。

「言っておけ」

2丁の銃で弾丸を重ね、リズムカルにだた1点だけを集中的に狙  
う。

一度バリアに当たった弾を、さらに弾で押し返すようだ。

撃って撃って、撃ちまくる。

連続で発射されたため、高熱の薬莢があたり一面に散らばる。

この愛銃SIG SAUER P228 XXダブルクロス 改  
は、その軽さ、握りやすさで、動き回って戦闘を行う俺にはお似合  
いの武器なのである。

連続発射によるジャムの心配はない設計にされている。

飛び出た薬莢は前方に飛んでいくようになっていて、すべての調  
整、改造は剣先生によって教えられた。

「射的による一極点集中攻撃か、並外れた射撃の技術だ。賞賛に値  
する」

奴の顔面へと弾は何発も発射される。

その度に無残に地へと落ちていった。

結果は何も変わらない。何物でも通さないという『絶対領域』の無色透明なバリアはまさに拒絶という言葉が似合っている。

さすがは拒絶の王と呼ばれるほどの頑丈なバリアだ。

俺はこれ以上は弾の無駄だと判断した。

銃を瞬時に懐へとしまう。

「どうだ、気が済んだか無能力者よ」

彼は仁王立ちをして俺を見据えている。

まさに鉄人、何重にも重なった分厚い巨大な壁だと奴をみてそんな感覚に陥る。

壁があるならばぶっ壊す。ただそれだけだ。

「やっぱり拳でしかお前と戦えないみたいだな」

自分の拳を前にいる奴に向け、中指を立てた。

結局は拳なんだろうとは感じてはいた。こいつには小細工など通用しない。

俺は再度奴の方へと全速力で駆ける。隙を作るためにと、同時にナイフを投げる。

奴の顔面に吸い付かれるように空中を切り裂く。

全力で振り下げ、義手のパワーを存分につかって放たれたナイフ。肩の関節が悲鳴をあげる、限界はとうに來ていたと認知はしていた。

「来いッ！！ 無能力者！！」

「ああ、ぶっ壊してやるぜ」

奴はすぐさまナイフを掴み、俺の顔面へとそのデカイ拳を振りかぶった。

その隙を見計らい、地を速度をさらに加速。

度重なる体の行使により、きしむような痛みが全身を包む。

こんな体なんて、どうなってもいい。

上体から振り上げた奴よりも、早く懐へと入っていた。

すぐさま岩窟のような顔を左腕でアップー、そのまま上に伸びた体重移動で、腹の脊髄中核を砕くように何度も何度も殴る。

普通の人間ならば内臓が破壊されて、途中で死んでしまいうそうだが、念には念を入れ、さらに何度も叩く。

肉を殴っているにも関わらず、その腹は鉄の要塞のように軋むことを知らない。

奴は攻撃を食らいながらも、一言も根を上げることにはなかった。

そして上げた腕を俺の方へと振り下ろした。

十分に避けることができたパンチー一寸分で避ける。

奴の攻撃は遅くて重い。しっかりと見極めれば避けることは可能だ。

避けた体重移動を使い、先ほど何度も殴り続けたみぞおちをフィナーレと言わんばかりに、義手のパワー全開で叩き込んだ。

ドズッ！！

筋肉と金属がぶつかったとは思えないほどの鈍い音。

たしかに攻撃は急所へと当てたはずなのに……

（あれだけ人的急所を殴り続けたんだぞ…… 何かがおかしい）

「ふんッ…… 甘いわぁッ!!」

奴はそれを見計らっていたのか、完全なる読みの攻撃によるものだろう。

何百Kmもの上空から落とされた鈍器のようなものが、背中にぶち当たった。

肺は衝撃で紙パックを勢いよく潰したように、ペしゃんこになったのを感じる。

勢いよく地へとズレ落ち、胸板に近い肋骨が、五本ほど折れた音が聞こえた。

そのうちの何本かが肺に刺さったのか、瞬時に潰れた肺を治すようにと呼吸する度に、とんでもないような肺損傷による激痛が襲う。すぐさま奴は俺の髪の毛を引っ張り上げ、威厳な顔立ちで俺の顔を宙に飾るように見た。

「ここまでやれる無能力者の貴様に私から賞賛を送ろう。無能力者よ、『拒絶の王』のメンツを守るためにもここで死んでおけ」

奴は左手に見えない刃を持ち、突き刺すのだろう、勢いよく後ろに振りかぶった。

そして刃で心臓を突き刺そうと、その左手を俺を串刺しにすべく、見えない刃を持った手は近づいて行く。

俺は渾身の膝蹴りを、奴の突き刺そうとした腕に当てた。

その回転力で、奴の胸を踏み台にして体全体を逆上がりの要領で振り上げる。

奴の手は、俺の髪の毛から離れた。そして後ろに回るようにきれいに着地。

着地点は奴とは、約5メートルほど離れている。

すぐさま義手のフルパワーで地面を殴り、地上から奴めがけ飛び上がった。

地上高く飛んだ、天を泳ぐ鷹のように。

「その精神力、お前を倒すのが惜しいぞッ！！ 無能力者よお！！」

奴は見えない刃を両手持ちして、上半身を縦に振りかぶった。

——我が骨を切らせて、敵の頭を断つッ！！

奴の攻撃を左肩から近い体に向け、受ける。

序に僧帽筋を切られ、破に鎖骨の断裂音が魚の首を切り落とすように聞こえる。

棘上筋、棘下筋、広背筋に続き、急は鎖骨の中央辺りを切り捨てられた。

軽く左肩を前に出していたおかげか、空中に分断された血肉、内臓、心臓が勢いよく吹き出る。

そしてまだらの絨毯のように、俺を覆い隠すように広がっていく。迷わずにに懷から銃を取り出し、彼の方へと急降下。

「これで終わりだあああああああああああ」

奴の額に取り出した銃口を、刺すように突き付け、そして放った。  
心なしか、いつもよりトリガーは、軽く感じる。

俺は自らの血の弾かれたエリアに綺麗に着地。

捨て身のゼロ距離の射撃、奴の脳が振動を震わせた。

巨体な体は神経のエラーバグのように、体中を痙攣をする。

そして機能の停止したロボットのように、奴は気絶。

その姿を確認した俺は――天へと右手を掲げる。

血は出尽くしたのだろう。俺の体から噴水のように湧き出ていた  
血は、涙を流しているように流れている。

同時に視界が、深淵なる黒の境界へと霞んでいった。

「やったぜ――俺は。マイ、剣先生、ユウツ……」

（ああ…… これ死んだな……）



## 第十五話

左の窓から月光が、俺の休んでいるベットに差し込む。

俺の住んでいるコンテナハウスにはない静けさ。

いつもはうるさいと思っていたが、今となっては逆に恋しくなっていた。

部屋の沈黙に浸っていた俺は、見慣れていない天井を見つめる。

そして今日の出来事を完全ではないが、鮮明な記憶のうちに思い出そうとしていた。

盾田剣士。

それが今日戦った能力者の名前だ。

『拒絶の王』の二つ名「セカンドネーム」を持つ存在。

王の名に恥じぬ限りなく、S級に近い強さであり、この学園最強の能力者である。

戦場では無敗の伝説を誇る男。

学園にいるA級能力者の、リーダー的な存在でもある。

俺はそいつと戦った。自身の目標と己のプライドを賭けた熾烈なバトルだった。

勝敗は、剣先生による判定で俺の負けということになったらしい。俺の転倒と奴の起き上がりだが、同時だったと聞かされた。

そして俺の出血多量による戦闘継続不可と判断だと言っていた。けど俺には、一つの壁を壊したことによる満足感でいっぱいだった。

とにかく、疲れた。

この勝負を終えた俺は、一生分の生気を使い果たしたかというくらいに、ほんとうに疲労感でいっぱいだったのだ。

「起きたか……」

何かがむずかゆく布団をめくり返そうと起き上がった、すると一人の女性の声が聞こえた。

その声からは、安堵が感じられ、その真っすぐとした瞳からは、俺の存在を確認しているようにも見える。

左の椅子に座っていたのは、剣先生であった。

彼女らが帰った後にまで剣先生は、俺の様子を見ていたらしい。

「あれ、二人は？」

起床したてのぼやけた視界で彼女を見る。

白く濁った視界を無くそうと、目をこすりながら二人のことを聞いた。

「先ほど仲良く一緒に帰ったぞ。二人ともお腹が空いていたらしくてな」

その言葉を聞くと、俺は正面の壁にかけてあった時計を確認する。時計の針は午前3時を示していた。

「こんな時間にまで……俺って」

瞬間、自身の体に『異変』が起きていることに気づいた。寝起きの感覚では気づかなかった変化に、驚きが倍増する。

その驚きに、八文目まで起きていた頭が、綺麗と言えるほど全開に動いた。

「無くなってしまったのだろうと、思っていた“右腕”。

盾田剣士との勝負により、“切り捨てられた”であろう“左肩を掛けて左側の体”。

それがすべて、元通りになっていたのだ。

全てが“綺麗”にだ。

ただ一つの“繋ぎ目”も無く、切断されたような痕跡もなく、肉体の先が無くなったという感覚さえ無い。

まるで体の時間だけが、意識だけを置いて遡ったような感覚に陥る。

やばい待てよ……理解が追い付かない。

思考が、考えが、感情が、精神が、神経が、感覚が、全てが混乱していた。

「な、なんで……何がどうなって」

右手の能力印を見る。

それも、昔と変わらずにその印はあった。

「驚いたか？ まあ無理もない……」

体中を隈なく触っていた俺に、剣先生は語り掛ける。

そして、ポケットから煙草を取り出す仕草をする。

「これは一体……ど、どういうことなんですか!？」

「そう騒ぐな、時間を考える」

そう彼女は何かを知っているかのように、俺を見た。

そして、ジッポを取り出し、慣れた手つきでタバコの先端に火を付ける。

カチッと音を鳴らし、静まり返った病棟。

剣先生は、タバコを大きく吸う。

ジリジリと、タバコの勢いよく焼けた音が、こちらまで聞こえてくる。

そして、ため息を吐くように肺の煙を出した。

「その体は、お前の能力を体現している」

能力？ この人は何を言っているんだろうか……？

彼女の言葉に疑問を抱きつつ、混乱している思考を鎮める。

「つまりはお前の中では超治癒力、不死力。この二つの能力が混合してるといふことだ。その能力のおかげである戦闘を生き延び、両腕が切り離されようとも、その両腕は十分足らずでお前の腕は治っ

た」

彼女の言葉を理解半分で聞き入れ、俺は今まで失っていた右手を眺める。

その能力印《ESP・tattoo》は、昔と相変わらずに力の象徴を放っている。

俺の象徴、他の能力者にはない、俺オリジナルの形を有して。しかし、見慣れていたはずの能力印は、妙な光を放っていた。

さてよ。このように光ってはいなかったはずだ。

今の俺は疲れていて、そんなふうに見えるだけなのか……？  
そうかもしれないな。俺はそう思うことにした。

彼女の話が耳には入っていない。

「俺の右手……とうに消えたものだと思っていたのに、あったんですね」

卍城との戦いの後で、無くなっていたものだと思っていた。

義手の強力なパワーもいいが、こうしてみると生身の腕もいいと思っただ。

そんな呑気なことを考えるくらいには、今の俺は疲れていた。

「不死の能力、ヴァンパル・F・ロード……」

一言発すると、彼女は沈黙に入った。

病棟は人の気配が感じれないほどに、静まり返っていた。

「…… 私が現役の頃に、一度遭遇したことがある不死身の能力者だ」

突然と剣の口から吐き出された一言。

重くのしかかったような言葉、どれほどまでにそこ過去を背負ってきたのか。

その重圧が分かった一言であった。

彼女の手にあるタバコの灰が下に傾いてきた。

そして俺は、その能力者の情報を、とある雑誌か何かで見たことを思い出した。

ヴァンパル・F・ロード、漆黒のプロレス仮面を身にまとい、自らを「仮面の囃<sup>※</sup>ヒイロー<sup>※</sup>」と名乗っていると書いてあった。ちなみに、囃<sup>※</sup>という文字の中には、ヒーローがあるという文字遊びをしていることに妙に感動したことを覚えている。

情報によれば、身長は170センチという小柄の能力者である。

しかし、肉体は屈強の戦士のような剛腕、豪脚、鉄板のような胸板、現代に生きる鉄人といえるような人物だ。

二つ名は、囃<sup>※</sup>の吸血仮面となっている。

目つき、体格から、日本人ではないかという噂が飛び交っている。

「死を超越した者と言った方が早いだろう……。あの能力者はどの能力者よりもぶっ飛んでいた。話を少しづらすが、戦場では勝者が生き残る。これはわかるな」

「はい、勝ったものが生き残るのは当たり前ですね」

「しかし、死なない人間がいるとすると…… 戦場はどうなると思う？」

いくら死なないからと言っても、動くことができないような負傷を負わせれば、無力化することができると思うが……

しかし、不死身は厄介だろうな。

「状況にもよりますが、不死者がいる陣営の方が有利かと思います」

「まあ正解と言ったところだ」

そう言い彼女はまた、煙草を銜え肺いっぱい煙を溜め込む。

「戦場で私と戦い、この私に死線を見せたたった一人の男だったよ。奴は、どの体の部位を破壊しても死なない化け物だった。後に分かったことだが、S・ESP能力者SSS級のランク所持者だった」

S・ESPの能力は超能力というよりは、異能という表現を使っただ方が端的で早い。

あるものは火を使い、あるものは無から水を創造し、あるものは土を操り、あるものは…… とその数は膨大でありながらも、能力と能力が枝分かれしているようでもある。

ESPとS・ESPの決定的な違いがある。それは「代償」というものだ。

ESPは代償を支払わずとも能力を行使することができる、しかしS・ESPは「代償」という対価を支払い能力を発動することができる

できるのだ。

「本題に戻すか……。その男の能力がお前の中にもあるのではないかと、私の元に見知らぬ者から一通の手紙が届いた。それが、お前と修行を開始した1週間前の話だ」

俺を見ていた彼女は、視線を少しずらす。

「なるほど……」

能力が無い能力者……。そんなアイデンティティーに、少しばかり酔っていた自分がいた。

そんな自分に——能力があったなんて。

昔では考ええなかった。

「最初はお前にそんな能力が宿っているなんて思わなくて……。しかし盾田剣士との戦闘ではっきりとわかった。お前は大量出血で倒れる事があっても、死ぬことはない。そして、その両腕の治癒力。お前にはとんでもない能力がある」

俺は自身の戦闘について思い出していた。

まずは、卍城王也戦。

彼の必殺技を受けながらも俺は死んではいなかった。

気力によるものかと自己分析をしていたが、確かにあの胸から腹にかけての攻撃は並み大抵のものなら死んでいる。

そして、盾田剣士戦。

終盤にあたる、大量出血、そして肩から、肺、心臓、肉が切り離された感覚……

そして驚いたのがこの両腕が治っていたこと。

「フッ、俺は化け物だわ……」

右手で覆い隠すように、下を向いた顔につける。

思い返すだけで乾いた笑いが湧き出てきた。

なんだよこれ…… ただの化け物じゃねえか俺は……

「待ってくださいよ、じゃあなんで僕はヤングサンクションズではなく、この日本国の機関にいるんですか？」

S・ESPとして生まれた者は、国連直属の『Young Sactions』（ヤングサンクションズ、通称Y・S）に入られる。そして、世界の均衡、平和、民族間紛争による武力介入、能力者の犯罪防止をすべく、膨大な訓練を受け、大抵はスペシャルソルジャーとしての人生を送る。

ここでESPの説明をしていただく。

超能力のたぐいを自由自在に操れる者を能力者（ESP）と呼んでいる。

ESPは3つの能力からなっており、その3つを三大能力としている。

一つ目は、人知では理解できない強力な体力へ超筋力、二城が所持している能力である。

二つ目は、目の前などに強力なフィールドを展開する力、ちなみにこの壁は万物の力を全て無に返すほどの強度を誇っているへ超拒絶力、盾田剣士が所持している能力だ。

三つ目は、物体をある程度の強度まで強化する力へ超念物強化力、の3大能力からなっている。

ここESP学園は、機関独自の判断によりS、ESPではなく、ESPだけによる兵隊養成施設を作った。

なぜESPだけを集めたのかは、機関の人間である、梅階級の者にしかわからない。

機関の階級は上から梅、竹、松、となっていて、竹の割合が比較的多い。

「それは、私にもわからなくてな……」

言い終わると彼女は吸い終わった煙草を、靴の裏で消す。

そして自身のポケットへと入れる。

「そうですか。ではなぜ今になってこの右腕が？」

俺は周りの人間よりも「劣っている」、と思っていた。

だけど違う。俺は周りとは「違って」いる。

ショック？ いや俺はゾクゾクしているんだ。

この高揚感、わかる。バケモノゆえに、この現実には俺の心は踊っている。

自分がバケモノという「真実」に――

「すまない。今の私には、わからないことが多い。だが、タスクお前に何か壮大なバックボーンがあると睨んでいる。とんでもない計画があるとな」

そして彼女は、乳袋を上へと押し上げるように、腕をまくる。確信があるとその声からわかる。

頼りになるような言いぐさに、かっこいいとさえ思ってしまった。

「そうですか……先生、深入りはあまりしないでくださいね」

ゆっくりと彼女に告げる。

多分勇敢な彼女はどんなに危ない橋でも突っ切って行くのだろうと思ったからだ。

そんな彼女は好きだ。だけどこれは俺だけの問題なのだと思直感でわかった。

だから彼女には俺を見守ってほしいと思った。

俺が俺であるために、やらなきゃいけない。

ただそう思った。

俺は、最年長でここESP学園に来て、能力が使えない無能力者と言われてきた。

そんな俺に、いまさら裏が無いなんてことはないと思今になってわかる。

もしかして、今年になってランクに出られたのも仕組みられたことなんだろうか。

そんなことはどうでもいい。

「あああ…… わかっている。わかっているさ」

「……。僕はこれでもここにいらることが幸せだなんて思ってるんです」

周りに貶され、見下され、蔑まれても、『強くあること』を剣先生に教えられた。

そして、自身が掴みたいと願ったことを掴む姿勢を、マイに教えてもらった。

他人という幸せをユウに教えてもらった。

俺は幸せ者だ。それが仕組まれたものだったとしても、裏に何があるうとしても。

こんな日常が大好きだ。

「ランク祭に勝って俺はやり遂げますよ」

決め顔とも言わないが、彼女に笑顔と立てた親指を向ける。

「そうかお前は本当に頼もしくなったな。しかし残念……。お前はランク祭には敗退ということになっている」

そんな俺を見て、にやりと口元を上げると、しまったと何か失態をしている顔に変わった。

「え！？ ど、どういふことですか！？」



そう彼女は、椅子に腰かけてあったジャケットを背負うように肩にかけると、病棟のドアを開け帰っていった。

というわけで、俺の成り上がりはまだ終わらない。

最後まで勝ち上がって、俺は栄光をつかみ取る！！

打ち切り漫画のラストようだが、彼の激戦は今に始まったばかりだ。



## 第十六話

別世界に隔離されたような漆黒の空間で、六つの石像が互いに向かい合いながら、円を描くように並んでいる。

石板には、それぞれ固有のマークと数字が描かれていた。

「コードネーム：巳に課せられた、大蛇召喚儀式の準備が最終段階を迎えている」

十字が描かれている、02の石像が発した。

「こちらは大蛇の試験場所を提示しよう。場所は、旧朝鮮半島、ソウル地区。トリックスターズがのろしを上げているとの情報が入った。その介入に合わせて、大蛇の力を見せてもらおう。両陣営開戦の調整は02に合わせる」

二つの手が描かれた03はそう告げる。

「以上でー」



一夜で退院できた俺は、自分の住家であるコンテナハウスに帰っていた。

「ただいま。俺退院したぞ」

と言いドッキリをしたいがために、勢いよくドアを開けた。

部屋の中は、誰もいないのか静まり返っていた。

「なんだこれは!!」

なんとお菓子の袋やら、ユウカマイの脱ぎ捨てた服などが散らばっていたのである。

部屋の惨劇に、踏み場のない自室をつま先立ちで移動する。

かすかではあるが、『タスク退院祝いです』っていうものを期待してもいた。

一気に疲れが倍増してきた俺は、自身のベットへとダイブ。

すると、目の前の枕にピンク色をしたパンツが、両端に履かれているのに気付いた。

しょうがねえから、このパンツをオ○ネタにしてやるわ。

最近は抜いていなかったなと自己分析する。

ランク祭の件で忙しかったのもあるからな。

むっくりがむっくりしてきたところで、俺は竿を取り出した。  
最近使っていなかったからか、ピンク色の布に反応しているかわ  
いい竿ちゃんだ。

ポロンと顔を出させると「うっすアニキ！！ わっちは待ちきれ  
ませんよ！ 早くこの両方に付いた兄弟達を、空にさせてくたせえ！！」  
と言わんばかりに元気いっぱいであった。  
そう焦るでないと心の中で唱える。

はあはあはあ…… あっ…… しゅごい……

ドスウウウン！！

突然軽い爆風が俺を襲った。

爆風というよりも、ドアの強烈な開放により、金属と金属が擦り  
あつた音だ。

そう。ナニの最中にドアが開いたのである。

「さあタスクために何かを料理するよー！！ えいえいおー！！」

マイが俺のものをがちりと見ていた。

「タスクそんなことがあったのね」

マイと部屋を片付けながら、ランク祭後のこと、治った腕のことを話した。

俺の能力である不死身のことは内緒にしていた。ついでに先ほどの下半身全裸のことも話した。

『部屋に誰もいなかったから寝っ転がりながら、着替えをしていた』と言ったらわかってくれた。

わかってくれた……

「そういえば冷蔵庫の前にある食材はどうしたんだ？」

1メートルの大きさの冷蔵庫前には、たくさんの食材が入ったレジ袋があった。

袋にあふれ出るようにして出ている不健康食品のカップラーメン、多種多様な菓子。

下の方には大根やらニンジンやらとが、透明な袋の中から見える。「わかってるって思ったんだけど、タスクの退院祝いに私が何かごちそうさせようと思って」

にしてはお菓子が多いなと思ってしまった……  
その量のインパクトがとても大きいのだ。

「お菓子はユウちゃんがなの！ せっかく私が作るのにね！」

と言うとマイは口を縮め、ほっぺたを膨らました。  
この二人の何でもないような時間がとても幸せに感じる。  
それと同時に、彼女の前では等身大の俺でありたいと思った。

しばらく二人でテレビを見ているとユウが帰ってきた。  
どうやら、何かしら言えない用があったらしく、何も言わずにテレビを見ている。

俺に何か言うのではないのかと思ったが、そんなことはなかった。  
そのあと夏も終わりに近い気温なのに、3人で鍋をした。

マイは水炊きを作ってくれた。  
ユウと具材の取り合い、その後汗だくになりながらうどんを食

べた。

今までとは変わらない日常、それが楽しく感じられた。

1日、2日で彼女らに合わなくなった俺は、あんなに寂しかった。今はこんなひと時に安堵している自分におかしくて笑ってしまいたい。そうだ。

そんな、なんでもないような日々が一週間ほど過ぎた。

3人でファミコンマンをプレイしたり、時に罵り合い、パシリにされたりと。

テレビドラマによくあるような、同性の友達が俺にはいない。だけど、彼女らに相手にされている俺は恵まれていると思う。そう思った。

「よう青年、自主練はさぼってはいないか？ ランク祭敗者復活戦のトーナメントができた。明日に発表されるから楽しみにしておけよ」

寝る前に剣先生からメールが入った。

てきとうに剣先生に返信をした。

敗者復活に選ばれるのは、審査員の独断と偏見によって選ばれる

と剣先生が言っていた。

大体は、運悪く最強に近い者に負けてしまった、それなりに強い人物が出ることができるらしい。

Aランクは問答無用でトーナメントに組まれることになっている。俺の場合は、盾田剣士が俺以外を快勝で勝ち上がっているため、出場可能とのことだった。

そんなことはどうでもよかった。

ただ、勝つただけだと自分に言い聞かせて目を瞑った。

ランク祭敗者復活戦当日。

早朝、5時半。窓から見る空は、淡い青色になっていてこれから朝を迎えようとしていた。

いつもより目覚めが良いのか、起きたばかりだというのに視界が綺麗だ。

ベットを椅子のようにして腰かけると、ベットに寝ているマイの寝顔を見る。

マイを起こせまいと、ゆっくりとランニング用のトレーナーに着替えた。

腕にデジタル時計をはめて、毎日のようにこなしている朝ランを始める。

再生された肉体はどうなっているのか。

それは、この14日間で完全ではないが把握することができた。腕が無くなる前と頃と比べて「骨の髄まで」変わらない。

それは文字通りでもあり、意味通りでもある。

無くなる前の肉体の状況なんてのは、詳しくなんて覚えてないけど、それでも以前とは変わらないと実感できる。

俺が、実際に肉体を通して体験をしているからこんなことが言えるんだろう。

本当に「能力」というものは、この世のものとは思えない力だと身を持って実感している。

それと同時に俺の対価はなんだろうかと疑問が生まれた。

そうこう考えながら走っていると、A M 7時になっていた。

家の前に付くと、何かの揚げている匂いが鼻についてくるのが分かった。

ぎゅると自身の腹の音を聞きながら、今日の朝食は何だろうかと考えてみた。

そして、運動後の汗だくな額を首にかけてあったタオルで拭い、家のドアを開けた。

「タスク兄さん、おかえり！」

玄関の近くの台所でユウが調理をしていた。

ドアを開けて俺に気づいたのか、お玉で魔法をかけるように俺の方に向けて、あいさつをする。

「おお、またカツ井作ってくれるのか？ おいしそうない匂いじゃないん」

彼女の手元にあるパン粉の焦げチリと、漂っている匂いでカツと

分かった。

左には、フライパンでカツとたまごを混ぜる過程に入っていた。

「あと少しでできますよ、んっ！ 汗くさいので風呂に入ってきてください！！」

ういういと、返事を返して上着を脱ぎながら風呂へと向かう。

ガラガラガラと扉を開けた。

「ひゃっ！！」

マ、マイが着替えをしていた。

新品のブラジャーは、ふちが赤色で覆っており、胸を包むんでいる部分は、マイの大きな胸を引き立てる清楚な白で、17歳という絶妙なあどけなさを演出させていた。

花柄は、両方の中心から開花させたように、螺旋状にきれいに配列させていて、おういえあ、たまらねえぜ。

朝からいいものを見せてもらったぞ。

「ご、ごめん。いると思ってなくて……」

すぐさま脳裏にこの情景をインプットして、急いで風呂場のドアを閉める。

鼻の下が伸びているんじゃないだろうかと自分を客観視しながら、ニヤついていた。

だれか鏡をよこせ、この気持ち悪い顔を自分でも眺めてみたい。

「っもおおー！ 今度からはノックしてよね」

ドアに寄りかかっていると、中から彼女の声と、布と布とがこすれる音が聞こえる。

あまり時間はかからずに、風呂場のドアが開いた。

「悪い」

と言って、彼女がドアを開けたタイミングと同時に、許しを請うために手を合わせた。

「この前はおっぱい触ってきたし…… うーん、タスクのエッチ！」

腕を組み、口をふうせんのように大きくすると俺のあたまをやさしくチョップした。

「以後気を付けます……」

トホホ…… と口から出そうになりながら、自身の頭を撫で彼女に言った。

さっと体を流すと、ユウが作ったカツどんを食べた。

この前、俺に作ったカツ丼よりも味付けがかなり美味しいものとなっていた。

特に、調味料とカツの絶妙なバランスが、以前よりも上手くなっ

ていた丼ぶりだ。

「ユウお前すげえ料理うまくなってんじゃん」

ガツと口にかき込みながら、彼女に言う。

3人は丸いテーブルを囲むように座り、お互いにカツ丼を頼張っていた。

「確かに、お店に出せるくらい美味しいよ」

同じく口に押し込んでいるマイも大絶賛のようだ。

「えへへ…… ありがとうございます」

笑顔になるとユウもまたかき込んだ。

「そういえばたすく兄さん、今日のランク祭敗者復活戦、頑張れます？」

食べていた手を止めると、質問をしてきた。

「おう、美味しいカツ丼食べたし絶対にカツよ！」

親指を立てて、右目でウィンクをした。

「カツどん冷えちゃいますから、そんな寒いこと言わないでくださいよ」

ユウがそんなことを言い、3人は笑い合った。

俺は、一人ランク祭が行われる会場に向かっていた。

空は見渡す限りの快晴で、満天な青空が広がっている。

どうしてもランク祭を勝ち上がらないといけない理由が俺にはある。

それは、憧れのあの人に少しでも近づきたいからだ。

あの人のことをできる限り思い返してみようと思う。

俺は唯一のロストシティの生き残りである。

生き残りというよりも、この不死身の能力のおかげで、あの「地獄」から生還できたのだと今になってわかった。

俺は生きたままあの「地獄」を味わっていた。

それを救ってくれたのがあの人だった。

抱きかかえられた腕が、その背中が、僕の幼き頃のお父さんのように大きかった。

俺はその人のように、誰かを助けるような人になりたいと思った。

そのために誰よりも強くあるべきだとも知った。

だから俺は、剣先生によって与えられたこのチャンスを無駄にすることはできない。

自分にも周りにも、俺の強さを証明しなければならぬ。

あこがれのあの人に近づくため——それが俺の出した答えだ。

指定された時間よりも早くに、ランク祭の会場へとついた俺は、上にある観客席から会場の戦闘エリアを一望していた。

早くに付いたからか、まだ人の気がない。

ここから見る戦闘エリア。それは、無機質で何とも言えない悲壮感が湧き上がってくる。

等しく配置されたコンクリート状の2×1サイズ遮蔽物。

なぜ配置されているのかわからない水場。

特に戦術が思い浮かべているというわけでもないが、眺める。

すると突然、後ろのドアが、ガラガラと音を立てて開いた。

後ろを覗き込むようにしてみると、剣先生がそこに立っていた。

「少年調子はどうだ？」

となりに座っている剣先生が俺を見る。

そして煙草をトントンと膝に当てて葉を詰めていた。

「それなりですよ。先生は？」

そう言い先生を見ると、ジッポで先端に火をつけている。

ジリジリと音を出しながら、一呼吸するとすぐに口の煙を出した。

「まあまあだな…… ランク祭となると私も忙しくてな、とてもじゃないが疲れる」

と彼女は大きく背伸びをする。

大きく富んだバストに目が行ってしまいそうになってしまったが、鋼の理性で乗り切った。

「どうだ？ 勝ち上げられる見込みはあるか？」

気だるそうにしながら、背もたれに腕を回しながら聞いてきた。強烈に大きい乳袋が強調され、年相応の俺には刺激が強い。すぐさま視界を目の前に広がっている戦闘エリアに変える。

「だ、大丈夫ですよ……」

焦りを隠そうと思いつつ、彼女に告げる。

なんだろうか…… 今日はやけに色気がある場面が多いと思った。

これから戦闘を始めるってのに…… 俺は大丈夫なのか？

自分の生理現象に嫌気がさしながら、彼女を見る。

「フフッ、お前は成長したと思っていたら、まだガキンチョだな！！」

鼻か口かで笑ったのだろう。

いい終わると豪快に俺の首を腕で絞めて、頭をグリグリする。

「いたいたた、痛いですよ先生！」

必死な抵抗を先生にする。

頭のとっぺんの痛さに、右の顔に乳が何度も押し付けられてきた。突然、彼女はその手を止めると、体を突き放し、勢いよく背中を平手打ち。

「お前にならやれる。じゃあまた後でな」

そう言って彼女は立ち上がって、帰ろうとした。

そんな彼女を止めるわけでもなく。

「見ていてください。必ずやり遂げます」

そんなことを言った俺を、彼女は澄み渡る笑顔で返した。

## 第十七話

劍先生と話し終えた俺は、待合室でただ時を待っていた。

精神状態も良好であり、体調も至って悪いところはない。

敗者復活戦ということもあり、盾田劍士の時より観客が少ないなと会場の声で推測する。

対戦相手の発表は、敗者復活戦だからか案外遅くに発表された。

次の対戦相手は、畑井 剛<sup>ハ</sup> ハタイ ゴウ<sup>ウ</sup>というB級の男とだった。

どこかで聞いたことがある名だなと思いついてみるが、全くと浮かぶ気配がない。

そして中堅の強さであるため、どのような攻撃をしてくるのかが、未知数であった。

今まではトップクラスの連中たちと渡り歩いてきたおかげか、妙な自信が湧いている。

そんな自信では足元を掬われると、幾度となく体験してきたため、一から考え方を改める。

油断大敵油断大敵油断大敵油断大敵油断大敵油断大敵油断大敵。

と何度も頭の中で唱えると、気合を入れるために両方のほほをビシタ。

強く叩いたためジンジンと痛みが、両方にあるのを感じた。

集中力がだいたい溜まってきた。

そしてガチャと待合室のドアが少し開かれると、担当である矢吹の声が聞こえてきた。

「佐部タスク。準備を」

厳格な一言、終わるとドアを閉めた。

「行くか……」

立ち上がりと同時に太ももを叩いた。

気合も、集中力も、十分に入っていた、

目の前のテーブルにあった、調整、設備がばっちり終わっている、愛銃のSIG SAUER P228 XXダブルクロス 改を、両わき腹にあるサムブレイクタイプのホルスターへと入れる。

特に考えるわけでもなく、待合室を出た。

ドアのボタンを押して、戦闘エリアにある白線へと歩いていく。遠くもなく、近くもない白線は、きれいに二つ描かれていた。

そして自身が立つ線上に立った。

静かに、真正面にある相手が出場してくるドアを見ていた。

観客はそこまでするわけでもなく、スカスカなほどではないが、ある程度の席は空いているようだ。

しばらくすると、これから戦闘を開始する相手が入場してきた。

オールバックで後ろへと流された髪は、奇抜な赤色であり、両方の耳には直径5センチほどの大きなピアス。

身に着けている装飾品のおかげかジャラジャラとした印象が強い。

服は黒いローブを身にまとい、背中には大剣を背負っている。

白線に止まると、顔を上げながら見下すようにこう発言する。

「おめえがDランクに昇格したという無能力者、佐部佑かぁ……」

奴はしたり顔で俺の素性を聞く。

まず相手の名を聞くときは、自身の自己紹介からと相場は決まっているが、彼はそんなことはお構いならしい。

無視を決め込んだ。

「って！ 話聞いてんのかおめえよお！！」

奴はツッコミを入れるように叫ぶ。

「……そうだよ、俺が佐部タスクだ。まずは他人の名前を聞く前に、

自分の自己紹介が先だろ？」

俺はこらえきれずに、常識を教えてあげた。

「へへっそうりゃそうだな。俺の名前は、畑井 剛ハタイ ゴウ。ランクはB級だぜえ」

自己紹介を発したと同時に、軽いシャドウボクシングをすると、中指を俺の方に向けてきた。

なんともこのような人種はあまり得意ではない。得意というよりも好きではない。

自分のことを最高にイカしてると思っているのだろう、最高に自己評価が高い人間。

顔もあまりかっこよくはないのに、こういう自尊心が肥大化した人間はほんとうに嫌いだ。

「そういえばお前、卍城に八百長使ったんだってなあ？ いくら払ったんだよお？」

ん？少し理解に遅れてしまった俺は、3秒ほどしてやっと言葉の意味が分かった。

俺が八百長してる？ 八百長をするような金があったら、コンテナハウスという住居を変えている。

どういう思考回路なのかと考えてみたが、奴は俺が卍城に勝ったという事実が受け入れられないらしい。

「おあいにくさま、八百長する金が集まる前に、3人分の食糧費で

金が尽きるもんでね。ちなみに不正する度胸すら俺には持ち合わせていないよ」

自虐を入れながら反論する。もともとお金は使わない人間だった。だから今の状況が苦しいというわけでもない。

「へっへえ…… そうかいそうかい。んじゃあ、お前の実力、この俺様に見せてみるよお……」

チエケラッ！！ と言いながら彼は突然と踊り出した。

呆氣にとられていた俺は、顔を振って集中力を取り戻す。

これじゃあ始まる前に相手のペースにはまってるじゃないか。

そんなことを考えているうちに実況が大きく叫んだ。

「皆さんきましたあああああ！！ ランク祭敗者復活戦、第3戦目！！ 右手に見えるのは、底辺から這い上がってきた、人気も強さも急上昇中の、不滅の魔術師い！ 佐部タスクだあああああ！！ 今日はどうなトリックを見せてくれるのか！？」

うおおおと観客席から大声がまだらであるが聞こえてきた。

自分にこんな人気があったなんて思いもしなかった。

「左手に見えるのは、その名に恥じぬ、剛力豪速暴君！ 畑井ゴウだあああああああああ！！ B級トップランカーの維持を見せてくれえ！！」

奴は聞き終わったのか、親指で自身の鼻先を擦ると小さく笑みを

漏らし、こんなことを言い出した。

「なあ？ この感じゾクゾクしてこねえかあ？」

何を言ってるのかと思ったが……

「確かに、これから始まるって思うと、ガーンてくるよ」

相手の語彙力が移ったのか、大雑把な言葉になった。

気分が高揚しているのが客観的にわかる。

「両者、準備はいいですか？」

会場は静まり返る。

そこには一つの呼吸もなく、言葉もない。

空気が移動する音が、耳のすぐ近くを通り過ぎる。

「ファイッ！！」

実況が叫んだ。

すぐさま、奴から距離を取り、懐からSIG SAUER P2

28 XXダブルクロスを取り出した。

両手の人差し指にトリガーをかけ、銃身の移動により、一回転をして両手に収まる。

いつものように距離を取り、奴の出方をうか……  
しかし奴は、瞬く間に距離を詰めていた。

「手始めに体ごと吹き飛んで死ねえ！！ 無能野郎あ！！」

早い、奴は俺の顔面へと、右手の豪拳が迫ってくる。

反応には自信があった、しかし奴の攻撃はそれを凌駕してるほどに早かったのだ。

視界ギリギリにその手を捉えていたため、反応は遅れたが、首を横にずらし避けきることができた。

後ろにはコンクリートの障害物が近くにあり、当たらなかったパ  
ンチが、障害物を砕いた。

後頭部からは衝突による爆風が襲う。

小石の弾が後ろからあたりながらも、奴の腕をかいくぐりながら、  
体操選手のように体全体を使ったジャンプ回転で距離を取り、着地  
と同時に奴の体をめがけて射撃。

ダッ！！

金属と何かが衝突したのか鈍い音が鳴る。

奴の胸の前で受け取るように握りしめた腕からは、煙が立ち込めていた。

「狙いはいい…… だが残念だなあ！！」

そういうと彼は、何かを潰したように粉々にした。

砂鉄が、彼の手のひらからぼろぼろと落ちていく。

弾を潰している、その剛力、玉をキャッチするほどの反応速度に驚愕する。

化け物だ――握力、移動速度、障害物を破壊するほどの筋力、あれは超筋力系統の能力者か？……

怪力からはスーパーマンが連想させる。

それほどまでに、いとも簡単に物を壊す姿は常軌を逸している。

奴は悠々と、飄々と、とてつもない力を持って余しているかのようにその力行使する。

どう考えても接近戦は圧倒的に不利、しかし距離を取るにも、あの移動速度の前では不毛だ。

「お前には、わりいけどよ…… 最初から全力でいかせてもらうぜえ」

彼は顔の前で、左の手のひらに向けて右手をパンチしている。

バチンと殴っているその行動に、力強さを感じさせる。

俺の口から笑みが溢れ出る。

――ならば。

――――覚醒せし感覚《Awake Sinn》――――。

覚醒した視界が、映像の速度情報をスローモーションへと移行させる。

思考と反応の境を限りのないゼロへとオーバードライブ。

思考が、視覚が、指先が、体の一つ一つのパーツが、脊髄反応による動作へと移行。

「休む暇も与えねえよ！！」

奴の凄まじい脚力と共に、ジェット噴射のように加速していく右手が飛んできた。

その攻撃を膝を使って勢いよくしゃがみ、下に移動する反動を使って隙を見計らい、奴の人的急所へと弾丸をぶっぱなった。

そのまま、闘牛士のように突っ込んできた攻撃をギリギリでかわした。

ダヒュン！！

至近距離の射撃。

とっさの判断でやってみたが、奴は近すぎる距離には防ぐことはできないらしい。

腹を抱えて、途中であった攻撃は力を無くして、両足と右腕は地に着く。

とっさの判断で致命傷を少しの行動で回避しているのが、奴の行動を近くで見ている分かった。

これだけでも、奴はそれなりの手練れということがわかる。

「ッ！！」

怯んだか！？　すぐさま奴からバックステップで距離を取り、奴へと連続して弾をと放つ。

初めの1発が奴の左足を掠り、連続して追い打ち射撃をすることに気づいたらしい。

連続で放たれた弾を避けながら、奴は障害物へと持ち前の速さでそのを隠した。

「おいおい初めの威勢はどうしたんだよ！」

隠れて応急手当をしているだろう奴に、大声を張り上げた。  
あの位置の傷では、もって数分だ。

おそらく奴は短期決戦を仕掛けてくるだろう。  
奴は真正面から向かってくるとわかった。

――ならば受けて立とう。

「うるせえ、無能野郎があよお!!」

奴はピンピンしていた先ほどとは全くと変わらない様子だ。  
余裕綽々と障害物から姿を出した。  
当てられた攻撃は、止血してるのか、赤い血が固まって服についているように見える。

「元気だったか、じゃあ続きを始めるか？」

奴に挑発をするように銃先を向ける。

「おめえ案外やるじゃねえか、俺の瞬殺爆裂のパンチを見て、受け流しながら攻撃するなんてなあ！」

奴は、キラキラと目を輝かせていた。  
それはワクワクしているような顔でもあったため、奴も俺と同等である

「戦闘狂」

というあり方に親近感が芽生えた。

そんな考えにニヤついてしまうのを手で隠しながら、こう言った。

「そりゃどうも」

「ほんじゃあ、力が有り余っている今のうちにいくぜえ……」

奴はクラウチングスタートをするように中腰になり、地面に三本の指を付ける。

そして後ろ脚は、今にでも蹴りだしそうなブッファローのように地を強く撫でた。

「俺最強の必殺技ア！！ ブレイクスタンプアアアアアア！！」

隙を見せている、その隙をすかさずに俺は弾を奴へと放った。

同時に動いたかーいや奴の方が少しばかり早い。

「おせえ！！」

空気にねじ込むようにして進む弾は、奴の頭部へと真っすぐに進む。

奴はとんでもないスピードと反応で、放った弾を避けた。

いや奴は急に重心が低くなり、加速したのだ。

突風のように俺のミッドレンジへと近づく。

凄まじい速度なのか。その張り手からは、空気がねじ切られているようにソニックウェーブが発生していた。

反応ができないほどに早い攻撃に、ただ目で追いかけるだけで精一杯であった。

これは――当たるッ!!

その張り手が、腹部へと当たる。

俺の腹は、水風船を思い切り張り飛ばしたように、ぺしゃんこになった。

くの字へと体を曲げながら、俺は後方へと粗末に投げられた人形のように吹っ飛んでいく。

そして凄まじい衝撃音とともに、フィールドに設置されている障害物に体ごとめり込んだ。

「ガッハァー!!」



い苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい  
い苦しい苦しい苦しい苦しい。

こんなんじゃ終われない。俺はッ……

意識が途切れかけながらも、正面から俺の方へとゆっくりと歩いてくる奴が見える。

体が動かなかった。言うことが聞かない体にひたすら信号を送っている。

## 第十八話

視界が暗闇へとゆっくりと霞んでいく、奴の声が途切れ途切れに聞こえる。

「――俺のドロップスタンプをまともに受けて、体の形がまともだった人間はいねえ」

ゆっくりと男は近づく、

ザシュ、ザシュ、ザシュ、ザシュ――

近づくほどに四つほど、地を歩く音が聞こえる。

「だがおめえは、頑丈すぎる。バケモノかおめえはよおー」

薄い黒い影がだんだんと近づいてくるのが見えてきた。

体は力が入らずにいた、こんなところで何をしているんだ。

ダメージが想像以上にあったのか、首の可動範囲が狭くなっていく。

そんな動かない体に、鞭を打ちながら、音の正体を確認するべく、

顔を少しづつ上げる。

首の可動範囲が明らかに狭くなっていた。

だからだろうか、小さく動くごとに凄まじい激痛が伴う。

しかし何かバケモノだ…… お前の力技の方がバケモノだよ脳筋能力者め。

そんなことを心の中で告げ、かすかに口元が緩んだ。

体が動かない。

そう、常識を超える衝撃をモロに食らうと、バケモノなら見ず知らず、動かなくなってしまふのだ。

ただ、俺の場合は背中から衝撃を受け止めたため、脊髓へのダメージが、キャパを超えていた。

多分だろうが、背骨の大半は壊滅しているとみている。

ち○この感覚が無くなっていた。

負け、か……

なんでこう正面からの戦いを挑んだのだろうか。

相手は、もう正面からしか攻撃手段はないと分かっていたのに。しかも、見るからに、突撃しか能のない人間だ。

そんな人間に正面から挑んでしまった。

俺は馬鹿だ。大バカ者だ。

勝つなら正面からの戦いを避けるべきだったと思う。

これらは言い訳にすぎない。

正面から彼と一騎打ちをしようとしたら相手が強すぎた。

ただそれだけの話。

我ながらに、間抜けな話だ。

体が遮蔽物のコンクリートにめり込んだまま、座っているように俺の体はなっていた。

「とどめだぜ…… 無能野郎」

気づけば彼は、目の前に。

その手が届きそうなほどの距離に、彼の言葉を聞き入れた。

今になって、真正面から戦いを挑んで満足のような気分がたしかにあった。

すがすがしくもあり、彼の行動をしっかりと見届けていた。

この夢のような場面を淡々と見ていた。

俺の人生は……

「お前のここまでの努力だけは認めるぜ。

なんせお前は、卍城王也、盾田剣士と互角と、それ以上の力を見せたからな」

薄くではあるが、何かを握りしめている手が頭上にあった。

奴の腕であるとわかる。

「俺はお前のマジが見たかった…… だけどな相性が悪かったようだな……」

間が3秒ほどあった。俺はただ彼の声を聴いていた。  
そうだ……俺を殺せ、殺してくれ。

ズサッ！！

何かが、心臓へと突き刺さる感覚が、確かにあった。

鋭利なものが、肉を切り、肋骨を断ち、無数の血管を切り刻んで  
進んでいく感覚。

痛いという当たり前の痛覚すら俺には無かった。

ただこれから殺されようと惨敗した人間の一生が終える映像だ。

何か他人事のようにも思えてくる。

誰の人生だ？ ああそうだ俺の人生だ。

こんなにも呆気なさすぎたんだな。



俺は誰なんだ？

——佐部タスクだ。

何のために生きているんだ？

——憧れのあの人のようになりたい。そのために生きている。

誰のために戦っている？

——それは……俺の……。

では何のために戦っている？

——俺の強さを…… 証明するために。

その先には何がある？

——わからない…… でも憧れのあの人のように、誰かを助けるためには、強くならなければならぬと分かった。だから戦って強さを証明する。

俺はずっと一人だった、だれかがこの手を差し伸べてくれてほしいと思っていた。

ユウと初めて話した時も彼女からだった。基本受け身な俺だ。

今は自分から接するようにはなったけど、結局は臆病なところは昔から変わっていない。

そんな自分が誰かのために強くなりたいと思ってしまったのは、間違いなんだろうか。

結局、今こうして戦えるようになったのは剣先生のおかげだからだ。

やってみなければ、わからない。剣先生はそう言っていた。

確かにそうだ、その場から動かない限り何も変わらないとは自分

でもわかっている。

答えも出ている、だけど一步を出す勇気が自分にはない。

結局はマイや剣先生に、何かを言われなければ動くことができないノロマなんだ。

こんな自分で……何ができるんだろうか……

所詮は甘ったれなんだ。

切り捨てれば強くなれるのに、甘ったれゆえに切り捨てることができない。

その考え方が今、この状況下ではっきりと表れている。

このランク祭で――。

俺は、目の前にいる男の前で、

その恐怖に――

圧倒的な敵の戦闘力に――

肉体はボロボロにされ、動くことができなくなった。

正面から立ち向かうだなんて、彼を舐めていた。とんでもない強さだ。

無理だ、反応ができなかった。

何が不死身の能力、再生の能力を持っているだ。

所詮は、圧倒的不利な相手にはこうして、壁に打ち付けられるような雑魚無能野郎だ。

ゴミなんだよ、こんな自分すら救えない俺には誰も救えない。  
生きる価値なし、思う存分殺してくれ。

—————俺を殺してくれ。

みっともなさすぎる、こんな自分が誰かにあこがれをいただいていたなんて……

思い上がりにもほどがある、あこがれていた人にも失礼だ。

自分が憎い、無能の俺に何ができる。

このまま体は動かずに、俺は何も成し遂げることもなく、生涯を終えるんだ。

さあ殺してくれ。

これが生涯、最弱無能と馬鹿にされつづけて、何も掴むことができなかつた人間の末路だ。



これから死ぬんだと。

諦めていたんだ、もう駄目じゃないのかと。

ドクッ！！

瞬間、心臓を強く打ち鳴らしたような音が、俺を襲った。

すると体のつま先から、細部にわたる隅々まで、とんでもないような衝撃。





俺は、死ねない。

みっともなさすぎる。

そんな情けない感想が俺の心の中で生まれる。

その時だった。

「タスクウツ!!!!!!!!!!!!!!、ここで終わらないよねッ!!!!!!!!!!!!!!」

幾たびの歓声をすり抜けて、その声援は確かに俺の耳へと届く。

会場のどこからか、聞き慣れた声が聞こえてきた。

大好きでいつからかそばにいたいと思っていたあの子の声だ。

この会場であの子が見ていたんだ、ここで終わるわけにはいかな  
い。

どんなに無様でも、たとえ負けたとしても、挑み続けろと剣先生は言っていたんだ。

こんなところでべそをかいて…… 何をしていたんだ俺は！！

うずいていた体制から立ち上がると、にじみ出ていた目元の滴を服の袖で拭う。

そして自身の右頬を、力の限り殴った。

折れたような音が鳴り、勢いに視界は大きく揺れ、意識が軽く飛ぶ、しかし気合は十二分に入った。

「オオシッ！！！」

俺は……

啞然となって正面に立っていたゴウを視覚で捉えー

何を弱気になっていたんだ。

この体は綺麗になり、体中の傷は消え動かないと思っていた下半身は何もなかったように動く。

そして俺はその右手を、力強くも天高くつきあげる。





## 第十九話

激闘により、ランク祭戦闘エリアの障害物は朽ちた建物のようにバラバラであった。

一つは、座を成すように、人型の形。もう一つは、極一転を狙ったように、大きい円を描いて、コンクリートが抉り取られている。床には二歩、三歩と、削り取られたように跡があった。

正面には、対戦相手のゴウ。

「その傷の治り方…… お前が能力者だったなんてなあ！！」

奴はそう叫ぶと、右頬をクイツと上げ、口が片方上がる。

そしてこうも。

「化け物が、この俺様がぶっ倒してやるぜ！！」

俺のほうへと右手をパンチをした、その腕は音をならして宙を切る。

その言葉に、観客はヒートアップし、歓声はドームを反響するよ  
うに響く。

「ああ、こいよ！！ 俺を殺せるなら殺してみろ！！」

そう答え、ホルスターから愛銃であるSIG SAUER P228 XXダブルクロスを取り出した。

その銃は白銀の光沢を見せると、特注で改造された造形でこの手に食いつくように馴染む。

「残り三分弱ってところか、お前を倒すには十分な時間だなあ！！」

そう言い、中腰の状態で血の流れる傷口を擦る。

攻撃をするためクラウチングスタートの構えをとる。

あの傷跡は、始めて間もない時に当てた弾丸だ。

接近してきたあいつを、人的な急所めがけて放った。

それを奴は、急所を避けて、あの攻撃を食らったのだ。

しかし、いくら急所を避けたとはいえ、あの場所の内臓をえぐって時間がそれなりに経っているためかなりのダメージがあるはずだ。

なんて精神力だ、まあこっからは根勝負なんだけどな。

超能力とはいえ、頭を狙われては再生は間に合わないだろう。

頭への攻撃は、極力よく注意を働いてかわそう。

奴の行動は、イノシシのように単純明快だと今までの戦闘で分かった。

あの言いぐさだとあと少しで、奴は出血多量で倒れてしまうだろう。

耐えて堪えて、耐える、避けられるならば避ける。そしがあいつに勝つ最後の手段だ。

ああ、やってやるぜ。

みっともないが、この作戦であいつに勝てる。

奴が根をあげるのが先か、俺が根をあげるのが先か。これほどまでに、熱い試合はないだろう。

超回復か、超攻撃、どちらが優れているか勝負だ。

「行くぜえ！！」

初動、奴が動いた。

その力は突如発射されたジェット機のように、勢いよくその体はこちらに向かってくる。

その移動の衝撃に空気は切り裂けそうなほど、甲高い音を鳴らす。波のように空気の刃をまとい、あっという間に手の届く範囲まで来ていた。

「だりゃあああああああああああああああああああ」

亜空間を移動したかのように、右手が腹を壊す勢いで向かってきた。

剣先生に認められた自慢の反応と、今までの経験に基づいた読みで躲す。

しかし激痛。

わずかながらにかすれ、三本ほど肋骨を折られた。掠っていながらも、その攻撃力は常軌を逸している。

「クッー!!」

横のステップで、攻撃を受け流しながら大きく距離を取る。距離を取る途中、体に先ほどと似た、縦の揺れが襲った。

――ドクン。

体に電流が走るような感覚。超回復で肋骨は手品のように、回復した。

断りに反した力にタスクは、肋骨を撫でる。

無茶苦茶な回復力に驚く。

先ほどの動けないまでの負傷に、回復の力の発動は遅かった。なるほど、首から上までの損傷は治癒力が遅くなるということか。

不完全ではない再生能力。

まあこれくらいのハンディはあってもいい。

すぐさま奴が着地した位置に、カウンターである銃弾を放った。奴は第二撃をするべく、中腰になって俺を見ている。

俺の攻撃を見ていたのか弾を避けた。

そのうちに障害物に撤退をする。

リロードと、体力回復を目的にした行動だ。

すぐさま、コンクリートごと突っ込まれては大変なので、その身を走らせる。

物陰から、出た瞬間身を隠していたコンクリートが爆発したかのように木っ端みじんになった。

奴が、障害物ごと攻撃を仕掛けたのだろう。

砂煙の中、奴が動いた気流を捉え、走りながら弾丸を放った。

煙の中に、一発、二発と弾は食われ、三発目を打ったと同時に、次の障害物へと隠れる。

フウと息をついた一瞬だった。

ダイナマイトの爆発音のようなものと、気づけばその身は宙に浮いていた。

左腕は反対側に曲がっており、右脛から下は激痛が走る。

すぐさま体の欠陥を察知し、俺の能力は発動した。

腕は芯が通ったように元通りになり、足の痛みはなくなっている。しびれるような自身の能力で目覚めると、空中で体制を立て直す。立て直しながら太ももから、ナイフを取り出した。

着地、奴が正面一〇メートル先で構えていた。



————この感覚、病み付きになる。

なあこれが「力」ってやつなのかよ……

このバケモノめいた現象が……

たまらない。ああ、お前らは自分の能力《さいのう》にこんな思  
いを巡らせていたんだな。

無能力と言われていた過去だったが、今の自分にとんでもないよ  
うな万能感が芽生えていた。

俺は、やれる。

なあ、俺を見下していたお前ら、どうだ。

俺はお前らよりやれるんだぞ。

だからしっかりと見ている。

————俺の戦いを。

覚醒せし感覚《Awake Sinner》————。

意識が加速し、ゴウを除いた映像の簡略化が始まった。

そして、背景は絵の具をにじませたように、歪んでいく。

俺を立ったのを確認したのか、奴は攻撃をする構えをとっていた。脳の情報選択に痛覚の情報を消した。

次に、いかに少ない移動で彼の攻撃を浅いダメージにするかそのことに重点を置く。

吹っ飛ばされた攻撃の影響で、銃が奴の近くに落ちている。

一つは奴の5メートル横に、もう一つは左後方の3メートル離れた位置だ。

攻撃を加えるには、二つの銃を取り直さなければならぬ。い。

なぜ避けることに専念せずに、攻撃を加える必要があるのか。

少しでも時間を稼ぐことと、攻撃を躲すことが難しいからである。奴の攻撃回数はあと少しで終わりといったところだろう。

腰にあるマガジンポーチの重さで、だいたいどのくらいつマガジンがあるか考える。

ざっと九つと言ったところだろうか。

敵を視界にとらえる。

奴は休みも容赦もなく、攻撃態勢に入った。

地をなぞるように擦ると、凄まじい眼光をこちらに向けてきた。

———突撃。

前転をするように、避けるが遅かったのか足にへと、その攻撃が当たった。

足は宙に舞って、目の前に落ちる。

血が水を出しているホースのように勢いよく噴出し、周り一帯は血の池と化している。

足をわし掴み、切られた足へとくっ付けた。

すると、再生能力が発動した。

接ぎ木をするようにして、何倍もの速さで再生する足。

しっかりと動けるようにはなっていた。

全速力で、二つの銃をとり、それを後ろに渡すように構え、感を頼りに奴へと放った。

そのまま倒れ込むように、体を転がし、奴の状態を見た。

「てめえ！！ この場に及んでまだそんな元気があったのかよお！！」

奴は噴笑しかけるように叫ぶと、アップーパンチをする要領で俺の方へと中指を立てた。

見ると右肩に銃弾が当たったのか、だらだらと血が流れ、地へと水たまりのように溜まっていく。

あの損傷を見るに、最後の攻撃が仕掛けられてくるだろう。

「威勢がいいな。突進攻撃はこれで終わりか？」

「俺はやれるぜ。おめえはどうだ無能力者！」

「余裕だよ」

多くを語る必要はないと思っていた。

なぜならそれは、戦闘をしているからだ。





に戻っている。

その感覚を、痛みに狂った頭で感じ取り、視界はぼやけ口からはよだれが出ている。

人間というものは慣れるといった環境適応術が備わっていると誰かが言っていた。

しかし、この身が半壊した状態からは凄まじい激痛があった。

その激痛に俺は慣れることができなかった。

凄まじい激痛の前では、環境適応術など無に等しいのだとわかる。

――俺は最後まで立っているんだ。

そんなことを思いながら、足をガタガタ揺らしながら立った。

下半身が無くなって、立てるようになった時間。

おおよそ20秒足らずだ。

とんでもないような自分の能力にやけながら、奴の動向を見る。

奴は殴り終わった状態で固まっていた。

銃弾を食らった肩であるはずなのに、奴はとんでもない威力で俺に攻撃をした。

とんでもないやろうだ。

その固まっていた姿は、日本国歴史で有名な弁慶を思わせるような姿勢である。

全身からの血の提供が止まり、ついに戦闘不能となったのだろう。

奴は、最後までやり切ったのだ。

固まっていた顔はなんだか満足げでもあった。

ブウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！

試合終了の合図が鳴り響く。

会場全体からとんでもないような歓声が聞こえてきた。

ああ、やりきったぜ。

なんともやり切った笑顔がムクムクと湧き出てきた。  
すると後ろの方から聞きなれた声が聞こえる。

「タスクうううううう！！！！！！！！！！」

それに気づいた俺は、その声の方向を振りむく。

その最前列には、涙を流しているマイがいた。

そんな心配そうな顔をしていた彼女に、ありったけの笑顔を見せる。

そして勢いよく立てた親指を向けた。



試合が終わり、選手待合室に戻っていた。  
すると、勢いよくドアが大きく開いた。

「タスクウウウウウウウウウウウウ」

マイが来ていた。

俺の全身を隈なく見ると、血まみれにもかかわらず抱き着いてきた。

「もう…… タスクのばかあああああああああ」

俺の胸に顔を押し付けるようにして叫んでいた。

「ごめんな、心配かけちゃって」

彼女の後ろ髪を撫でる、その髪からはいい匂いが鼻に入ってくる。  
そのサラサラの髪、肩を震わせながら泣く彼女に、その時に言う

言葉を言えずにただ抱きしめた。

ずっとずっと彼女に、自分の存在をわからせるように、強く強く。

「なんでタスクが生きているのかなんてわかんない…… だけど、こんな戦いは二度としないで」

そう言って彼女はさらに強く抱きしめた。

「わかった…… ごめんね」

それから、彼女が泣き止むのを待ち、体を綺麗にして二人一緒に帰った。

俺はずっと彼女の隣にいたいと思った。  
それが再確認できた。



## 第二十話

状況を確認するように、彼の攻撃を遮蔽物から確認する。

すぐ近くからは、鉄とコンクリートの弾けるような音が聞こえてきた。

銃弾は、こちらを狙って連射による手数を知らしめていた。

――アサルトライフル。

それが今戦っている敵の武器である。

自身の力が、表面的に表すことができない能力者の大抵は重火器を使って戦いを繰り広げる。

俺もこの二丁の愛銃で、ここまで勝ち上がってきた。

奴も同じ系統の武器である。

それは、一昔前の能力者が戦場を闊歩していない時代の戦いと、同じである。

しかし、この戦いは前時代の戦いとは決定的な違いがあった。

その「決定的」な違いとは、この常識はずれな攻撃だ。

奴が持っているのは確かにアサルトライフルだ。

しかし、とある特殊な能力者が使うとこのようになる。

三時の方向にリズムカルな銃声、同時に薬莢がコンクリートの地面に落ちる音。

コンクリートを突き抜けて俺の腕を貫通した。

すぐさま、2発、三発と身を隠しているにも関わらず当たる。

肘に当たった一発はそのまま腕を貫通して飛んで行った。

そして、肩に当たった二発は骨へと直撃したのか、貫通はしていない。

奴の指がトリガーが離れたと気づき、次の障害物へと身を隠す。

そう、この能力の前で隠れるなど、小さな息抜き程度にしかない。

「いつまで隠れているんですかタスクさん！！ 僕はあなたを倒し、越えてみせます」

コンクリートの遮蔽物の後方から聞こえるのは、明確な答えと宣言である。

俺の左肩を抱えながら荒く息を吐く、肩は使い物がならないほどにダメージを負っていた。

肩と腕をつなぐ関節に、盲管銃創のダメージがあるからだ。

再生しようにも、体内に弾が入っているは、その効果は、無に等しい。

コンクリートを突き抜けることはできるが、体内では弾の形を変形させて、俺の体をむしばむように痛みがある。

「————ハアッ、ハアッ」

激痛と、無理な再生が俺を苦しめていた。

大きな息づかいとともに、額にある大粒の汗を左腕でガシガシとぬぐう。

だが、畑井ゴウの攻撃とは天と地ほどの痛みだ。

まだこちらの痛みの方が、精神的には圧倒的に楽である。

「普通」ではない考え方に、口元が緩んでいた。

そんな自分を観察しながら、片手で愛銃のリロードを済ませる。



畑井ゴウを倒し、順調に敗者復活戦を勝ち上がっていった俺は、次の対戦相手と戦うためにランク祭会場へと足を運んでいた。

激闘という激闘はなかったが、ランク上昇のために、血眼になっ

て向かってくる彼らの姿。

今日行われる戦いに勝てば、敗者復活のトーナメントに組まれることができる。

そんな戦った彼らのためにも、俺はやらなければならないと、改めて身を引き締める。

それが今俺にできることだ。

そして、絶対に成し遂げるんだ。

決意を新たに、ランク祭会場のドアを開ける。

開けたと同時に、凄まじい人だかりがあった。

盾田剣士戦と同じくらいには、人数が埋まっていたからだ。

俺がここに来る前に、決戦があったということもあるためだろう。本日敗者復活戦、最終本場2回戦目ということもあり、会場の人数を高い位置で一望する。

次の俺の戦いを楽しみにしているのだろうか？ それはさすがに自意識過剰か……

それほどまでに関心を持ってきていることに、心の中で感謝をして、待合室の裏手の方へと歩いていく。

ああそうか今日は敗者復活戦最終日だからな……

そう思いながら丁字路を抜けると、選手待合室の前のドアで剣先生が待っていた。

ドアによっかかりながら、不快考え事をしているのか、煙草を啜えながら遠くを眺めるようにして地面を見ている。

そんな彼女に声をかけた。

「こんにちは先生、こんなところでどうしたんですか？」

そんな質問を投げかる、それと同時にタバコの灰が、彼女の服に落ち、風に乗って地へと飛ばされる。

「おう、タスクか。お前を待っていてな…… 話があるから中で話さないか？」

そう返すと、靴の裏で煙草の先端にある火を消す。

消した煙草をポケットの中に入れると、待合室の中へと右手の親指で指した。

「うっす」

二人は待合室の中へと入った。

中にある時計を見ると、戦闘開始まであと50分もある。

剣先生は、二つの椅子が向かい合っている、入ってきたドアが近い椅子の方へと腰かけた。

話は10分ほどでいいかと考え、愛銃のSIG SAUER P  
228 XX《ダブルクロス》の整備を机に置いて始める。

「ここもあまり変わらん」

彼女はその待合室を一望して、俺の方を見た。

そうこのESP学園の元は、この島にあった中学を取り壊して新たに整備された学校だ。

彼女は、その学校の生徒であつたらしい、二人で訓練をしていた際に話してくれた。

もとは柔道部の部室だつたらしく、このような待合室に変えたと言っていた。

島の住人は、機関がESP学園を作るために、都会へと移住させたらしい。

「そういえば話って何ですか」

そんなことを聞きながら、特注のフォーミングボアクリーナーを銃身の中へと軽く噴射させて中を洗浄する。

「まずは…… そうだな。よくここまでこれた、さすがは私の教え子だな」

手を腰に掛け、どんなもんだと胸を張っていた。

「まだ敗者復活戦ですよ。先生」

そう答えながら持ってきた使わない荷物を、椅子の横に置いてゆっくりと腰かける。

「なにか困ったことや、体のどこかがおかしいといったことはない

か？」

彼女は腕を組む体制になると、大きなバストを抱き上げるように椅子へとかける。

うーん…… 特にこれといった異常はないな。

「とくにはありませんけど……」

最近ち○この様子がおかしいと思っていた。

しばらく悩むようにして顔を曲げる。

うーんこれは話した方がいいのか？

そう思った俺はおもむろに彼女にち○こを見せた。

「見てくださいよこれ」

鉄拳が飛んできた。

「誰がドリチンを見せろと言った？」

しかも小さすぎると付け加えて、彼女は煙草を取り出し、火をつける。

「てへぺろこっーん」

あ、いっけなーいとベロを出して、しまったアピール。  
これでもいい彼女が和んだのか、口から笑みがこぼれている。

「とにかくだ…… お前は能力を酷使する戦闘が多すぎる」

そういうと彼女は煙草を大きく吸い込んだ。

ジリジリと音を鳴らし、肺いっぱい溜め込むと大きく煙を吐いた。

「はい」

俺は不死身をいいことに、食らわなくてもいい攻撃を食らって喜んでいた。

それは、新しいおもちゃを持った子供のようにもあるため、そのための忠告だろう。

「大きな力を持ったものは、それ相応の使い方をしなければならぬ。わかるな」

子供を忠告するように彼女は言った。

畑井ゴウ戦では、あまりにも俺が攻撃を受けすぎたため、審査員が機能をしていないという珍事件があったらしい。

たしかにあれば、誰もが俺が死んだと思っただろう。

そして俺のゾンビのような立ち上がり、S・ESPではないかとあるところでは噂が流れている。

まああながち間違いではない噂である。

「ただえさえお前は無能力者だと周りは認知している。それがどういふことかわかるな？」

はい、と答え整備をする手を止めた。

ここはESP学園。俺のようなS・ESPの所属するようなところではない。

なぜ俺がここにいるのか、それは分からないが、郷にいては郷に従えだ。

「極力あのような戦闘は避けようと思います」

いくら戦った相手の意識喪失を待っていたとは言え、一人の戦士としてはあってはならない戦闘だ。

わかってはいたが、畑井ゴウとの根競べのような気がして、あの時の俺はどうかしていた。

「わかっているならそれでいい。いつも言っていたが、分が悪いと思っただけならば引いてもいいのだ」

前かがみになり、俺の顔をじっとみつめて彼女はそう告げる。

FPSでも引くことを覚えるカスと、チームメンバーにも言われていたこと思い出した。

熱くなれば突っ込んでいく、それが俺の悪い癖でもあった。

しかしそれが功を奏したときもあった。

盾田剣士戦に、卍城王也戦だ。

あれは自身の能力も分かっていない時期だったため、ただ運が良かっただけだと自分でもわかる。

「ではこれで行くとする。あまり無理はするなよ」

その一言を発して、彼女はこの部屋から出た。

彼女が出て静まり返った室内で言っていた言葉を胸に刻んだ。

いつものように愛銃の整備を終えた俺は、担当の矢吹が来るまで待っていた。

静まり返る室内でいつものように目を瞑り黙祷をする。

「佐部タスク、準備を」

ドアが浅く開くと彼の声が聞こえた。

その水たまりの中に放たれた、一つの小石のような声に目を開ける。

ほっぺたを両手で思いっきり叩いた。

両方にあるホルスターに、愛銃を入れて立つ。

集中力が増してきたため、そのままの勢いで待合室から出た。

「————やっやるぜ。」

この戦いに勝てば敗者復活できるんだと、自分に言い聞かせ、鉄でできたドアをくぐった。

「おまたせしました。左手に来るのはは不滅の無能力者ア！！ 佐

部タスクだああああああああああ！！」

外のまぶしい光が目の裏側に焼き付く。

あまりのまぶしさで腕で目を覆っていた俺は、ゆっくりと腕をどけ目を開いた。

目の前に広がっていたのは、歓声と熱狂。

その熱狂からジンジンと体が揺れているのを感じる。

な、なにがあってこんなにも人がいるんだよ。

いつもはこんなにもいない観客に、不思議に思った俺は、キョロキョロと見渡しながら白線へと向かう。

観客に圧倒された意識をもう一度立て直して、対戦相手の入場を待っていた。

「左手に来るのはDランクから這い上がってきた男、西田アクトだああああああああああ！！」

実況の声が上がると、正面のドアから一人の男が出てきた。

その髪は、目を隠すように前へと伸ばして、人に顔を見せないようにしている。

背は一回り小さいく、スラっとしてはいるがしっかりとした筋肉の付きだ。

「両者、最底辺から成り上がってきた真のスペシャリスト！！その勝敗はどちらに傾くのか！！」

いつもの爆音実況が、観客の歓声よりもドームを震わせていた。

「佐部タスクさん、あなたと戦えるだなんて僕はうれしいですよ」

唯一見える口から彼はそんな言葉を言った。

「そうか、お互い頑張ろうか」

いい子のように反応に困った俺は、そんなありきたりの言葉しかかけることができなかった。

俺は完全に彼のことを多少下に見ていた。

どうも油断体質な俺はそれを戦闘で思い知ることになる。



## 第二十一話

「ファイッ！！」

始まりの火ぶたが切って落とされた。

両者一斉に、向かい合っている相手と距離を取る。

距離が20メートルほど離れたと同時に、奴の腰から小型のアサルトライフルが飛び出してきた。

いままで腰にすっぽりと収まっていたため、奴がアサルトライフルを持っていることに気づかなかった。

――ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、ダッ。

奴の銃から放たれた銃弾は、一発は元に立っていた白線の位置に当たり。

二発目は、俺の体を追うようにして、空中を切る。

すぐさま体の軸移動による、軌道変更によって二発目は回避することが出できた。

そのままジグザグに横へと走り、三、四、五発目が向かってくると同時に遮蔽物に隠れることができた。

状況を確認するように、彼の攻撃を遮蔽物から確認する。

すぐ近くからは、鉄とコンクリートの弾けるような音が聞こえてきた。

銃弾は、こちらを狙って連射による手数を知らしめていた。

――アサルトライフル。

それが今戦っている敵の武器である。

自身の力が、表面的に表すことができない能力者の大抵は重火器を使って戦いを繰り広げる。

俺もこの二丁の愛銃で、ここまで勝ち上がってきた。

奴も同じ系統の武器である。

それは、一昔前の能力者が戦場を闊歩していない時代の戦いと、同じである。

深呼吸を三度ほどして、少しだけ乱れていた息を整える。

奴も同じ銃火器使いだということに親近感がわいたのだ。

接近戦が得意なものは、この狭いランク祭において自身の体を使ったほうが、まだ早く終わると言っていた。

奴の足音を十一時の方向から耳から音を拾い確認。

両脇にあるホルスターから、愛銃を二丁取り出した。

白銀のフレームが、光沢をみせ、これからの激戦が始まるということに、気分が高ぶる。

浅く左を向き、遮蔽物から飛び出した。

奴は向かって左の一五メートル離れている柱から、その移動を見越して、三秒ほどの連射。

――ダダダダダダダッ。

その射撃によって見せた体を、走りながら放つ。

上手く奴は隠れ、一発は遮蔽物すれすれを通り、もう一発はコンクリートをえぐった。

そのまま奴の対角線上に移動するように、隠れる。

対銃火器の戦闘は、両者の誰かが大きく出れば戦況は変わる。

遮蔽物に背中でもたれかけ、奴が移動するのか聴覚をフル活用して聞いていた。

能力者の大抵は、その能力を生かした戦闘を繰り広げる。

あるものは鎌を使い、あるものはその手に銃弾さえ防ぐことができるグローブをはめる。

誰も彼もが、銃を使わないということはないが、使う人間は少数派なのだ。

しかし、この戦いは前時代の戦いとは決定的な違いがあった。

奴が持っているのは確かにアサルトライフルとリボルバーだ。

しかし、とある特殊な能力者が使うところになる。

その一瞬。

三時の方向にリズムカルな銃声、同時に葉莢がコンクリートの地に落ちる音。

それと同時に、右手に凄まじい激痛が襲った。

そして、俺の能力が発動して、その手に付いた血と切れた頬は再生する。

とある弾がコンクリートを突き抜けて俺の腕を貫通したのだ。

すぐさま、二発、三発と、遮蔽物に身を隠しているにも関わらず当たる。

肘に当たった一発はそのまま腕を貫通して飛んで行った。

そして、肩に当たった二発は骨へと直撃したのか、その部位は貫通していない。

奴の指がトリガーが離れたと感づき、次の障害物へと身を隠す。

―――どうということだ？

0・5秒ほど考えてやっと気づいた。

奴は「能力者」だということに。

この厚さ一メートルもある、コンクリート製の遮蔽物を貫通するほどの威力。

対物ライフルによる射撃。

ではなく、念物強化能力による、銃弾の強化。

またも能力者の戦いでは、その意味を持たない遮蔽物だ。

物に頼っていたしょうもない思考を片付け、こちらから仕掛けることを考える。

銃弾が貫通した穴を右目で、奴の隠れていると思われる柱を覗く。奴はこちらを待ち構えるかのように堂々と立っていた。

「僕はあなたと同じ遭遇でした。僕の場合は物の強度を上げることしかできない。ですがあなたは違う。無能力でここまで這い上がってきた。それがあなただ」

そしてこうも。

「僕のような人間がもう一人ここにいたなんて！！ さらには誰よりもあなたは戦える。ですが僕はそんなあなたを越えます」

何を言っているんだ。俺は俺だけで、お前はお前だけだ。

確かに、生きていれば誰かに会い、その誰かに感じるシンパシーという物はある。

だが、水と油が交わらないように、人間もまた、同じではない。

俺は誰かの助けでここに立っている。

自力で上がってきたお前とは違うんだ。

だけどな、俺を期待している人のため、自身の目標のため、俺は突き進む。

それが俺だ。

「いつまで隠れているんですかタスクさん！！ 僕はあなたを倒し、越えてみせます」

コンクリートの遮蔽物の後方から聞こえるのは、明確な答えと宣言である。

俺の左肩を抱えながら荒く息を吐く、肩は使い物がならないほどにダメージを負っていた。

肩と腕をつなぐ関節に、盲管銃創のダメージがあるからだ。

再生しようにも、体内に弾が入っているのは、その効果は、無に等しい。

コンクリートを突き抜けることはできるが、体内では弾の形を変形させて、俺の体をむしばむように痛みがある。

「————ハアツ、ハアツ」

時間が経つにつれて、激痛と、無理な再生が俺を苦しめていた。大きな息づかいとともに、額にある大粒の汗を左腕でガシガシとぬぐう。

だが、畑井ゴウの攻撃とは天と地ほどの痛みだ。

まだこちらの痛みの方が、精神的には圧倒的に楽である。

「普通」ではない考え方に、口元が緩んでいた。

そんな自分を客観視しながら、片手で愛銃のリロードを済ませる。

「僕の攻撃に逃げ場なんてありませんよ！！ わかっているでしょう！！！」

左手にはリボルバー、右手にはアサルトライフル。

能力が発動できるのはあのリボルバーからだと考える。

ほんの一瞬、その隙さえあれば。

奴の俺の距離は、短くも、俺の体感では地球を一週するくらいには長かった。

戦いの緊迫した空気で、意識が過剰な距離感を生む。

いや考えを改めろ、距離が遠いならば、こちらから行くに限る。

自信の痛覚、意識を完全掌握させて地球の裏側、いや人間の限界すらも超えてやる。

————それが俺の戦いだ。

覚醒せし感覚《Awake Sinner》————。

発動と共に、障害物から出た。

視界は、極限間まで情報の単純化、色彩情報は奴の周りだけ、体感時間は、二分の一。

正面二〇メートル、単射撃武器に連続射撃は圧倒的不利である。それでも俺は行く。

それを気づいたのか奴は待ち構えたようにそのアサルトライフルをこちらの方へと向けた。

「とち狂ったんですか！！ タスクさん！！」

激動するように奴は叫んだ。

「うるせえ、来いよ俺はここにいるぜ！！」

奴は右手に持っていたリボルバーを素早く収めると、アサルトライフルを放った。

連射による手数をそれでもかかと見せる。

それを躲すようにに愛銃を二丁、奴の方へと向け二メートルほどジャンプをして放つ。

「的ですね！！ 的ですよあなたァ！！」

空中で静止した首を思いっきり右肩へと曲げた。

右肩にあったのは、自製のキテレツスイッチ。

畑井ゴウ戦で学んだこと、それは奇襲の重要性だ。

足には、イレギュラーダガー《奇襲ナイフ》が潜伏されている。そのナイフが奴のアサルトライフルを握っていた手へと、空中を飛ぶ戦闘機のように滑空。

空を切るような音を立て、その手に当たった。

親指の骨を断ち、切られた指と同時に奴の銃火器が落ちる。

「あああああ！　それですよタスクさん！！　これがあなたの真骨頂だッ！！」

奴は左手でナイフを取り出した。

俺はキックをする要領で奴の胴体へと、落ちていく。

構えられていたナイフは、ふくらはぎを切り、血が噴き出る。

地と俺の体を浴びた相手は、たたきつけられるように地面に倒れた。

二人は混ざるように後ろへと転がっていき、俺が上に乗りかかった状態で止まった。

すぐさま左手で奴の襟橋をつかみ、顔面の中央にある鼻あたりを頭突き。

頭突きの衝撃、後頭部と足場のコンクリートの激突に砕けるような音が鳴る。

音と同時に、コンクリートの粉末が二人を襲った。





痛みで視界が揺らぎながらも、腹をキックして対処。

二メートル先まで、奴は飛んでいく。

そしてホルスターにある、愛銃を取り出し、奴へと向ける。

それと同時に奴もまた、リボルバーを構えていた。

「これで終わりだあああああああああああああ……！！！！！！」

二人の弾はお互いの人的急所を見事に打ち抜いた。  
箸を咲くようにして、同時に倒れる。

……………ドクン！！

体に電流が流れるようにして体の再生が始まった。

立ち上がるころには凄まじい倦怠感が襲ったが、ゆっくりと立ち上がる。

そして倒れていた奴を一目見ると、大きく左手を天高く上げた。



## 第二十二話

「よくここまで勝ち上がってきたな、無能力者…… いや、タスク  
ッ！！」

正面に立つのは、盾田剣士。

人間を一回り、二回り、ビックライトで大きくしたような筋肉が  
大半の体。

衣類は支給された軍服に、中では黒いアンダーシャツを着ている。  
史上最強にして、全戦無敗、100年に一人神に選ばれた存在。

その姿は、鉄壁のように分厚く、どんな攻撃さえもたやすく軽く  
跳ね返し、奴の能力である見えない壁は、敵の精神をくじかせる。

さらにその能力はどんな形に変形することができる。

近寄る者、迫りくる攻撃は、絶理の壁で無へと返し、全ては最強  
のためにと存在しているようでもある。

それが俺の壁であり、この先の憧れの人へなるために、絶対に倒  
さなければならぬ相手。

「ああ！！ この前のやり返し《リベンジ》にきたぜ！！ 中年顔  
野郎！！」

敵ながらも迎え入れようとした相手を、貶すような発言で罵倒した。

だが、ここまで来たんだ。

詫びねえ、媚びねえ、ひれ伏さねえ、諦めねえ、俯かねえ。

それが俺だ。

———佐部タスクだ———！！

「ふんッ！！ 相変わらず、返しが捻くれた厨房のような言いぐさだな。貴様がここまで這い上がってくるところを私はしっかりと見ていたぞ」

鼻で飛ばすように息を出すと、奴は腰に回していた大剣を俺の方へと向ける。

重さはファンタジー世界の巨人が持つような大剣である。

それは盾のようでも、剣のようにも見える武器で、奴は軽々と扱えている。

それは、丸太のような大きな腕で扱っているからだ。

その腕は、同じ人間とは思えないほどに大きく、腕全体を黒の衣類で隠れている。

「それはわざわざご苦労さま！！ 俺はお前を越えて、絶対に搦んでやる！！」

すっと彼に中指を立て、微笑の笑みと渾身の目力で答えた。

「ハハッ！！ 貴様ごときが、この俺を越えるだと……」

俺の発言に痛快に笑うと、手を顔に当て、浅く笑みを浮かべていた。

次に顔をあげる。その瞳は、ついに長年探し続けていた「何か」を見つけた探検者のような顔でもある。

「やれるなら、やってみるがいい。だがこれだけは言うておく、お前がその腕を治す力を手に入れたように、私も貴様と初めて戦ったときの私ではない」

ガーン！！

奴はコンクリートの地面に、手に持っていた大剣を突き刺す。

発泡スチロールを木の板で貫いたように、コンクリートをいとも簡単に貫いた。

奴が俺の能力について知っていたなんて……

俺の能力は死すらも超越した完全治癒能力。

頭以外のどんな攻撃でも即時再生のできる能力だ。

だからどうした。最終決戦だろうが、なにをビビってんだ俺は。

ここまで這いずり回ってきた。なら簡単だよなァ！！

ゴールまで這いずり進む。

たったそれだけじゃねえか!!

そしてやつは、手に取っている武器の名を、ゆっくりと告げる。

「系・神殺斬首刀へケイ：ディカヴィテイション・ソード・オブ・ザ・ゴッド」

その武器、柄は木刀のように握りやすいような大きさではあるが、刀身は体感で、奴の腕の三倍ほどの大きさである。

その名の通り、神でさえも斬首できそうなほど、巨大な太刀であった。

刀身は、禍々しい紫を中心とした、暗然たるコーティングとなっている。

「これが私の新たな相棒だ。はるか昔から律動的に行われる、連関された神殺しは、私の責務となった。この神のお遊びによって混沌となった世界を、愚行な神から救うべく手に入れた新たな「力」だ」

その時だった。

———錯覚、いや俺には見えた。

奴の武器を持っている腕は、その武器に喰われかけているのをその「気」だけで退いている。

常世全ての、殺意、残虐的衝動、善を悪へと変える力。

人間の業を、世界の業を具現化したような武器であった。

魔人のような力を持った武器を扱う覚悟、世界を救う使命が俺にはわかる。

奴は、自身の人生をかけて、その武器を握っている。

神殺しという単語に、疑問が生まれる。

こいつは、何を言っているのだろうか。

まるで何か世界で起きている大きな背景の一端を知っているような言いぐさだ。

それと同時にこうも思った。

なんて覚悟なんだ。

その覚悟は、生半可なものではない。

解る。その力は最恐にして、最凶である。

解る、その力は振るう者を、「シン」の孤独へと誘う。

解る。その力は「ゼン」を憎み、「ゼン」を滅ぼすべく作られたものだ。

背負うことがどれだけ愚かなことなんだと、俺は分かっている。

世界の理不尽、それが奴を見たときの感想となった。

ああ、この世界は狂っている。

人間は、見たものをそのままでしかとらえることができない。  
しかし、同じような境地の人間同士は、ある程度の察しができる。

選ばれた者……それは、何かを背負う者だ。

この不死身の能力も誰かの思惑で、背負わされたものである、あくまで推測だが。

この力に何度も救われてきた、そんな俺も何か大きなものを背負わされたものなのだろうか、それはわからない。

昔々、世界のある村では、生まれた一人の子供を神と崇め、一つの神鋼としてまつりあげた。

しかしその子供は、世界に、社会に、家族に、人間に、欲のために、一人神として崇められたのだ。

大衆のために、一個人がその人生を、その生涯をささげなければならぬ。

これは理不尽だ。

それは誰でもなく俺の感想だ。

彼が、俺が、誰かのためにと、その生涯を捨てる意味はあるのだろうか。

なぜ一個人に任せるのだ。

なあ誰のためなんだ。

明日死ぬかのような人間に、顔も知らないような人のためにこの

生涯をささげる必要はあるのだろうか。

幸せは、自分の中でしかないと思っている。

この誰かのようにになりたいという目標も、結局行きつく先は自分のためだった。

俺は自分の幸せのことしか考えることができない。

なぜあいつが背負っているのだろうと、俺には一生理解ができない。

なあ教えてくれ、なぜおまえは自分のためにこの人生を使おうとはしないんだ。

自ら全てを捨てに行くような考えになれるんだ。

「なあ」

それらの思考を止めた俺はただ一つ聞きたい質問に、小さくもな  
い一声をあげた。

同情は糞以下の人間がするものと分かっている。だから同情は  
一切しない声音で。

「お前は何のために戦ってるんだよ」

その問いに、どんなも物さえ入る隙間が無いほど瞬時に答えた。

「この世界を蹂躪している神を殺すためだ。そして神の手から俺一  
人で人間を救う」

それもいとも簡単に、悩むこともなく、淡々と、さも当たり前のように。

その答えに俺の感想も出ることはなかった。

こいつと俺は相磯ることはない。

ただそれだけだ。

「そうか……」

答えは出た。

まさに神というよりも超越されたルールのようなもの選ばれ、正義に忠誠を誓った人間なのだろう。

世界、国、社会、家族、仲間——大衆の盾。

それが俺の壁だ。

盾田剣士という壁だ。

あの人のようになりたいと、誰かを救う誰かにないたいという者の壁。

「俄然、お前を倒す気になったよ、答えてくれてありがとな」

そう一言、感謝を述べた。

目の前の倒すべきものは世界の、人の抑止力。

いわば体の中にある、白血球との戦いだ。

力無き大衆のためにとその身を捧げ、世界の均衡を守るために、邪悪な武器を持つ相手。

その矛盾したあり方に、人間のあり方と似ていると思った。

だからこの戦いは、人間対俺の戦いだ。

言い換えれば世界対俺だ。  
やってやる。

—————やってやるよ、運命様。

散々血を吐き、弱音を吐き、挫折を味わい、誰かのやさしさに触れ、俺を救ってくれた誰かのようになりたいと願った人間の戦いだ  
—————。

「貴様が何を考えているのか、そんなものは一切わからん。だがな、俺は世界の真実を知ったためこの混沌とした世界を救わなければならない。神という冠をかぶっているバケモノたちからな。」

そのための犠牲はこの両手に、嫌というほど数えないほどに、抱えきれないぐらいに出るだろう。だがな、私はそれでも世界を、人間を救ってみせる

手始めに、この俺の前に立つ、神のいたずらによって生まれたお前を殺す

それが私だ。それ以上の覚悟——使命、貴様にはあるのか？」

頭がお花畑にもほどがあると俺の中でそんな感想が生まれた。

こいつは、何かを背負っている自分に酔った最高の廚二病だ。

だが、嫌いではない。

そんな独りよがりな奴は、俺は結構気に入っている。

だから超えてやる。

誰かのためではなく俺自身のためにな。

そして実況が叫んだ。

「右手に立つのは、ESP学園創立、前代未聞の無能力者ァ!!!  
佐部タスクだああああああああ!!! いろんな攻撃を受けても立ち上げる、ゾンビのようなしぶとさ、さらには多彩な戦闘テクニックを使い相手を倒す!!! 最底辺から這い上がってきた、真の実力者だァ!!! 去年までランク祭に出場できなかった無念が、彼を導いてきたと剣先生はそう仰っております!!! どうでしょう先生、彼は勝てるでしょうか?」

今日は剣先生は実況と一緒にあってついていっていると聞いていた。

「そ、そうれしゅね、うんそうだと思いませえよ」

カミカミな発言であった。

戦闘があんなにも得意であるのに、大勢の前では緊張してしまうという、予想外のギャップが見れた。

「ツヴんんん!!! その対を成すのは……」



なほどに、緊迫した空気だ。

自分のためにと戦う者と—————

—————狂った神が決めた仕組みから、能力を持たない人間を救い、世界のあるべき姿に戻すべく神殺しを始めようとしている者。

この場では、両者は絶対に交わらない、白線に描かれた直線だ。誰の手でさえ、俺たちの進む道は変えることはできないだろう。人間と人間とが絶対には、分かり合えないように、そんな彼らもまた交わらない。

だから俺たちは、向かい合っている。

自らの掲げる目標のため、自らの目指している信念のため。

善と悪が、衝突するようにその戦いは始まろうとしていた。

そんな余韻に、会場ははまだ先ほどのアクセントに笑っていた。



ランク祭、対戦エリア。

そこに二人して立つのは、岩山のような肉体の印象が強い巨大な戦士と、一見細身ではあるが、近くによればしっかりとした筋肉がついている男。

両者が並ぶ、対戦するには、細身の方は場違いであるかのようにある。

それをボクシングで例えるならば、ミニマム級とスーパーヘビー級のような体格の違いがある。

それほどまでに体格の違いに、一目見ればわかるほどの体格差である。

両者の武器、比較的体格が小さいほうは、二丁の拳銃を両脇にある拳銃用ホルスターへとしまっている。

その武器の名は、SIG SAUER P228 XX(ダブルクロス)。

正式名称のSIG SAUER P226を改良したものである。調整は、その者の恩師により、ある程度の移動による戦闘に特化し

たつくりとなっている。

放たれた後の薬莢は、前方へと飛ばされるような仕組みになっており、連射によるジャムの心配はないように設定されている。

左右、両手にちょうどはまるように、設計されており、薬莢は、体から外側へと排出するようになっていて、連射によるやけどの心配はない。

一方、大男はどこかのゲームに出てきそうなキャラが背負ってそうな大剣だ。

その武器の見た目は、彼の体の二倍は優に超すほどの大きさに、塗装は紫をベースにした比較的禍々しい塗装となっている。

その武器の名は、系・神殺斬首刀《ケイ：ディカヴィティション・ソード・オブ・ザ・ゴッド》。

別名、神首切り殺しの大剣は、その男の目標のために、とある機関から特注で取り寄せたものである。

両者は超能力を使うことができる能力者である。

そうこれはランク祭、能力者どうしが、己の階級、金銭、ランクのために、戦うトーナメント式の大会である。

しのぎを削り、自身の実力と能力《さいのう》を駆使して戦う。そこには、まれに死もあり、頻繁に挫折がある。

それが、能力者として戦う人間の運命サガであり、宿命だ。

掛け値なしの実力勝負《ガチンコバトル》が、そこには広がっているのだ。

戦闘エリアは、直径50メートルほどの円状の形である。

その円を出ると速攻敗北となり、円の中には、均等に、コンクリートで作られた遮蔽物がある。

そして、北東、北西、南西、南東の四つの方角には、膝まで浸かれるほどの水場がある。

誰も使わないような水場に、通称：サルの温泉場と言われている。

今日行われるのは、ランク祭決勝戦。

全ての戦いが終わった選手、暇をもてあそんでいる、他の能力者たちは、この会場へと足を踏み入れていた。

史上最強と呼ばれた男と、最弱無能と呼ばれた男がその決勝で当たったからだ。

前代未聞の強さと、前代未聞の底辺から這い上がってきた、二人の男たちの戦いだ。

集客性、話題性のある二人が戦うのだ。

観客席は満員となり、中継による携帯対端末でさえも、サーバーエラーを起こしている。

それだけに彼らの戦いは、誰もが注目するようなものとなっていた。

しかしその二人はそのような「外部」の情報など微塵にも興味が

なかった。

それは、己の信念と、己の目標の戦いだからだ。

そのような自己をかけた、人生をかけた戦いに、外の情報は無用である。



目の前に立つのは、見上げられることができる、エベレスト級の体格がある男。

顔は、武士のように、堅苦しい印象があり、誰も彼もが、江戸時代からタイムスリップして飛んできたのだろうと感想が出てしまうほどに、巖窟な顔立ちであった。

体からあふれるオーラは、百戦錬磨の戦士のような、戦いに生まれ、その生涯は闘うことだけが、宿命づくされた人間だとわかる。

それほどまでに、彼の周りは、殺意を隠し切れないほどに満ち溢れていた。

「準備は万全か、まあその様子なら聞く必要はないな」

奴は手に持っていた、最恐にして最凶の武器、系・神殺斬首刀《ケイ：ディカヴィイティション・ソード・オブ・ザ・ゴッド》を持っていた。

全身の筋肉はとあるファンタジーに出てくる巨人岩窟のような肉付

きに、腕は大きい丸太のようでもある。

それをその体格に似合うように、堂々と、軽々と持ち上げるさまは、地上にある全てのものを叩き潰しそうなほどの、力強さを感じる。

巨大な「山」と相手をしているような錯覚さえ今の俺にはあった。

だが俺は越えてやる。

————この壁を、この山を、この男を。

そうして俺は、両脇にあるホルスターからSIG SAUER P228 XX《ダブルクロス》という名をした重火器を取り出した。

純銀のような、きれいな銀灰色をしており、会場の天井にぶら下がった、ライトを反射して、その光沢をみせた。

剣を抜くようにして、そして奴のほうへと、二丁の銃を構える。

場の空気は、凍り付きそうな緊張感から、刃の先端のように、鋭利な空気へと変わっていく。

「ああ、いつでも始められるせ」

そう奴に告げ、二丁の銃を強く強く握りしめる。

体の調子は、かなり好調なものとなっており、奴の首をとろうと全神経、血、細胞が獣のように身震いを始めていた。

さらに武者震いをしているのは、この能力印。

体の興奮作用が最高潮なのか、その手に刻まれた刻印さえも赤い光を放ち、戦闘を始めると訴えているようにみえる。

ああ、そんなに焦るんじゃないかと、刻印に言い聞かせ目を閉じた。

イメージする、自身が有利に立てる姿を。

終幕（フィナーレ）までの奴の倒し方、体の動かし方まで。

奴は最恐で、最凶な武器を使い、自信すらもまた最強の能力者である。

なら最初から仕掛けてやる――見せてやるよ。

俺の超感覚、圧倒的戦闘センス、超反応、超回復、雄姿を。

「両者準備はよろしいですね」

実況が、お決まりの質問をする。

ランク祭会場は、先ほどの、にぎやかなムードは立ち去り、緊迫した空気がその沈黙で分かる。

―――勝利を掴むのは……。

この俺だ―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

地面に響き渡るような鈍い始まりの合図が、そのランク祭の歴史に新たに刻まれるような勝負の幕が切って落とされた。

音が反響して、ランク祭の窓が、骨格が、壁が、緊迫した空気にいる観客の心のように揺れる。

鳴り終わりと同時に、俺は声を高らかに、天高く叫んだ。

「覚醒せし感覚《Awake Sinner》―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！―――！

」



んなもん俺がぶっ壊してやるんだよ、そんな世界のお決まり事なんてこの俺がぶっ壊してやる。

この世界は、誰もが自ら幸せをつかみ取れるんだ。  
誰かが犠牲になるだなんて、糞くらえだ、唾をぶっかけてやる。

「オラオラオラオアラァ！！！！！！！！！！」

正面にいる奴へと走りながら、手に持っていた二丁の銃の安全装置を解除してその壁へと銃を構え、それも奴の急所へとリズムカルに、トリガーを引く。

銃の軌道による、空を切る螺旋状の直線を見ることができた。

「お前は、俺の能力について忘れてたのかァ！！！！！！」

反発も放たれた銃弾は、殺虫剤を吹きかけられた蚊のように、途中で空中へと止まり、無残にも落ちていく。

そう奴の能力は、超拒絶系統能力、誰にも、どんなものにも壊すことができないバリアだ。

奴はそう叫んでいると同時に、ゆっくりと、その大きな大剣が奴の腰へと回る。

「おめえの能力くらいわかってんだよ！！ 黙ってるタバゴが！！」

頭全体へと巡りに巡っている、アドレナリンに任せて俺は奴へと吠える。

そして、奴へと左足でライダーキックをするように獲物に飛びかかった。

飛びかかる以前に、両手にあった二丁の銃をホルスターへとしまい、太ももにあるナイフを二刀、とっていた。

左肩にあるキテレツスイッチを起動、そのスイッチが発動するのは、この左足のふとももだ。

戦隊ものの、敵を倒した爆発のように、その左足からは、蒸気による煙が、二人の周りに充満した。

煙を切り裂き、奴の頭をめがけて、その流星のような左足を、一つの槍のように伸ばした。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

バァアン！！

と奴の目の前、俺の足の先に、鉄の板のようなものがあった。

そう煙では、見えなかったものの、奴はその大きな大剣、系・神殺斬首刀《ケイ：ディカヴィティション・ソード・オブ・ザ・ゴッド》で防いでいたのである。

その固い感触に、かかとの骨を伝い、膝、腰の骨に振動が伝わる。



息が止まりそうなほどに、緊迫したその一瞬の時間、俺は二丁の銃を両方とも放った。

「そのまま死に晒せえ！！」

勝ち負けなんて、ぶっちゃけると心底どうでもいい。

俺は、目の前のこの盾田剣士《カベ》をぶっ壊したいだけだ！！

「愚直だなあああ！！ タスクよおおおおお！！」

しかし銃弾は、奴の顔面前に制止する。

その壁は、一点集中した衝撃しか受けることができない。

銃弾が、止まりその絶対的に破れない壁は、見事に壊れた。

そう俺は、奴の能力である壁の弱点を知っていた。

奴がシールドを使うのは、平面上でのことであり、縦軸での戦闘では「使ったこと」が無いと。

「ったりめえだ、それが俺だあああああ」

その言葉と共に、華麗なる流星脚を奴の顔面へとぶち込んでやった。

見事に顔面に当たった攻撃は、奴の右頬へとグミを踏んづけたような柔らかい感触が伝わってきたのだ。

そしてすぐさま、頬骨の鉄のような感触に変わり、その固いものを踏んだ感触へと変わる。

奴は、殴られたように、その首を左へ九〇度回転させると、唾と思われる白い液体とともに、臼歯を吐いた。

————そのまま、倒れ掛かると思っていた俺は、奴の胸へと着地しようとした。

しかし、その「壁」は見事に俺の足を掴んでいた————。

「浅い、浅い浅い浅い浅い浅い浅い浅い浅い……」

な、なんでそのまま倒れるよ！ 化け物がッ！！

その奴が発した、繰り返しの言葉の中、俺は砲丸投げの玉のように奴の腕にがちりと掴まれて、奴を中心として人間を回しているとは思わないようなスピードで回っていた。

せめてもの抵抗で、しっかりとつかんでいる奴の鉄拳を何度も何度も蹴る。

「浅いわあああああああああ！！！」

その激怒とともに、俺はランク祭戦場エリア白線上ギリギリへと飛ばされた。

脳みそをぐちゃぐちゃにされたような、視界が回っている感覚が、俺の中であった。

その酒を飲んで酔っ払ったような感覚で、奴の姿を地に肘をつけながら見る。

「貴様ごときにこの俺の本気を出さなければならぬとはな!!!」

そういうと奴は、右腕にある軍服の裾を捲ると、腕についている板状の機械のようなものをいじる。

すると、奴の周りから上記のような白い煙が、爆弾を爆発したように広がった。

いまだ揺れる視界の中、ゆっくりと立ち上がり、奴の様子を見た。

その「体」は、いままでの「盾田剣士」とは思えないような、顔相応の体格へと変わっていた。

しかし、いままでのような、岩山のような雰囲気ではない。

筋肉が何倍にも凝縮されたような、完璧な肉体である。

「見せてやろう、俺の鍛えられた肉体の力をッ!!!」

## 第二十四話

「貴様ごときに、この俺の本気を出さなければならぬとはな！！」

うっすらと、霧の中から見えて声を大にして唱えるのは、学園最強の男、盾田剣士。

奴のまわりには、体を催してつくられたのだろう鎧が脱ぎ捨てられたように転がっている。

その姿は、従来の大きな鉄の壁、ではなく、一〇ある筋肉を、無理矢理に一へと凝縮させた肉体だ。

完璧な肉体、その研ぎ澄まされた筋肉の集合体は、右手にある武器をこちらに向ける。

「系（ケイ）：臨界突破装甲パーズング・アーマード」

肉体にある全ての無駄を一身だけにそぎ落とされたボディで、握りしめている武器の重さは体格の四倍は優に超しているだろうと推測する。

てめえ………なんて切り札を隠していたんだよ………

頭の中で、そんな感想を漏らしながら、とあるロボット物の機体

を思い出していた。

体の装甲が自身の能力発動によって剝がされたとき、その動き、攻撃力は段違いなものになる。

しかし、特定射撃による大技の使用はできない。

「驚いたか…… ふんッ、ただ見た目が変わったただけではない！！」  
すると奴は、大きな体験を軽々と刀身ギリギリに持つと、

「何年とこの鎧しがらみを、装着してきたか…… その開放感、鍛えられあげた筋肉、細胞、ストレス…… 今日《こんにち》全てを貴様に叩き込んでやろう」

そう言い放ち構えると、奴の体からオーラのようなものが錯覚ではないかと判断するくらいに漂わせていた。

瞬間、その完成された肉体は、俺の目の前へと、距離を詰めていた。

早いッ！！ しかしあの畑井ゴウ戦よりは明らかに遅いため、目をつかって追いかけることができた。

そして一太刀、空中を切るようにして、その剣を正面から、右へと切る。

一振りには、物を「振った」という音ではなく、大きな信念で大きな悩みを切っているような音だ。

上体を切り捨てるような攻撃を、イナバウアーの要領で擦らした。胸ギリギリを凄まじい速さで通っていく。

奴から半周回った大剣は、斜め下の地面へと突き刺さり。

今度はその回転力を生かした、回し蹴りが斜めを切るように、素早く鋭い一撃を俺の腹へと叩き込まれる。

速く予想外の体の使い方に、反応はできたものの、避けることはできない。

その体は地面へとたたきつけられ、全身打撲ではすまないような、ダメージを受けた。

地に転がった俺を踏みつける、奴の足、片足だけではあるが凄まじい体重に、どれほどの筋肉が凝縮されているのかわかる。

「神から世界を救う者として、その身を捧げなければならん。そして何よりも彼女…… 私はESP学園、主席のAランカーとして、圧倒的に勝たなければならぬッ!!」

話し終わると、奴は彼女と言ったあたりで、足の下に胃があるだろう場所を、強く踏んだ。

「ガッハ!!」

その凄まじい重圧に、胃の液は、吐き出された息とともに、口から排出される。

胃酸と口の中にある血が交じり合い、苦くも鉄の味がする奇妙な味を味わいながら奴の姿を見る。

彼女……? 奴のその行動の裏に何があるのか。

「その責務、業、宿命、運命、力、罪、それがお前にはわかるかッ!!」

怒涛な言葉の数々は、自身がおかれている境地と受け取る。

わかんねえよ、俺にはわからねえ!!

奴の足底を持ち上げるように掴むと、これでもかと呼ぶ。

「んなもんわかるか！ けどな一つだけ言っついてやる。俺はあこがれているあの人のためにお前を越えなきゃいけないんだ!!」

奴がその大剣を構えているのを対抗して、俺は二丁の銃を構えた。

「貴様…… そんなものために戦っていたのか」

頭を抱えるようにして手を額にかざし、その口を片方あげていた。

「そんなもの」か…… 確かにお前には道端に落ちている石のように「そんなもの」なのかもしれない。

だけど俺には…… 俺には………

「大事なもの」だッ!!

バンッ!!!!

俺は同時に銃弾を放った。

奴は銃声と同時に、俺の両腕を掴み、軌道をずらす。

扇の軸のように飛んでいった弾をよそに、俺はこう叫んだ。

「黙ってる!! 俺は成し遂げるんだ。俺を支えてくれた者のために、俺を導いてくれた者のために、俺を見ている守るべき者のためにッ!!」

上手く奴の腕をほだき、体重の乗っていた足をほだき、素早く奴

から距離をとった。

距離5メートルはあり、奴が攻撃を仕掛けてきてもある程度は対応できる距離だ。

その一連の行動、言葉を聞くと奴はこう叫んだ。

「ハハハッ！！ 笑わせてくれる！！」

天高らかに、両手を広げると、まるでありもしないものを、あると豪語している人を見るようにして俺をあざ笑っていた。

決勝ここまでできた俺には、そんな言い分さえも心には響かなかった。

それは、俺にはやれる自信があったからだ。

「その理想ごと、この俺が切り裂いてやる」

さきほどの痛快な笑顔とはまるで違う、いつものような厳格な顔へと変わっていた。

すぐ横に置いていた大剣を突き刺さっていたコンクリートから軽々と抜き取る。

「俺を切り刻んでみやがれ！！ なんどでも俺は這いずり進むぜ！！」

もう一度奴めがけてその2丁の銃を構え、瞬きする間にナイフへと変える。

「はいずり進むか…… ならウジ虫のように腐った死体を食べているッ！！ そんなお前は腐った肉をたべているように、何をしても

その程度なのだ！！ 無知なのだよお前はッ！！」

言い終わった瞬間、二人は動き出した。

二人は互いのミッドレンジへと入った。すぐさま奴は俺を切り落とすべく、両手で持った大剣を剣道の面打ちのように、上体を後ろへと目一杯そらした。

そのまま縦の攻撃から右へと回避行動をとりあがら、至近距離でナイフを奴の心臓めがけて、突き刺そうとその腕を伸ばす。

あと10センチと伸びていたあたり――奴の攻撃は、俺の左腕、俺の足へと当たる。

日本刀で木材を、試し切りされたように、俺の腕と足は左へと転がっていく。

状態は、足のなくなった左へと倒れ、その倒れる間に、奴の右わき腹へ、ナイフを突き刺した。

体重の移動を生かしながら、右足を飛び上がるように左へとジャンプし、大車輪回転のように左へと1・5メートルほど移動。

そのまま体の治癒能力の時間稼ぎのために、体を前転をしながら撤退をする。

「グハッ！！ 誰かを救った誰かになろうだと！？ 自覚しろ！！ そんなものは愚の骨頂だ！！ 身の程をわきまえろ！！」

その地に転がった二秒の間に、つんざくような痺れとともに俺の腕と足は治っていた。

左手をグーパーと開いて、自身の治癒能力のすごさと、何もなかったように治った腕を味わっていた。

奴はわき腹に刺さったナイフを、引き抜き、痛みに慣れていない

のか、溢れ出る血を右手で止めていた。  
涙を流すように、手の間からは、血が出ている。

「……なろうじゃあなくてなあ！！！！　なるんだよッ！！！！！！！！！！」  
さらに相手を追い込むために、今度はこちらから攻撃行動をする。  
素早く、ホルスターから銃を取り出すと同時に奴へと放った。

「ッ！！！」

心臓を狙って放った弾丸は、ど突かれたように左肩へと当たった。  
クッ！！　こんなときにこの腕が震えてやがる……  
超回復で治りたてなのか、小刻みに揺れているその腕。

「ハアツハアツ……　グフッ！」

奴は近くにあった障害物へとその身を隠した。  
痛みに悶えながらも、冷静な判断だと彼を見てそんな感想が出る。  
それと同時に、彼がこんなにも撃たれ弱いとは思いつかなかった。  
まあ無理もない、あの鈍器に使えるような鎧を着て、いままで戦闘  
をしていたのだ。

銃の一発、ナイフの内臓を切った攻撃を食らったのだ。  
どんな人間でも、初めて切られる痛みは、たまったものではない  
と思う。

しかし初めて見たときは、あの鎧はやつの体だと推測していた。  
それは動きが遅くなるなどと思う。まあ義手のパンチを耐えた防  
御力があるけど。



るくらいに俺は油断していた。

だから反応は、思考と目で追いつくことはできたが、体は、ついでには来なかった。

「消えろ、消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ……消え失せろ！！」

慌てて回避行動をするが、奴の斬撃が、俺の体を切りはじめた。

そのいままでの盾田剣士の肉体的な速さとは明らかに違う、人間ではない別の何かのような速さに、奴の力ではなく、奴の持っている大剣の力であると空中に首だけにされたおれは考えた。

一〇、一〇〇、一〇〇〇と首から下は、まばたきの間に無数の肉塊の集合体へと変わっていた。

しかし、首から下を切られていたため、かろうじて、目の前の状況について考えることはできた。

「そのまま何も成し遂げられず地へと鎮め！！」

そのままボールを潰すように、奴は空中にいた俺の顔を、コンクリート地面へとたたきつける。

コンクリートをえぐった衝撃の直後に、頭の中で電流が走り、脳の修復、次に脊髄の回復が、1秒足らずで終わる。

そして首から下の修復が始まったと同時に、奴は俺の顔に、大剣を突き刺した。

「鎮め、鎮めええええええ！！」

ガリッガリッと、そんな感覚と、眉間の間を突き刺す血に染まった大剣が視界情報と、残った神経感覚で把握する。

——ドクッ、ドクッ、ドクッ。

三度ほど、頭に地価が回る感覚が、あの子の声が俺の精神回路のドアを叩く。

『タスクのこと……心配したんだよ』

ついこの間、大好きな人にそんなことを言われた。

その子の傍にいたいと、俺を助けたあの人のようになりたいと。

だから再生しろッ!! 奴を…… 奴を倒すんだああああああ

ああああああ!!

「誰が沈むかああああああああああああああああ!!……!!」

転瞬、体は、光の速さ、いやもとからそこにあっただかのようにすべてが再生した。

しかし、あたまを大剣に突き刺されたままの状態である。

そして、勢いよく頭に突き刺さった大剣を神経白羽どりの要領でがっちりと掴む。

「何!!」



「貴様、貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様貴様…… 貴様ア！！！！！」

奴は内またになりながら、ぶるぶると足は震え、大剣を杖代わりに立ち上がっていた。

やつの根性に、驚いた。そして容赦もなしに銃弾を放つ。

「系；絶対ッ 領域《ランセーネン・シールド》！！！」

奴はそれでも能力を発動できる精神力を有していた。

しかし、その力は弱く弾をシールドで防いだものの、小石を投げたように奴の体へとあたった。

お互いに見合わせ、5秒。

息を切らしていたため、同じような動作で、二人は肺の空気を出していた。

「痛みというものは、これほどまでに…… 痛かったのだな」

奴は徐々に回復をしているのか、その声には先ほどのような痛みを感じさせることは少なかった。

そして頭に血が登っていたのが、覚めていたのか声はいつものように冷静である。

「そうだよ…… 長らく忘れていたんじゃないのか？」

「そうだな…… これが戦士、戦いというもの」

同じような返し、奴はこの状況を楽しんでいるかのように見えた。  
決着はかなり長引きそうだ。

## 第二十五話

ダン、ダダン、ダン、ダン、ダン！！！！！

凄まじい斬撃と、隙を見せないリズムミカルな弾音が会場に鳴り響く。

大剣は、全ての障害物を倒し、何も無い更地のように、ランク祭戦闘エリアは変わっていた。

数時間でこのような変貌はないと、実況は叫んでいる。

それだけ、二人の戦闘は、攻防、回避があった。

一つの山場を越えた時、二人は、止まり会話を始めた。

「そういえばお前、戦う理由を聞いた時に、とっさ彼女って単語が出たよな」

俺は確かにそう聞いた確信、彼の――盾田剣士の行動原理からわかる。

これほどまでに成し遂げようと脅迫概念をもって行動しているのは、誰かのためではないかと。

「フッ、隠しても仕方のないことか……」

そう吐き捨てるように息を出すと、こう俺に言う。  
目は、下を向き、ゆっくりと俺と視線を合わせた。

「そうだ」

はっきりと、堂々と、さも当たり前のように。

それが盾田剣士だとも言っている答えだ。

そして彼は語りだした。彼の行動原理、全ての始まりを。

「ほんの少し前、ちょうどお前と卍城が対戦をした次の日の話だ。  
俺は九州特区のESP議会招集会に招待された。忘れもしない、その日は出会うべくして彼女と会った」

彼は目を瞑る、その過去が、彼にどんな影響をあたえたのかわからなくて俺にはわからない。

だけど、これだけはわかった。彼が良い出会いをしたんだろうと。  
「私もまだまだだな…… であろうことか、そんな彼女の笑顔、孤高の存在、その勇士に惹かれてしまったのだ」

卍城のことは言えないかと、自身のことを戒める盾田。

彼が、一人の女の子にそんな肩入れをするような男だとは思いつしなかった。

それを続きも、黙って聞いていた。

「故に話しかけてしまった。

そして彼女のそばにいたい、そんなことを不覚にも思ってしまったのだ」

彼女がどんなことをしている人間だなんて俺にはわからない。

けどいつも厳格な彼がこんなにまで変わってしまったのは、盾田の言っている彼女と出会ったからだろう。

「彼女は、世界を愚行な神の手から救うために戦っていた。いままで何年もそれも一人でだ

数えきれないほどの犠牲、代償、裏切りをしたと語っていた。

そんな「悲しそうな」顔をしている彼女が今もこの記憶にしっかりと刻まれている。

だから彼女の居場所を奪った。彼女があの時に見せた笑顔で暮らせるようにと

私は彼女が愛している世界を、彼女の代わりとなり、救い成し遂げなければならん」

彼はたんとんと俺に話している。

その語り部は俺の方を見る。そして手に持っていたその大剣を俺に向ける。

「この悪魔の武器は彼女が持っていたものだ。彼女から奪ったからには私はやり遂げなければならない」

目を下に、そして俺を見るために顔があがる。

だからだろうか、かれの言うことに間違いがあると俺はそう思った。

「そこ子がお前のことをどうおもってるのかなんて俺には一切わかんねえよ

だけどな！ お前はあの子のそばにいたいと思っていったんだろ  
う」

「……」

彼はうつむきながら俺の話を聞いていた。

まるで自分の心を殺してもみえるその顔に、過去の自分の面影があると感じる。

俺は、あこがれている人になるためにどうしても戦いたかった。

実戦授業を受けることができなかった俺には戦うことは許されなかった。

そんな昔、雁字搦めの状態を経験した。

だから、過去の自分を彼にも重ね合わせていたのかもしれない。

でも、だからこそ彼に言おう。

「だったら傍にいる！ あの子が世界を助けようとしている信念さえも奪って！」

銃を奴に構え、こうも叫ぶ。

「ほんとうはあの子の支えになりたいと思ったんだらう！？」

あくまで俺の勝手な憶測にすぎない。

けどどうしても言わなければならないと叫んだ。

それが彼にとって余計なお世話でもいい。

「……だからだ！ 私は一人でやらなければならんだ！」

全ては自分が始めたことなんだと。

そうとも意味が取れる言葉。

「あの子の代わりとなり、私の手であの子の笑顔、あの子が守ろうとした世界を救う！」

搾り取るように彼はそういう。

けど…… けど……！！

「……もう辛いことは私だけで、いい……！！」

それでもと、彼は叫んだ。

なんでだよ、もっと簡単なところに、ハッピーエンドがあるだろうが。

「馬鹿野郎！ だからなんでそうお前は一人で背負おうとするんだよ！ そんなのがかっこいいって思ってたのか……！！」

「つらい思いをしている彼女の代わりとなる…… それは彼女が好きだからだ！ ならやって当然だろう……！！」

だからこそ、誰か一人を犠牲にしてやっているこんな世界が大嫌いだと遺伝子レベル、いや運命レベルで分かっていた。

そんなクソみたいなエンドなんて……俺はいらぬ。  
みんながハッピーになれるエンドを。

それが間違っても、そんなものは無いと言われても。  
彼のすぐそばにはあるじゃないか。

「本当に愛しているのなら、相手を支える！　そうじゃねえのかよ！！！」

前方にいる彼の方へと俺は駆けだした。

すぐそばにある、勇気を出せば彼としては遠くても、すぐ近くの届けるハッピーエンドを教えるために。

「あのこが笑って暮らせるなら！　私はそれでいいのだあああああ  
あ！！！！！」

俺の全身を真っ向から否定しなければならぬと、彼は絞り切った水の出ない布を絞るように叫ぶ。

脊髄反射のように、彼は俺と同時に動いた。

「てめえは筋金入りの馬鹿だよ！！！」

銃を持った両手を彼に向け、同時に放った。

俺の斬撃で血を浴びた愛銃たちは、淡い赤みかかった銀色となっている。

火花は、飛び散る花火のように、弾丸を飛ばし、葉莖は前方へと

飛んでいく。

「ケ、系：絶対領域《ランセーネン・シールド》!!!」

俺の攻撃に慌てて反応すると、シールドを展開する。

しかし、そのシールドは、しっかりと見えるようになっていた。

白い、煙のような、いや彼の心の強度のような壁《シールド》は音を立って壊れる。

一つの「何か」が壊れたようにも見えた。

それを見計らい、彼の右肩へ向けて、弾丸を放つ。

「ん、あア！　ぐああ！」

あっけなく当たった、弾。

なぜあの大剣で防ぐことをしなかったのだろうか、そんな疑問が。

ああ、そうか。

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

終わりのゴングが会場に鳴り響いた。

「お前の勝ちのようだな……」

目の前で、糸を切れたように動かない糸人形のように手をぶらぶらと動かし、彼はそう告げる。

膝は地に付き、抵抗はしないという意味表示が、彼から見て取れた。

「ああそうだ。そしておめえの負けだ」

そう言い奴の髪の毛の生え際に銃を突き付けていた銃を見て、こう聞いた。

「お前、その剣で銃を防ぐことくらいできただろう」

彼の右前にある地のコンクリートにささった大剣を見る。

禍々しく、罪の代償のような大剣は、その異質なオーラを放っていた。

俺を何度でも切り裂いた力を持っているこの武器だ。

「彼女、の…… そんな気が…… ただそれだけだ」

彼の顔が、はっきりと見えた。

「透明な武器だって使えたはずだろう。なんで」

初戦に彼と戦った時に猛威を振るったあの見えない武器。

「不死身の生物を相手にあの武器は役には立たないだろう」

人をUMAみたいに言いやがって。このやろう。

まあ一度見た武器は対策が簡単だからな。

それを聞いて、奴の頭につけた銃を放す。

「まあそうだな…… 何かで潰れそうなら他人を頼っていいんだよ、誰かを巻き込んでもいいんだ

おめえの人徳でAランクの仲間が誰か助けになってくれるだろう？」

俺は彼から視界を外し、

「……まあ俺もいるけど」

そう一言だけ言って、照れを隠すようにして、頭を撫でた。  
反対側を向いているので彼の顔は見えない。

「ああ…… そうだな」

彼は、声が小さくも、そう答える。

「だからあれだよ…… うーん」

もうちょっと言うことがなかったのではないかと、必死に頭を回転させこう言った。

「お前が想っている彼女もさ、どんな人かーなんて俺にはわからない。だけど、お前は彼女を支えたかったんじゃないの？」

彼の言っている彼女のことの気持ちはどうかなんてわからない。だけど本当に愛しているのなら、相手を支えるものだと思っている。

ただそれは、俺の考えであり、ただ目の前にいる彼に押し付けただけだ。

それが罪だとは俺は思わない。

彼は、彼女の笑顔に、その闘っている姿に惹かれてしまったと言っていたからだ。

ならかたくなに一人で背負わず自分を押し殺さずに、彼女に思いの丈をぶつけるべきだと俺は思う。

「たしかに…… 確かにそうかもな。だがこれを奪ったからにはあの時のようには戻れない」

彼は下を向き、そう答えた。

トップを背負っている男とは思えないような、自身のない表情である。

「いや戻れるよ、人生はもう一度やりなおせる！ まあソースは俺なんだけど。ほら」

それを否定する。

だめならやり直せと、剣先生に教えてもらった。

その受け入りだけだね。

地に座っていた彼の体を支えて、立ち上がろうとした。

「本当にお前はお人好しの間抜け野郎が無能ゴミクズ腋臭」

顔は見えない。

だけど、罵倒の言葉からは、感謝の気持ちがあった。

「はいはい…… めっちゃおも！」

そうして俺のランク祭は、幕を閉じた。



ランク祭が終わった俺は、部屋でぼーっとテレビを見ていた。  
時刻はPM9:00、窓から見える夜景は星々が自身の存在を示すかのように光っている。

俺だけしかない部屋に、バラエティー番組の音声聞こえる。  
あのランク祭が終わった後に、大丈夫だと言ったものの病院に無理矢理に転送された。

医師は俺の能力についてどうやら知っていたらしく、話はすぐに終わり、帰ると午後9時になったということだ。

マイとユウの顔を見たいとドアを開けたが、誰もいない部屋にテレビだけが付いていたのだ。

すると眠気が襲ってきたので、リモコンでテレビを消し、ベッドへと腰かける。

ベッドの柔らかさを堪能した瞬間に、携帯端末からメールが届いた音がきこえた。

「ランク祭制覇おめでとう（ピースの絵文字）お祝いは明日の授賞

式と同時に言う。今日はゆっくりと休みたまえ（下を出している絵文字）」

剣先生の顔文字の独特なセンスに、ちょっとした笑いが出た。

確認が終わり、体をベットに倒すと、じっとコンテナハウスの天井を見る。

ああ、終わったんだなと、とくに考えることはなかった。

ぼーっとして疲れているのだろうと自分を自己分析して、目を閉じた。

するとまた携帯端末にメールが入った。

ユウからのメールを枕から半分出した顔で見る。

今日、マイはユウの家へと泊まるらしい。

あの先頭の後だったので、顔を確認したかったのだが、まあ仕方ないと画面を消した。

疲れた。

とりあえず武器の手入れだけでもして、今日は眠ろうと、ベットから体を動かした。

マガジンポーチも、ホルスターも盾田剣士との戦いで無くしてしまった。

しかし、この2丁の銃だけは、運が良いのか手元に残っている。

多分この先ずっと使っていくのだろうかと、考えながら、手入れを始めた。

血がこびりついており、なかなか擦っても落ちない。

30分くらいかけて一つを終わらせて、だいたい一時間くらいで整備は終わった。

今日もありがとうと、一声かけ、予備のホルスターへしまう。

急に脱力感に襲われ、床に倒れるように眠ってしまった。

## 第二十六話

目が覚めた。

「タスク兄さん、おはようございます」

左手を握っているのは、ユウだ。

手の甲をほったにつけ、彼女はずっと俺の起きるところを待っていたらしい。

それは、彼女の手がかなり温かいからだ。

「おはよう、そういえば今日の授賞式何時からだっけ？」

素晴らしい辺りを見回してみる。

見知らぬ天井はハイライトを浴びているように眩しく、壁、ベ  
ット小物は、清潔な白一色である。

鼻からアルコールの消毒液のようなつんとした匂いが広がって  
いる。

右腕には点滴がされており、赤い液体、白い液体の2種類が、  
俺の体の中に入っていた。

「授賞式は一週間前ですよ……」

え、一週間！？ 俺はどれだけ寝ていたんだ！？  
彼女の、心配している顔。

「ま、マジ？ どれだけ寝ていたんだよ……」

右手で、顔を拭くようにがちがちと擦る。

「私…… 心配したんですよ？」

ふと彼女のほほに触れている左手に、滴が付いたようなような  
感触が伝わる。

それから彼女の顔はこちらから確認できないほどに、前髪がそ  
の顔を隠していた。

彼女は俺の妹のような存在だ。

昔から俺のことを心配してくれて、独りにしないよう俺の相手  
をしてくれた彼女。

右手で彼女のサラサラな髪を撫でた。

「ごめんな余計な心配かけちゃって」

精一杯の謝罪の言葉を彼女に告げる。

そういえばこうして二人で話すのも最近はなかったなと気づい  
た。

「もう、タスク兄さんの馬鹿、くさい、変態、M字ハゲ、トイレかなり長い」

き、傷つくなあ……

はははと心の中で彼女の罵倒を黙って刻み込む。

これだけ心配させたんだからまあ、あたりまえの償いだなと。

しかし最後のトイレ長いは余計じゃないんですか？

「もう……とにかく、死ぬなら私よりも遠くて、すぐにはいけないところで死んでくださいね」

その言葉と共に、俺の手が彼女のおでこに当たる。

そして彼女のくちから笑顔が出てきた。

「ああそうだな、まあ俺死なねえけど」

冗談のようで本当のことを彼女に告げた。

俺の能力は、人を超越した超再生、大量出血以外では倒れない不死身の体。

まあこの能力を知らない彼女には冗談のように聞こえるだろう。

「知ってます、あの盾田を倒したんですから。そう簡単に死なないことなんて」

彼女は、満天の笑顔で俺の顔を見ていた。

眩しいその笑顔、彼女にとって誇らしいとも感じ取れる。

ああ、もうキュンキュンしちゃうじゃんか……

彼女のその笑顔に顔が熱くなってしまった俺は、慌てて視界をそらす。

「そいえば俺、授賞式出れなかったし、どうすんだ……」

「あ、ほらトロフィーならここにありますよ」

彼女は掴んでいた俺の手を放すと、立ち上がり、左上にあった机にあるトロフィーを見せた。

小さくも、しっかりとしたつくりがわかる金色だ。

「あ、出れなくても貰えちゃったんだ……」

普通もらえるかな…… まあ病欠みたいなものだし……

「私が男装をして出たんですよ！」

えっへんと最近彼女の体は、富んでいた肉体が、しっかりと引き締まっていたようにも見える。

え、それよりも男装をして授賞式に出たという真実に、まばたきが止まらない。

「よ、よくばれなかったな……」

とにかく驚いていた俺は、彼女の誇らしいようなよくわからな

い顔に、妙な信頼が芽生え……

なわけあるか！ ああ、晴れ舞台…… なんて俺は出れなかったんだ。

自分の表彰式なのに……

とにかく落ち込んでしまった気分をあげようと必死になって楽しいことを考える。

無理です、さすがにこれには俺のメンタルも……

はあ……

「あの…… あれだ。ありがとうな俺の代わりに出てくれて……」

別に改めて別の日に俺専用の授賞式をとり行うのもよかったのではないかと……

まあでも、俺を応援してくれた人たちを心配させるしな。

なら影武者でもよかったか。

そうだ、そう考えることにしよう。

「ちょっと元気がないですよ？ 体調悪いんですか？」

ユウの心配そうな顔が、俯いていた俺を覗き込む。

すぐさま顔をあげて、なんでもないよアピール。

「じぇじぇん、だいじゅぶ」



「元気が少年？」

マイがユウを呼びに行くと思棟を後にすると、剣先生が、足っていく彼女を見て病棟に入った。

「先生外で会話聞いてたんでしょう？」

まあユウとの会話を聞かれて困ったところはない。しかし他人に会話を聞かれるとなるとあまりいい気分はしない。

「何も聞いていないぞ、それより授賞式の件だが」

と、ユウから聞かれた話を彼女は始める。

「ああ、聞きましたよ…… 授賞式はユウが出たんでしょう？」

「そうだ、男装を私が教えたんだ。まあトロフィーはそこにあるから問題はないだろう？」

彼女は左上にあるトロフィーを見ると、煙草を吸おうとポケットから取り出す。

「あのですね先生…… 問題がないわけが無いでしょう？」

今まで日を浴びなかった人間が、まあ一応、優勝したんだ…… それなのに…… なんでだよお！

やっぱり感情が抑えきれなくなった俺の感情のように、彼女はジリジリと煙草の音を鳴らす。

「たしかにな…… お前の日の浴びる瞬間を奪ってしまってますまない」

素直に謝罪をする彼女。なにか理由があったんだろうか…… なぜかこちらが悪いような気がしてならない。

「あ、すいません僕の代わりとやってくれたのに」

のんびりと寝ていた俺の代わりに出てくれたんだ。

そんなことよりも何か「裏」があるような気が、俺の中で感付く。

「そういえば、今日は私の家でバーベキューをしないかと思ったが…… その体じゃ来週くらいか？」

その感ずいたおれの考えを妨げるように、医療器具によって体の回復を促進された俺の体を見て、そう彼女は聞く。

とりあえず体は、おじいさんのようにがちがちになったものの、動けと思えば動ける。

「正直動けますけど、医者に聞いてみないとわかりませんね」

その瞬間、彼女はナースコールを押していた。

「ちょっと先生何してるんですか!？」

ジリジリジリジリと何回も押している彼女の手を止める。

「聞くならこうやって直接呼んだ方が早いからな」

すると、ちょっとした時間が経つと、5人ほどの看護師がこちらの病棟に駆け込んできた。

「やあ」

剣先生は、汗だくの看護師たちに、煙草の煙とあいさつをかける。

この人ってほんとうに……

それから俺の能力を知っているという医師が俺のところに来た。

そして剣先生と俺の間こえないような声で、会話をして、俺の腕に刺さっていた点滴針を抜いてもらった。

覚醒せし感覚《Awake Sinner》を使えば彼女らの会話を聞くこともできたが、さすがに使うほどの度胸も性格も悪くはない。

どうやら今から、退院ができるようで、看護師が準備を始めていた。

剣先生は、じゃあまた私の家と言われ、彼女の自宅へと帰っていった。

ああ、もうちょっとここでのんびりしたいような気もするなあ。そういえば着替えが無かったと気づき、せせこら動いている看護師のお姉さんたちを見ながら携帯端末で家の固定電話へとかけた。

3回のコールの後に、マイの声が出た。

「もしもし、佐部です」

「あ、マイ？ 俺だけど」

「オレオレ詐欺というやつですね、お金は振り込みませんよ」

「違うよ、俺だよ俺！」

「否定しても、この私にはお見通しです、この希望財閥…… あっ」

「あ、じゃないよ！！俺タスク！マイさんそんな貴重な情報ながしたらいけないでしょ！」

「もしかして、タスク？」

「もしかしてのタスクですよ」

「実際の声と電気を通した声とは全然違うじゃん！」

「そうなの？　そういえば俺退院できるらしいって」

「ぜんぜん声ちがうよ。退院？　よかった！　タスクと全然会えなかったの寂しかったよ」

するとずるっと、鼻ですするのような音が聞こえた。

「あの、心配かけてごめんな……」

「うん、よかった。今度こそ……　会えなくなるのかなって」

目を閉じて聞いていた俺は、数秒黙った後にこう告げた。

「マイ……」

「うん……　どうしたの？」

「あのさ……」

「なあに？」

「俺とずっと一緒にいてくれないか？」

「え、え……」

彼女の戸惑った声が聞こえる。

ああそうか、俺は……

強くはなれた、なら、誰かを。

マイを守りたいと、今思ったんだ。

「君が好きだ」

その告白に、電話越しから、彼女の口からポンッと空気が出たような音が聞こえる。

俺は彼女の答えを黙って聞いてみる。

「私も…… あなたが好きだよ」

その答えを聞くと、俺の耳あなから何かが沸騰したように熱くなっていくのがわかった。

体中も恥ずかしくなってしまったのか、内側から熱くなっているのがわかる。

それと同時に、うれしい気持ちが、体中に駆け巡った。

「マイ……」

俺はあまりの嬉しさに泣いていた。  
情けながらに、彼女の電話越しに、泣き声を聞かせてしまっ  
ている。

それを黙って彼女は聞いていた。

「タスク…… 私は財閥のお嬢様…… 将来はあなたのお嫁さん  
になりたいけど…… 私は一人っ子だし、何よりも私の大切な家族  
を裏切るような真似はできない。それでも…… わたしと一緒に今  
をいれる？」

そうだ彼女はお嬢様なのだ……

だけど、俺は彼女と一緒にいてくれるという問いに迷わず答えた。

「ああ、ずっと君を守るナイトになるよ」

彼女が誰と結婚しても、彼女を守るナイトになろうと決めた。  
君が好きだ。

「……わかった。至急あなたは、私のところに来て」

「はい、マイ様」

そうして彼女との将来永劫の契約が終わった。

俺は、誰かを守る誰かになりたかった。

なれただろうか、あの人のように。





マイは俺と肩を寄せ合うようにくっついたため、俺の靴と足の間  
にそのまま吐いた。

あ、靴下がああああああああああああ！！

70年代の酔っ払ったサラリーマンのように三人は、路地裏を歩  
いている。

ドラマでよく見るようなおっさんたちではなく、青年一人、女の  
子が2人だ。

掃除はしないかって？ 掃除は清掃ロボットという、ESP学園  
が独自に開発された、ルンパのような円盤型のロボットがやってく  
れるから大丈夫なのだ。

油性のスプレーさえも消してくれる洗浄力のためこの科学力も  
知れたもんじゃない。

「タスク兄さんって、ここで一番強くなったのにその風格が無いよ  
ね！？」

「わかるー！ でもそれがタスクのいいところって…… でももう  
ちょっとねえ？」

「ねえ！」

プークスクスと聞こえる。さすがに頭にきたため酔いが覚めてき  
た。

こいつら……ぐぬぬぬぬ……

「うるさいわいー！！」





天井にある蛍光灯に虫のようなものが飛んでいるように見える。  
見慣れたようなライトに、見慣れた鉄の壁。

「ちょっとタスク!? だめだまだ起きない」

ん? 舞の声か?

「マイちょっとビンタしてみてよ、ユウの力じゃ死んじやいそうだし」

「わかった」

ビシバシビシ!!

いた! 痛い! 超痛いっす!

「やめ……ろ」

声が小さいながらも、やめろと抵抗の意思表示を試みたが……

「やっぱりここは王道を征く水でしょ」

と、マイが同時に言ったため俺の言葉をさえぎっていた

そしてノリノリ、ヤカンに水を入れていた。  
ちよっとまて！ それをどうするんだ！  
やめやめえろおおおおおおおおおおお！！  
しかし俺の体は動かなかった。

「ほれほれほれーい」

本日2度目の意識を失った。



「君さあ、昨日退院したばかりでしょう？」

咎めるようにいう男性。

なぜ俺がこの白衣を着た男性に注意をされているんだろうかと記憶喪失の頭で考える。

これは……俺をこんな惨事にさせた人間を捜すミステリーが始まるのか！？

ということはないわけで、今俺は意識喪失でまた病院のベッドで眠っていた。

どうやら彼女らのおふざけが過ぎていたらしい、さすがに悪乗りも酷すぎるため会ったら制裁だこの野郎。

とりあえず意識は元通りになったため、半日寝て退院できるらしい。

医師様、迷惑をお掛けしまして、本当に申し訳ございません。

病院から家へと帰る道を歩いていたら、携帯端末にメールが入った。

「よう、昨日は楽しめたか？ 3時ごろに学習館に来てほしい。お前と話さなければならん用事ができた。マイさんも一緒に連れてきてくれ」

メールは剣先生からであった。

楽しめたの何も気絶させられたわけなのに、楽しいもあったものないよ……

2回も気絶させられたのに、まああいつらが楽しそうならいいか。彼女らは、いつも楽しそうなんだけどね。

しかし、マイも一緒に来いとは何かあったのだろうか？

直接行ってみなければわからないかと考え、てきとうに返信して家へと帰る。



自宅に帰ると、昼夜逆転生活でもしているのか、マイが眠って

た。

着替える途中で力尽きたのだろうとわかる、シャツを半分ブラがギリギリ見えなくもない位置で止まったまま寝ている。

横にいるユウはギリギリ全裸の状態で眠っていた。

つまりはそういうことだ。

スケベがしたくなるような欲求を抑え、彼女の肩を起こすために揺らす。

「マイさん、起きてー」

ゆらゆらゆらと揺らすと、腕の近くにある二つの球体も一緒に揺れる。

これにはタスクも、えっど幕府である。

小さい口からむにゃむにゃ、あと10分と声が聞こえる。

「お願い起きて」

できるだけユウを起こさないよう、彼女を揺らしている。

おっと手がすべった、彼女に生えている2つの球体を掴んでいた。

「あのマイさん…… 起きてくれませんか？」

ポヨンポヨンポヨン。これは手が滑ってしまったのでしょうかがな  
いわけで。

このシュウマイは服の上からでもわかる。良い張りとツヤ。

「あっ、やめ……」

小さい口から、ボヨンボヨンボヨン。

「……マイさん起きてください」

頭の中で胆略化されている固定文を投げるように、彼女に言っている。

しかし、手の運動は休むことがない。

「起きて起きて起きて」

その言葉に合わせるようにボタンのようなものを、何度も押ししていた。

いい加減にしると、自分に言い聞かせて、彼女の肩を優しく叩いた。

「頼む起きてください」

三回ほどして、彼女の目が覚めた。

「た、タスク？ おかえりい」

寝起きの目を擦ると、語尾のいやらしさに理性を働かせて、今日の用事を彼女に伝える。

うんうんと眠気と二日酔いがありそうなのに、気持ちよく承諾をしてくれた。

今は、2時半であり、剣先生との約束まであと30分ある。

二人は着替え終わり、剣先生がいる学習館へと向かう。

「そういえばもう八月も終わりだね」

彼女は、風で髪をなびかせると、俺のちょっと前を歩く。

若干、風の温度が冷めてきたなと思ったら、夏ももう終わりなのか……

「そうだね、ランク祭も終わったしもう少して九月か……意外とあっという間だったわ」

全ては、あの追試の授業からだだったなと、振り返ってみる。

まあよくここまでこれたなと自画自賛していいくらいにはな。

「マイは、普通なら高校三年生だっけ？」

「そうだよー。まあほとんど学校には行ってないけど」

学校に行っていない？ その疑問とともに前方の確認を怠っていたためか、犬のウン子を踏んだ。

「あーくっせ、あっ、これって犬のウン子！」

ギャグマンガの一コマのような、セリフと行動に、彼女が笑っていた。

「ははは、タスクって本当に面白いね」

彼女は、腹を抱えて笑っている。

そんなにまで笑うと、こちらまで笑ってしまう。

まあね！ と、ナルシストなお調子者のように答える。

「ほんとうに、タスクに救われてばかりだ」

その言葉とともに少しだけ前をあるく、彼女の髪は風で舞い上がる。

いま彼女がどんなことを思っているのかなんて俺にはわからない。けどこれだけは言っておく必要があるなと思ったんだ。

「俺も君に救われたんだ、君会えてないと、こんなにまで前には進めなかったと思う」

彼女の足はぴたりと止まり。

「ほんと？」

こちらを振り向くと、真偽を確かめる顔で、ただ一言、聞いてき

た。

「ほんとだよ、だから……なんていうんだろう」

照れくさくなってきたため、頭をかきながら絞りだすようにしてこう答えた。

「ありがとう」

頭を働かせた割には、もうちょっとあったんじゃないだろうか、そんなことを思う。

「マイこそありがとうだよ」

後ろに戻り、俺の両手を掴んで言った。

彼女の顔がしっかりと見える位置にある。

その顔は、恥ずかしながらもしっかりとこちらを見る。

「じゃあ、行こうか」

「うん！」



学習館に付くと、剣先生がいる職員室へと二人は向かう。

「先生、きましたよ」

ドアを開き、剣先生の座っている席を見る。

「おうタスク、マイさんは連れてきたか？」

ちょうど椅子に腰かけ、コーヒーを飲んでいるようだった。

「はい」

「失礼します」

二人は剣先生の前にある、用意されていた椅子へと座る。

「コーヒーを入れてこようか？ お二人方は砂糖は入れる派か？」

「いいですよ先生、僕が入れますよ」

「客人に入れるのは礼儀だぞ、だから座っておけ」

はい、と答え彼女の言葉にあまえた。

先生の背中が、事務室にあるガスコンロ部屋のドアで消えた。

「わたしき、剣先生のこと、最初は怖い人だなあって思ってたけど、面倒見がいい、良い人なんだとわかった」

その消えた背中の中のドアを見て、彼女は言った。

たしかに、俺みたいな人間をここまで育ててくれたんだから、身を持ってわかる。

「わかる、本当にあの人には頭があがらないからね」

「修行させてもらってたんだっけ？」

「そうそう、師匠みたいなものだね」

「なんだか、映画の主人公みたいだよねタスクって」

「そ、そう？」

「うん、かっこいいよ」

「えへへ」

いつの間にか、剣先生がドアを開けて、こちらに来ていた。

「ほら、熱いから気を付けるんだぞ」

熱が伝わらない、遮熱コップに入れてきた。

3人はそれぞれ、一口飲むと、剣先生から話し始めた。

「まずは、マイさんのことから話すぞ」

はいと、一言かえした。

「マイさんのお父さんから、昨日電話が入ってな。9月の学校には間に合うように帰ってこいとのことだ」

「はいわかりました」

マイは承諾すると、コーヒーを飲む。

「次にタスクだな、お前には新しいランクが設立された」

「新しいランク？」

「ああ、お前はここの生徒と比べると例外項目が多いからな、それと、ランク祭を優勝したためだ」

確かに俺は、普通の能力者とは違う。

「Aランクとか、Bランクとかではないんですか？」

「それではない、お前専用の特別ランクだ」

「特別ランク？」

俺が知っているような特別ランクは、SSSランクのようなバケモノクラスが、背負っているランクだ。

「ランクFALSE（ファルス）。略してFランクということだな」

「Fランクって、一周回ってきましたね……」

いい落ちが付いたなとそんなことを思ってしまう。

「フフツ たしかにな、何かあるなら評議員会に言うといい」

俺のうまい返しに、彼女は小さくわらう。

「まあ、FALSEってかっこいいですし、気に入りましたよ」

「そうか、それはよかった」

そう言い彼女は、コーヒーを飲んだ。

「あと、もう一つ」

「「なんですか？」」

二人は同時に発する。

「タスクをマイさんの護衛任務についてもらう」

「タスクが私を守るんですか？」

そうマイが聞くと、剣先生はうなずいた。

「そうだ、マイさんはまたどこかの組織に狙われる可能性が高いからな」

「よかった、まだ一緒にいられるね！」

マイが俺の方を見て喜んでいた。

「うん！ あのとときにあんなこと言ったのに、一緒にいられるのかと思ったけどよかったよ」

君とずっと一緒にいたいと言っていた俺。

ただラッキーだと思った。

「たしかに。あ、そうだタスクも学校行こうよ」

「俺も？」

「うん、いいでしょ先生？」

目を輝かせながら、彼女は聞く。

「まあ希望財閥に護衛任務の傭兵としてだからな。いいだろう上に話しておくよ」

「よかった。これからもよろしくねタスク」

「うん、こちらこそよろしくマイ」

それにて話は終わった。

これからまた彼女と暮らせる。

第1章完

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~25151](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~25151)

---

最弱能力者の英雄譚 ～二丁拳銃使いのFランカー～  
2020年11月03日 20時35分発行